569-167
1200501517774
569
167

5
1990—E

コ-3331
5あ
別
569
167

指紋

私の不幸な友人の一生に就ての怪奇な物語

帝國圖書館

R・Nは私の少年時代からの唯一の親友であつた。彼が二十の時に、その愛する藝術上の見聞を博めるために洋行をしてからも、數年間は折にふれて、パリから、フロオレンスから、ロンドンから、いろいろ面白い手紙を（それは私が今まで見た日本字で書かれた文章のうちの最も天才的なもの丶一つである）くれることを忘れなかつたが、彼がロンドンへ行つてから二年目、洋行してから六年目、一九〇七年八月十一日といふ日附のはがきを最後にして、それまでにだんだん文句の短くなつて行つた音信が、ばつたり絶えてしまつた。それでも、私はなる可く缺かさないやうに心がけて私からの手紙を出して居たのである。私の手紙は多分見て居たのであらう。發信者である私の手へ舞ひもどるやうなことは一度もなかつたから。併し、返事は一つも見られなかつた。私は私の唯一の親友の生活をかうして暫く見失つて居た。それを知りたいにも、その母を洋行前に無くして後の彼には、身寄りといふやうなものは一人もなかつた。さうして私にさへ手紙をくれないほどなのだから、日本に居る他の誰にも手紙を書いて居ようとは考へられなかつた。私は彼が異郷で戀愛にでも熱中して居るかとも想像した。それならば、何れそのうちに便りもあらうと思つて居たのに、それも空頼みであつた。

ざるを得なかつた。ところがそれから四年目である一九一一年に、七月十一日のロンドンのスタンプ（彼自身は日附も何もして居なかつた）のあるはがきで彼は、思ひ出したやうに私に宛てて歸朝する旨だけを手短かに書いて寄こした。その後カイロから、シンガポオルから、香港から、上海から、文句は何もない繪はがきをくれて、彼がロンドンから歸朝する旨を知らせてからやつと一年半ばかりを經た一九一二年もずつと暮になつてから、彼は思ひがけない私を訪ねてひよつくり私の玄關へ現れた。私は彼を一目見た瞬間に、「健康を害して居るな」と思つた。彼は全く精力を消耗し盡した人のやうに見えた。さうしてそれは決して旅の疲れなどとばかりは言へない程度のものであつた。彼はどう見ても三十位の人とは見えなかつた。さうしてその一種異樣なふけ方は、老人のやうでもあるし、又、壯者のやうでもあつた。表情は非常に鈍くなつて、ただ目の光だけが寶玉のやうに光輝燦爛として居るのであつた。さう言つただけでは、他の人にはその時の彼の容子は未だはつきりとは想像出來ないであらう。が、唯あまり愉快な容貌でなかつたらう位には推察してもらへるであらう。私は今はそれ位で滿足して置かう。

十幾年振りかで會ひながら彼は私に向つて決して樂しさうに話しかけようともしないのであつ

た。私は我我が未だ少年であつた時に、彼がいかにブリリアントな座談者であつたかを回想しながら、人間といふものはかうも變るものであらうかと疑つた。彼はただいかにも物憂げな調子で私の話しかけるのに答へた。健康を害して居るのではないかと私が尋ねた時にも、(正直に言ふと私は少し想像を逞しうして syphilis ではないかと思つたのだ) 彼はただ、「いいや」とけだるい一語を言つたきりであつた。併し私がこんなに打ち解けない彼に就て私に對する彼の友情を疑ふのはよくない。といふわけは、兎にも角にも、彼は日本に來ると最先きに私を訪ねてくれたのだから。解らないことはそればかりではない。その時彼は「東京に住むつもりだ」と言つて置きながら、二三日すると彼は不意に長崎へ行くと言ひ出した。私は最初はそれを「ただちよつと長崎へ行く」といふ意味に解釋した。長崎は彼の故郷であつたから。併し、彼は長崎で住むのだと言ひ直した時に、私は何故となく彼の言ふことが解らない氣持ちがした。彼は長崎の生れであつたけれども、幼少の頃から東京で育つた。それに彼は長崎には彼の不愉快な遺產相續の出來事以來絶交になつて居る親類があるといふので、以前からひどく長崎の土地までを憎んで居たからである。

彼はあたふたと長崎へ出發した。私は彼が長崎に着いたといふ報知だけは得た。しかも私は手

紙の返事を彼に書くわけには行かなかつた。といふのは、彼が出發の時の約束を無視して、私に彼の宿所を教へてくれなかつたからであつた。

十年前の打解けた親友は、今、私には謎になつて現れて來た。さうして若し彼がそれきり私の目の前に現れて來なかつたならば、私が最後に彼に會つた時の彼の印象から考へて、私もスピリチユアリストの仲間入りをして、私は私の最も親しい友達の幽靈と——しかもそれをそれとは氣つかずに、數日間一緒に暮したのだと考へたかも知れない。實際その時も私には何だかそんな氣持ちもしないではなかつた。けれどもそれから半年ばかりの後に、私は再び私の「謎の親友」が、長崎から歸つて私の家へ來たのを迎へた。

その時には彼は前よりはいくらか元氣がよかつた。さうして彼は、再び考へをかへて東京へ住むことに決心したこと、私に彼と一緒に生活する意志があるかどうか——即ち、その時には既に妻を持つて居た私の家庭へ彼が寄寓したいと言ふのであつた。

「さうすれば、私は君達の厄介になる代りに家を一つ建てゝ上げたいのだが……」

彼はさう言つて、それに對して即座の返事を與へかねて居る私に、私の顏をぢつと見つめながら嘆願する人の口調で、併しゆつくりと、低い聲で言ひ足した。

「ね……私をかくまつてくれ給へ。」

「私をかくまつてくれ」？　この言葉を、私が初めて彼から聞いた時、私は非常な大事を豫想せざるを得なかつた。と同時に、若しやR・Nは氣が違つたのではあるまいかといふ考へが、突然胸に浮んだ。けれども、彼の說明を聞いて居るうちに、私の心配と疑問とは、幸にも少しづゝ氷解されるやうに思へた。

彼は大要次の如き事を英語で話し出した——多分私以外の人にあまり聞かれたくなかつたからであらう。それともそんな風な話をするには、英語の方が適當だと考へたのであつたかも知れない。實際、その時はさうでなかつたにしても、彼はそんな風な藝術的感覺を、以前はよく實生活の上に活用させて居たものだから。私としては今ここでも彼の話を、彼の話したとほりのやうな英語で書けたならば、さぞ趣があるに相違ないと思ふのだが、私にはそれは出來ない。いや、いかなるその語學の大家でも出來ないであらう。といふのは彼のその時話した英語は、單純で明晰で、それで居て非常に混雜したリズムをもつた文字ばかりをわざわざ擇んだかと思へるやうな異樣な效果を持つた言葉であつたから。——それで、彼は言つた。

「何時であつたか、私が未だ君に對して手紙を書くだけの根氣を持つて居た當時私は、多分君に Thomas de Quincey の 'Opium Eater' を推賞したやうに思ふ。それともそんなことはなかつたかね？その前後のことだ。私は或る日ロンドンのイストエンドで一人の男に出會つた。その男はもとマドロスだつたといふので、今でも——その時でも同じやうにマドロスの風をして居た。私はその男と居酒屋で向ひ合つた。二人は互に親愛を示し合ひながら醉つぱらつた。醉つぱらへば醉つぱらふだけ一層親愛の度を加へ合つた、全く見ず知らずの人であつたけれども。今思へば、私はあまり多分の好奇心を持つて居すぎた……私の一生は多分、「人間はあまり澤山の好奇心とあまり少しの意志とを持つてはいけない」といふモオラルになることだらう。それはそれとして、私はその男に向つて、「私はこれから後とても何時でもお前と遊び度い」とそんなことも言つた。最後に「今夜はお前の最も面白いと思ふところへ私を連れて行け」とそんなことも言つた。それでその男が私を連れて行つたところは、何處であつたと思ふ？　それは阿片窟だつたのだ。私はそこへ入りびたりになつた。君は勿論阿片の醉心地といふものを知るまい——阿片の醉ひ Extravaganza だ。嗟！　少くとも、その藝術そのものの Ecstasy だ。五體のすべてを以て聞く美しい頃ではさうであつたのに！」

彼はさう言つて深い吐息をした。さうして暫くは何か物思ひに耽るやうにいかにも重苦しい憂

鬱の表情を示しながら、何かを底に堪へた夜の深淵のやうに沈黙した。それがいかにも意味深げであつた。その理由で私はその時の沈黙を忘れずに居たが、それは、餘程後になつて思ひ合されることがあつた。

暫くして彼は言ひつゞけた——

「私は三四年のうちに阿片丁幾の四千滴に相當する量を一日のうちに用ゐねば居られなくなつた。私には君に向つて手紙一行、はがき一枚書くだけの根氣もなくなつた。併し、私には、いい事か悪い事か未だ醫術上の野心も殘つて居た。さうして流石に阿片にばかり溺れて滿足して居れるほど、デカダンにはなつて居なかつた。私はせめてはその阿片の量をへらさうと努力した。けれどもそれも殆んど無駄であつた。私が日本へ歸らうと決心したのは、その時である。そこには阿片窟などといふものはない。私は早く其處へ歸つて健全な生涯に歸らう。私は思ひ立つた。佐藤君、私はその特魔睡の夢のなかで君の姿をよくありありと見たものだ……

「私は一日一日と延びて居る私の決心を敢然として實行することにした。さうしていよいよ歸朝の途に上る——正しい生涯に近づかうといふ前日、私はその夜、今夜こそこれが最後だと思ひながら、幾百度歩んだかわからない道——さうして普通の人は多分一生に一度も歩かないであらう

細い道を辿つて、天國への入口よりももつと狭い扉を潜つた。その地下室にはその夜もマドロスのゼエムス（あの男は確かさういふ名であつた）が、私の來るのを當てにして金を持たずに、其處に居るのであつた。私は彼に「もう明日からは私を當てにしては來るな」とさう言つた。ゼエムスはその理由を尋ねたから、私は歸國する旨を、正直に答へた。ゼエムスはお前の國には、こんな天國（阿片窟のことである）がなくつて可哀相だと言つた。私は答へなかつた。併しゼエムスはちやうど悪魔はかうもするであらうと思ふやうに私の耳もとで、その嗄れたぜえぜえ言ふ聲でうは言のやうに囁きつづけるのであつた——旦那のやうになつてはもう駄目ですぜ、とてもこの魔藥はやめられません。もしどうしてもお歸りなら、せめては港々へお寄りなさい。ところは皆私が教へて上げます、港々の阿片窟のあるところを。いや、旦那などのやうな金持にはそんなものは無駄だ。それより手とり早く、港へ下りたら、ポリスマンに、幾らかを握らせて——それは多ければ多いほどいい——さて空を指しながら、「彼處はどこだね？」と聞いてごらんなさい。空を指して見せるんですよ。それが合圖だから。忘れてはいけません。いや、大丈夫、外のことは忘れても、情婦の顔を見忘れても、阿片の事に就てなら何でも、一生忘れる氣づかひはないのだから、旦那は今、そんなことは一切忘れるつもりで居るだらうが。それで若し其處が見つかつた

らば——きつと見つかるから——その家の奴にさう仰有い。『日の窪の三つある髑髏』が教へたと。さう言ひながら、彼はシヤツの胸を押し開いて、肩のところの丸味を利用して入れ墨した眼窩の三つある髑髏をつき出して見せた。ゼエムスは悪魔のギタアルのやうな聲でもつと語りつゞけようとした。私はあまりうるさかつたから、金をたたきつけてやつた。……私は其の後、船室での幻に、極く平靜な月光の海上を進んで行く惡魔その物の船の高いマストに、眼窩の三つある骸骨のゼエムスが、蝙蝠のやうとぶらさがつて働いて居るのを見たことがあつた……

「私は船に乘る時に、錠劑になつて居る阿片を、わざと三千粒だけ手に入れて置いた。それは私には十五日分にしか當らない。私はそれを船のなかでこつそりと極く少しづつ用ゐて、だんだんと量を減しながら用ゐて、君と再び會ふ時にもうオピアム・イイタアではなくなつて居やうと心に誓うたからである。それを果して實行したかどうかを咎めるな。私は最初は、あの時ゼエムスが言つた言葉が本當だらうか、それとも嘘言か、或は金をせびるための出たらめか、それを確めるためだと、私自身に言ひわけをしながら、さうして實際多少はさういふ疑問をも解きたい好奇心から、又告白しなければならないが、私の阿片はもう殆んどなくなつても居たから、私は船がカイロへ着いた時に、上陸すると、思ひ切つてゼエムスの言つた通りのことをして見た。ところ

がゼエムスの話したのは皆本當であつた。私は日のことも何も忘れて其處の阿片窟で睡つて居た。私は船の出帆に乘り遲れた。私はコンスタンチノブルでも惡い日を費した。シンガポオルでも、香港でも、上海でも。その間でも私はだんだん量を減して行くようには努力した。私は決してオピアム・イイタアとして日本へ歸るまいといふ決心を飜へさなかつた。私の道德的な自覺からも、それ以上に又日本に阿片窟のないことの私自身にとつての不便を思ふことによつて。

「ところが上海に居る時である。私は、其處の阿片窟の支那人から『若し日本へ歸つたら、長崎M・B町十九番地の劉といふ支那人の家へ出入してやれ』と、さう言はれた。云ふまでもなく其處にも阿片窟があつたのだ。」

ここまで語つて來た彼は、不意に何か言葉がものに突き當つたかのやうに、驚いて口を噤んだ。私はただ彼の言葉にうつとりと聞きとれて居た。といふのは、彼の語り出す事柄が、それほど暗黑な事實でありながら、彼の言葉を通してそれを聞く時、現實的な力はすつかり消える代りに、何か童話風の詩を讀むやうな空想と感興とを私に與へたから。さうしてそれが一一彼自身の謎をも私に解いて行つたから。

けれども今になつて思へば、それは彼の生涯をもつて物語つた怪奇な物語としては、ほんの發

端に過ぎなかつたのである。

* * *

彼は根氣が無くなつて居るどころではない、寧ろ狂的に見えるやうな熱心と感興とを持ちつづけて居るらしく、他のすべてのことは忘れて居るらしく、家の設計を企て初めた。その間、彼は私にさへ一言も口を利かない日がつづいた。その設計を見た時に、これほど精細なさうして明確な、然も不思議な間取りの圖を見て、專門家は我々の前で驚いた。家は半年ばかりの間に南向の丘の上へ建てられた（それが卽ち今日私の住んで居るこの家である。大きくはないけれども、チヤアミングで、その上實に住心地がいい。これはあの當時外國から私にくれた彼の澤山の手紙と一緒に正しく彼のこの世に殘して行つた製作品の一つである）「阿片を用ゐることは絶對にやめる。しかしそれは卽座に出來得るものではない。私は少しづつ量を減じて十五ヶ月の間には、きつと絶對にやめる」さういふ彼の堅い言質を信用して、私の家は彼の爲めに彼一人の阿片窟になつた。さうして私自身も今では「阿片を食ふ人」をかくまつて居るといふ祕密を持たねばならなかつた。私はそれが洩れることのないやうにと思つて女中さへ使ふことが出來なくなつた。

Nはその點では私以上に用心深かつた。彼は七間ある家のうちの二室を彼自身のものにして使用した。そのうちの一室は家根裏であつた。さうして其處こそ、彼がその祕密を恣にする場所である。彼がどういふ風にしてそれをして居るか私は決してそれを見ようとはしなかつた。私はそんなものを見るのが怖ろしかつたのだ。若し一目でも見るやうなことから、知らず知らずにその方に近よつて、自分自身もオピアム・イイタアにならないとも限らない。私にはさういふ誘惑に對する脆い性質があつたから。こんなわけで私は阿片に就ては何の知識もない——R・Nの口から聞いた事以外には。併し乍ら、私は阿片の夢がどんなに不快にR・Nを襲ひつつあつたかといふことだけは、ここで述べることが出來る。私は夜中に、或は白晝に三階になつて居る家根裏の一室から、その床と二階の天井とを透して、さうして家ぢう全體に、むしろ私の世界全體にまで擴がりながら、彼の呻き聲が、眠つて居る、或は書物を見て居る私にまで聞えて來た。それは丁度死を面前に見て居る病人——寧ろ病獸のやうな物凄さで私を驚かせ、苦しませ、歎じさせ、心配させ、又正直に言へば腹立たせもして、それがあまり長くつづく時には、私自身さへもその聲に合せて呻り出しさうになつた。事實、さうしたことも屢あつた。或る日のごときは、どうしていいか解らなくなつた私をして、たうとうこの青髭部屋へ驅け込ませたほど、物凄く呻きつづ

け、叫びたてるのを聞かねばならなかつた。私はその時には彼に對する心配と自分自身の腹立ちとを兩方、等分に、同時に感じながら、思はずあの狹い急な家根裏への梯子を飛び上つた。併しあまりの不氣味さにしばらく其處に突立つた上、辛うじて決心をしてその部屋へ入らうとした。小さな扉には固い錠があつた。私は合鍵をとり出した——ひよつとすると、今、R・Nが死にかかつて居るのではないかと思つたから。私は扉を三分ほど隙けて、先づ一とほり內部を窺うた。その時は白晝であつたから、小窓から差し込む多の日光が、このうす暗い部屋のなかへ帶になつて流れ込んで、それの一端が、寢椅子に打倒れたまま身動きもせずに居る彼の橫顏へまともに照りつけて居た。その南の小窓はちやうど獄窓にそつくりであつた。その上にR・Nのいかなる觀念からであつたか、獄窓と全く同じやうな嚴重な鐵格子さへ嵌められて居た。それ故、部屋の床の上に晴れがましく當つて居る日影にも鐵格子の影が縞になつて投影して居た。その小さな日向には、彼の愛育して居た若い小猫が、平氣ですやすやと眠つて居た。その平然たる樣子が私には憎々しかつた。私は思ひ切つてつかつかと部屋に侵入して、R・Nを呼びかけた。彼は、呻き乍ら「何だ」と問ひ返した。彼はぶるぶると身をわななかせ、苦痛の表情で顏が歪んで、しかもそんな狀態に居ながら普通の狀態の人のやうに會話するのが、その時私には最も不氣味に感ぜられ

た。私は手をかけて彼を揺り起した。彼は私のその動作で初めて目を開けたが、私がいかにも不思議であるらしく、小兒が見知らぬ人に對してするやうな眼で私を見上げ見下ろして居たが、

「おお、佐藤君！」

不意にさう叫んだ彼は寢椅子の上によろめきながら跪坐した。さうして私の體を抱くやうにして、彼はさめざめと泣くのであつた。可哀さうに、かうして私の友達は頭が腐つて、狂氣しかけて居るのだ。さうに違ひない。と私はその時さう感じた。さうして私もつひセンチメンタルになつて涙がこぼれさうになつた。

けれども、これらは彼の極く惡い狀態に居る時であつて、そんな狀態は一週に二度多くて三度位しか無かつた——呻り叫ぶやうなことはきつつあるやうに見えた。平靜な日も（それが何の加減であるかを私は知らない）十日に一度はないではなかつた。その日には、彼の童話風の空想と壯麗とを無制限に含んだ彼の見聞談や、或は實に奇妙な事柄の上に奇妙に組立てられた——それで居て明晰に私を同感させるやうな奇論を私に聞かせて私を蠱惑した。實際、彼の意見は事毎に不思議であつた。しかも彼自身にとつてはそれは極く平凡な普通な見解としか思つては居ないらしかつた。一例を言へば、活動寫眞に就て

である。彼は活動寫眞を藝術の最も新しい立派な一樣式だ、さうして科學が藝術に向つて直接寄與した唯一のものである、それは白日夢の喜びを最も確實に實現した、一個の別世界をわれわれの前に啓示し、開展した。と斷言した。それはヴアルガアな、グロテスクな、またファンタスティクな、現代の人のみが知る美だ、と說いた。それに就て、彼はながながと私にそれの理由を說明して聞かせた。それは何等の間違つた點のない立論で、且つ一篇の散文詩のやうな議論として私をよろこばせた。(私はせめてそれだけでもここへ書いて見たい。しかしこの原稿の紙數や締切りやの關係から、必要な道草も喰つて居られないことを遺憾とする。併し、何時か好機を得て彼が私に聞かせたうちの私を敬服させた事柄を、彼の代りに私が書き列ねるであらうことを約束する。)

彼はさういふ議論だけではなく、實際に於ても活動寫眞を異常に愛好して居た。子供がさうする以上に愛好して居た。活動寫眞はアヘン片の夢のなかの極く平凡なものに似て居る。私はオピアム・イイタアとしての初期にはあれ位のものをよく見たものである。それが私にとつてはなつかしくもあり、悲しくもある——と彼はそんな事を言つた。さうして一ケ月に精々一度ぐらゐ、彼が外出出來るやうな日には、必ず私や私の妻を淺草へ誘ふのであつた。私の妻はこの半狂人と一緒に町を步くことを、否、一緒に住んで居ることをひどく好ましく思つて居ないらしかつた。その上

それを言ふことを私にも遠慮をして居た。それが私にもよく解る。又無理のないことである。それ故、彼が外出しようと言ひ出す時には、たとひそれがどれほど私にとつて多忙な日であつても、何時でも彼を連れて外出するのであつた。それが私のこの友達への義務でもあり、同時に又私の妻への義務であつた。

或る日であつた。私はまたしても淺草の活動寫眞へ彼のお供をしなければならないことになつた。私は彼の擇ぶままに、D館の『女賊ロザリオ』といふ寫眞を見ることにした。氣がついて見ると、その日は日曜だつたものだから、我々は電車の中でも、D館のなかでも滿員の人込に苦しめられた。『女賊ロザリオ』といふのは(見た人もあるかも知れないが)米國のグリイン・フラグ會社の傑作だとうで、表題のやうな女賊を頭にした盜賊達の出て來る探偵物で、筋はあまり目さきの變つたものではなかつたが、畫面のとり方にはなかなか繪畫的な、それで居て淸新なところがあつた。それから、女賊になる某といふ女優は、辯士の說明によると「當時米國に於けるヴンパイヤ女優の權威」なさうだが、成程なかなかチヤアミングであつた。殊に男裝のやうな乘馬服で出て來るところが就中よかつた。R・Nはフキルムのとつつきから——あの綠の旗がひらひらと風に飜るグリイン・フラグ會社のマアクを見る時から、既にもう白晝の幻を樂しむ人のや

うに、場所も、時間も、傍に私の居ることさへ忘れたらしく、恍惚と見入つて居るのであつた。そのいかにも癈人らしい喜び方の表情が、寧ろ私を悲しくした——この時ばかりではなく、いつもこんな機會にはさうではあるが。……畫面はずんと轉展して行つた。ちやうど、女賊ロザリオがその子分の運轉手ジョンソンといふ男と、或る酒場の片側で何かのたくらみを耳打ちするところであつた——畫面は彼の表情を見せるため大映しになつた。初めはロザリオの顔だけしか見えない。ロザリオは見かけはいかにも可憐で高貴で若い貴婦人のやうな顔を、強い光の逆光線のなかで、我々の眼の前へ大きく現はした。さうしてにつと皓齒を見せて笑ふ。その顔は實際妖艶であつた。ロザリオの命令を承知したジョンソンが、大きく頷き乍ら、その凄い笑顔をひよいと見物の方へふり向けた。……

「お！」

突然、こんな低いけれど鋭い叫びと一緒に、私は、むづと私の片腕をつかまれて驚いた。

「おい、君どうした？」

私は思はず動悸を高めて、私の腕をそんなに強く捉へたR・Nを、うす暗がりのなかに凝視した。こんな人込みに蒸されて、R・Nは寒さでもあり、てつきり發狂したと思ひながら。R・N

は、併し、

「いや何でもない。何でもない」

さう言ひながら、私の二の腕を離すと直ぐその手で彼の額の汗を拭うた、別段暑い筈はなかつたのに。私は、彼のその二度目の聲が案外落着いて居るので少しは安心もした。私はもう歸らうと言つたけれども、彼は返事さへしようとはしなかつた。彼は再び熱心に、けれども以前のやうにうつとりと見恍れるのではなく、眼を鋭く光らせながら眺めつづける樣子だつた。……ロザリオの盜賊團は、日常決して手袋をその手から外すことがなかつた。けれども運轉手ジョンソンの手袋は何時の間にか擦り切れて居た。それを、その職業のために指の感覺が幾分鈍つて居るジョンソンは少しも氣づかなかつた。さうして或る犯罪の場所へ、うつかり指紋を殘して來た。その指紋が再び大映しで、顯微鏡下の或る黴菌か何かのやうに不氣味なほど擴大されて、見物の目の前へ現れた。

「よし！　さあもう歸らう」

R・Nは、再びこんなことを叫びながら、私の腕を捉へると、それをぐつと壓へ、犇き合つて居る見物をどんどん押し分けて、私を外へ連れ出さうとした。

「嗟、R・Nはたうとう本當に氣が違つた。」私は心の中でさう呟きながら、彼のするとほりになつて外へ出た。最初、私は彼が私をどうかするつもりだらうと考へたのだ。が、別段そんな樣子もない。外へ出て白晝のなかで見ると、R・Nはその疲切つた顏の上に何だか薄笑ひをさへ帶びて居るのである。併し、彼は默々として、あれきり一語も言はずに私と列んで歩いた。列んで電車へ乘つた。それから彼が再び口を利いたのは、私が須田町で彼に乘り換へを促した時であつた。彼は私が立上つても、やはり坐つたまゝで、「私は丸善まで行く積りだ」とさう言ふのである。私はこの狂人をどうするわけにも行かなかつたし、さうして私も彼に從つて丸善まで行かなければならなかつた。丸善の前まで來るのを待兼ねて彼は立上つた。眞先きに電車を下りた。丸善のあのU字形の階段を、彼は駈け出さんばかり性急に上つて行つた。

「フランス語か英語かで書かれたもので指紋の研究のオオソリテイになる書物はないか」彼は店員に向つてさう尋ねた。さうして店員は、英語にもあるにはあるが、獨逸語ならば更にいいのがあると答へた。R・Nは、それならばといふので英語でも獨逸語でもそれに關するものならば皆買はうと言つた。さうして可なり大部な書物も二三册あるにも拘はらず、R・Nは未だそれだけでも滿足出來ないと見えて、その他のそれに關する研究書目をすつかり調べさせて、それらの

書やら辭書やら、それに店にあつた例の指紋の書物の七八册をも加へて、殆んど積上げて二三尺もある程の買ひ物をした。そのうちの英語で書いた一册だけは彼のポケットへ納めて、あとは出來るだけ早くとどけるやうにと言ひながら、彼は私のアドレスと私の名前とを書き殘した。（この時ばかりでなく、何か名告りをしなければならぬやうな場合には、彼は大てい私の名を告げて居たやうである。亞米利加ローサアンゼルスで發行される週刊の活動寫眞雜誌も私の名宛で、彼のところへとどいて居たから。こんなわけで、若しこの文章が自然、丸善の店員諸君の誰かの目に入るやうな機會があつたならば、序に言つて置きますが、あの時、奇妙なちよつと讀む人の少ない書物をあれほどつさり買込んだ奇特な研究家で、且つ奇特な購買者は實は私ではなかつたのである。それ以來、丸善では今でも私宛に雜誌「學鐙」を送つてくれて居るから、ちよつとこの機會に此處へ書いて置く）その不思議な熱心な指紋の研究者は、改めて言ふまでもなくR・Nである。彼は丸善の店を出るや否や、もう電車のなかからそのポケットのなかの一册を耽讀し出して居た。

その後二三ヶ月の間、私の不幸な狂氣の友人は、何の爲めであるか、再び家の設計にとりかか

つた時の——否それよりも幾層倍かの狂氣の熱中をもつて、指紋の研究に全く沒頭して居た。最も私を驚かせた事は、彼が獨逸語の書物を讀むために、獨逸語をわざわざ研究し初めた一事である。しかもその結果が實に超自然的であるのを見て、私は更に更に一驚を喫しなければならなかつた。いかに英と佛の二國語を既にマスタアして居るとは言へ、この狂氣のR・Nは二十日足らずで、自由にその獨逸語で書かれた讀物を充分に讀みこなしたからである。好んで誇張して言へば、語學的才能の全くない私は、あの使徒行傳のなかの奇蹟——主が昇天して後、四方に傳道した彼の弟子達がその地に到るや否や、直ちに異邦の言葉を解し得たといふ奇蹟をまのあたりに見るやうにさへ思つた。それ等の彼の讀書の間を、彼の非常に愛して居た猫は、ぢつと彼の書物の前に坐つて、彼の主人と一緒にその書物を眺めて居るのを私は屢屢見た。

私は妻にもいひつけて、決してこの不幸な友人の心に逆はないように、尚この上にも注意せよと告げた。

* * *

或る日、突然、この指紋研究家は長崎へ行かうと、厄介なことを言ひ出した——今度は阿片を吸ひにではない、是非とも君にも行つて貰はなければならない、とさう言ふのである。もう秋の初めになりかかつて居た。私は二科會展覽會へ出品するかも知れない心組で描きかけた、私の畫を打ち捨ててでも、やはりこの狂氣の友人に同行しなければ氣が濟まない。氣候の關係であらうか、否、それよりも指紋研究に凝り固つて以來、不思議と阿片を用ゐたり呷つたりしなくなつた彼は、その頃ではよほど活氣づいては居たけれども、私としては未だ彼を一人でそこへ行かせるわけには行かない。私は同行した。R・Nは例の通り汽車のなかでも、重苦しく押し默つて、その代りには、彼は彼自身の指でもつて、絶えず彼自身の眼前の空間へ文字を書いて居るのであつた。始め私はそれを何か唐草模樣かとも思つた。しかし氣をつけて見ると、それは、

If If If If

If If If If

If If If If

とその同じ文字を幾度でも、書いて居るのだつた。それが幾時間かつづくとそのうちその單語が何か別の文句に變つたやうだ。道連れはありながら話相手もない徒然な汽車のなかで、私はそんなものをでも觀察して居るより外に仕方がないのであつた。始めその文句は一向解らなかつた——

——何しろ非常に早く空間に書かれる文字なのだから、然もその上にそれが熟練されない私の語學だから。けれどもそれは少しは讀めるやうになつた。それは私の觀察を誇ることには決してならないであらう。寧ろそれ等の文字がどれほど繰返し繰返しされたかといふ事實を示すだけだ。空間の文字は幾百哩かの間を次のやうに走つた——*Provided that there are two finger patterns quite similar ……*後はどうしても解らなくなつた。「全く同一の指紋が二つあるものとすれば……」やれやれ、まだ指紋のことだ。一體R・Nは何を考へて居るといふのだらう？　そのうち彼の氣分が私自身にまで乘り移つた。*Provided that there are two finger patterns quite similar ……*私は口のなかで言ふ、それが口について私を困らせる。廣島を過ぎたころには、私はそれをつひ口にして言つた——*Provided that there are two finger patterns quite similar ……*するとR・Nは耳敏くそれを聽きとつたが、別だん、驚いた様子などはなく、即座に日本語で答へた——屈託げに

「さうとも。だが、實際はたつた一つなのだ。それが問題の中心さ」

私はR・Nの意志の儘に、決して途中下車などをせずに、下の關へ來ても連絡船を待合すほんのここ二時間ばかりで、眞直ぐに長崎まで彼について行かねばならなかつた。

出てから三日目(？)の朝に、長崎の停車場へ着いた。彼は私にあたりを見まはす餘裕さへも與へようとはしないで、大股に歩き出した。丸善の二階へ登つた時ほどの早足であつた。停車場を出ると目の前へ眞一文字に開いて居る海岸に沿うた片側町の大通りを、眞一文字に南の方へである。さうして五六町（か或はそれ以上）も歩いた頃、彼は尙も眞直ぐに歩みかけて居た足を少し引き返しながら、「こちらへ曲らう、その方がいい」と獨言のやうに又私に相談するやうに言ひながら東の山手の方へ直角に曲つた。その路は巾三間位の堀割に沿うて居た。その高い山が目に爽やかに聳えて、その中腹には寺の山門のやうなものも見えた。太陽はその山から少し高いところに登つて居た。船の汽笛が聞えて來る。學校通ひらしい子供がちらほらと見えるその道を、又二町も行くと、今度は古い比較的丸く反れた石橋——それには四角な石の欄干もついて居た。その橋を渡る時に、後をふりかへると、高く黒く聳えた教會堂の塔の窓がらすが一枚目に眩しくぎらぎらと反射してゐたことと、それからその橋の下を覗くと未だ青い到底食ふことは出來ないやうな蜜柑が、ちやうど今そこへ投げ込まれたやうに印象深く水水しく、折からの上潮に色鮮やかに漂うて居るのとを私は見た。もう一度南の方へ曲つた我我は、砥石のやうな自然石をでこぼこに疊んだ細い不規則にくねつた道を歩いた。小鳥の籠を軒につるして居る家が右側

にある。小鳥は囀つて居た。道は少しづゝ勾配になつた。それは長崎の古い市街らしく、小さな家ばかりで穢いけれども趣のある町であつた。勾配を登りつめた時に私は腰を延しながら、立上つて、ポケットから出した煙草へ火をつけた。家と家との間から港の海とそれを包んだ岬の一角とが、三尺ほど見えた。さすがに少しは疲勞したのであらう、R・Nも其處では私と一緒に立ちどまつた。けれども私より先にまた歩き出した。石疊のある道は山の中腹を半圓形に曲つて山の側面へ出ると、太陽が眞上から我我の顏にあたつた。兩側の家は今までのうちで最も汚く、道は市街の中とは考へられない野蠻な傾斜で滑るやうに落ちて行く。工場の鐵板をたゝく音が港らしい氣分をもつて町全體を震はせ、睡眠不足の私の頭にかんかん響いた。道は全く平になつた。N・Rは何か私に言ひかけたけれども、今度は私の方で口を利くのが厭やになつた。小さな支那料理の店が殆んど軒並に、五六軒おきに見られるところへ來た。R・Nは少し自信がないらしく左へまがつたが、五六町行く。

又左へ曲つた。さうしてすぐ右に折れた。其の道は今までのそれと同樣にやはり石甃のある併し今までのそれよりはもつと狹くつて精々一間位の路次であつた。その路次が三四軒一直線に、道といふより深い溝渠の感じで暗く連り續いて居た。それからはよく覺えられなかつたが——私

の不注意と、それ以上にその道筋の複雜とに依つて——我我はやがて一軒の家の前に立つた。「ふん、空家になつた」とさう言ひながらR・Nはその空家の隣りである家へ這入つて行つた。そこはバアであつた。今起きたばかりの樣子で、顏にそばかすのある三十女が、やつと掃除の塵の納りかかつた部屋に立つて居た。その女は外國人であるかは解らない。但し、英語で茶をいひつけたR・Nの言葉に從つて、我我に紅茶を用意した。茶をもつて來た女にむかつて、R・Nは何か簡單な、しかも私には判らない言葉を言つた。女も同じやうに私に判らないことを言つた——何れも英語ではあつたけれども。多分、私の直覺では二人はあまり上品でない常談でも言ひ合つたらしい。女はそれを言ひながら我我の傍の椅子へ腰かけた、さうして兩肘を卓上について二重になつて居る顎を兩手の拳の上へ乘せた。R・Nはそれを見ながらポケットからシガレットケエスを出して、それを彼の女の前へ、その木の卓の上へカルタを打つ人のやうな手付で投げ出した。さうしながらR・Nは、計に喋り出す。私には大抵はよく解らない。早口でもあるし、俗語ばかりのやうでもあるから。併し乍ら、いくらか解るところもないではない——例へば、「隣の空家はあれは貸家であらうか」「然うです。けれどもあんな家を借りてどうなさるの」「私はお前さんと同じ店を開いて競爭しようと

思ふ……兎に角、貸家か？」「貸家は貸家です。併し、借りる人もなければ、借りたつて住めるものではない」「何故？　そんなに荒廃して居るのか」「否、併しあそこは荒れて居る以上だ。あの家は化物が出るのです！」「化物！　そんな馬鹿なことを私は信じない」「あの家では夜中に天井から血の滴るのを見た人もある。その滴る一滴一滴の音だけならば彼處に住んだすべての人が、五家族——少くとも二十人の人が皆一様に聞いたといふ。私はそれを彼等自身の口から直接聞いた。彼等は皆一週間以上を越えて住むやうなことは決してなかつた。今では隣人で、この家に就て知らぬ人は何人もない……」「この今の家主は誰だ、何町の誰だ？」「家主は知らない、けれども日本人の床屋へ行けば解るだらう」「……」何か言ひながらR・Nはそれを木の卓の上へ投げた。それがびんと一つ跳ね上つて床の上へころげ落ちる。彼はその代にもう一つの五十錢銀貨をとり出した。女は愛嬌笑をしてそれを二つ拾つて居る。R・Nは傍に居た私の存在をも忘れて居たらしく、一人すたすたと店を出た。「ふむ、血が滴る？　血が滴る？」とさうひとり言を呟きながら、その店と先刻の空家（これが多分以前の阿片窟ではないか知ら）との間の、巾四尺程なやつと人間一人だけが通れるほどの路次へ入つた。路次を出た。其處はすぐ掘割で、あの空家やバアの裏壁との間に一間か九尺か位の空地を

殘して居る。路次の出口と殆んど一直線に、同じく巾四尺ほどの木の粗末な橋が二間ほどの掘割を向側に渡して居る。その出口と橋との間の空地へ來ると、R・Nは不意に其處へ停立した。其處へ突立つたまま、何か方角を考へて居る。

「そんなところへ突立つてどうしたのだ？」

「ふむ、此處かも知れない、ふむ」彼はさう言つた。併しそれは私に向つてではない。彼自身のひとり言なのだ。それから、小汚いバアを出てから、今初めて私の存在に氣づいたらしく、私に向つては次のやうな事を言つた。

「君。ここを覺えて置いてくれ給へ！」

さう言つた彼は、彼自身の立つて居る場所を、彼自身の靴の下を指した。それから二三歩後ずさりして、彼の蝙蝠傘の尖で地上へ地面を愛撫するやうにそつと×印をした。さて橋の方へ歩き出した——「土は汝の上に輕かれ」（それは外國で人を弔ふ言葉なのだ）と呟きながら。もうこの男のすることは、解らぬことだらけだつた。けれども、就中、この一年間の前後を通じてこの時のこのしぐさや表情ほど私に不可解なものはなかつた。それには何か深い意味がありさうに其時私は考へた。が、すぐそれを打消した、どうせ氣違ひのすることだから。其上に私自身に關して

言へば、私は不眠不休の旅行の爲めにたうとうよほどの神經衰弱になつてしまつたから。こんな日が若し十日もつづかれたら、私自身もR・Nと同じやうになるに相違ない。

R・Nは直ぐその「日本人の床屋」を見出した。彼は私に通辯せよと言つて、さうして、「あの堀の向うのお化けの出る家は君が差配をして居るのか。それならば、私はそんな噂などには一向無頓着だから、それを借りるかも知れない。面倒だがちよつとなかを見せてくれ」とさうその床屋へ私を通じて申込んだ。不愛想な女房は、我我が今通つて來たとほりの道を案内して五つ六つある鍵をぢやらんぢやらん言はせながら前に立つて歩いた。さうして、再び狹い木の橋を渡り、×の印のあつたところを通ると、あの空家の裏口を開けて、我我を先づ這入らせ、彼の女はその扉のところに、我我の物好きをうるさがるやうな顏付きで立つて居る。うすくらがりの家の中は黴臭かつた。どこかでこほろぎが鳴いて居た。今我我が這入つて來た扉からの光線をたよりに、R・Nは、一つの窓を開けた。金に輝いた太陽の光が愉しさうに部屋のなかへ舞ひ乍ら流れ込んだ。私はいつか私の家のR、Nの青髭部屋を覗いた時のことを思ひ出した。さうして早く家へ歸つて、或は、家へ歸らなくとも、一度ぐつすり眠りたい欲望で一杯になつて來た。R・Nは我我の思惑には一切無頓着で熱心にあたりを見まはして居る。家は表は古い煉瓦造りで、內部は大部分木造になつて居る。又、殆んどすべてが古煉瓦を疊んだ土間である。

「君このうちをよく覺えて置いてくれ給へ。君をわざわざ此處まで連れて來たのは、この家を見せたかつたからだ」

R・Nは私の耳もとでさう囁いた「見給へ、天井（指さして）は古い。その割合に床（見下して）はごく新らしい。この家は三四年前に手入れをした筈だ——ちやうど私が君の家へかくまつて貰ひに行つたころにね」言ひつづけながら、彼は私を家の或る一隅へ、今は臺所になつて居るところへつれて行つた「ね、以前はここに入口があつたのだ——窖の入口が。だから見給へ」彼は彼の蝙蝠傘の尖でその床を、とんとんとたたいて見せた、又二尺ほど距つた他の部分も。その二つをたたき較べた「どうだ。このとほりだ、少し注意すれば音が違ふのに氣がつく筈だ」正直に言ふと私には音の違ひがよく解らなかつた。彼は直ぐ私のその心を見抜いたらしく、「君には未だよくわからぬやうだが」さう言ひながら流し元のところまで歩んだ。その流しといふのは二方は家の壁を利用し、他の直角な二方はやはり古煉瓦を積み上げて、その上に木の板を幾枚か張り合せたものだつた。その流しは新しく（卽ちR・Nに憑れば四年前に）出來たものと見えて、板の張り方などは極くぞんざいだつた。且つ新らしい板は住む人がなくて水を流されない爲め板と

板との間にすき間が出來て居た。R・Nは目敏くもそれを見て置いたと見える。何をするかと思ふと、彼は絹絲（？）で出來て居る彼の手袋の片方をとり出してそれを噛み解ぐした。手袋は縷と解けて、卽座に一間以上の絲になつた。どうするのかと尙も見て居ると、彼は彼の時計の鎖について居た金のメタルを外し出した。それが外れると、例のか細い絲の一端へこの金メタルをさげて、それを流しの板と板との隙間から落し込んだ。金メタルの重さに引かれて、流しの板の上にほぐし重ねられて居る糸はするすると滑りながらだんだん下の方へ呑まれて行く。彼はいかにもその卽座の思ひつきに滿足したらしく、私の顏を見ながら會心の笑を洩すのであつた。實際その時は私も思はず叫んだ。

「成程！　ずゐ分深い。この床下は！」

その時、ちやうど今までは扉のところから放れて何處かへ行つて居たものと考へられる例の床屋の女房は、

「未だ、御覽なさいますか」

さう、多少訝しさうに、又多少腹立しさうな大聲で、扉からなかを覗き込んで叫んだ。その聲が、妙に家のなかへ陰慘に反響した。R・Nは未だ先刻の笑ひを浮べたまま私に囁いた。——

「あの女に金を一圓ばかりやれ。それから一二分間、いい加減なことを言つて斷つて居てくれ。私も直ぐ出て行く」

私は彼の言ふとほりにした。女は辭退し乍らその金を受けとつた。R・Nも直ぐ出て來た。女は我我に對してあまり無愛嬌だつたと氣がついたらしく、私には聞きなれない長崎地方の方言でやはりあんな家は借りなかつた方がいい事、その家に起る怪事——それは物好きな人達が試みにその家にとまる時には決して何の變事もないのに、いざ人が住んだとなるや否や、直ちに噂の通りの怪事——夜の九時頃から二時頃までは毎夜必ず天井から血の滴る音がすること、……などを納辯な口で話すのであつた。R・Nが今更のやうに非常な注意と陰氣な表情とでその話を傾聽して居るさまは、目立つて私にも看取出來た。我我は直ぐ床屋の女房とは別れた。その時R・Nはさも心配さうに言つた。

「おい。あまり急いで糸をたぐり上げたので、金メタルは糸から切れた。寫のなかへ落ちてしまつた。どうしたらいいだらう」

「そんなに惜しいものかい」

「いやメタルなどは何でもない。だがあんなものを落して置いては危險だ。足がつくからね」

「何だ？」

彼は私の問には答へようとはしなかつた。さうして辻待をして居た人力車を手を擧げて呼んだ。車夫はR・Nを見ると、'where?' と變な英語で尋ねた。（それは無理もない事であつた。もと外國人風の顏立なとこへ、永らく洋行して居たのでR・Nはその風采に於て日本人より外國人に近かつた）R・Nは「ステイション」といふ。我我の車は東京の日本橋の裏通りの或る部分や、下谷の何處だかによく似たやうな町を通つて居た……餘り疲れて居たので私は車の上で居睡りをして居たと見える。車の梶棒が下りたので私は始めて目が覺めた。我我はもう「ステイション」へ來て居た。R・Nが車夫に 'where?' と聞かれた時、「ステイション」と答へたのを、私は彼がその附近へ宿をとることだとばかり信じて居た。ところがさうではないらしく、「三時十五分にも汽車がある」などと云つて居るのを見て、私は驚いた。

「ねえ君、一晩ぐらゐは何處かへとまらうぢやないか。私にすれば折角來たのだから少しは見物もしたい。それに第一非常に疲れ切つて居る。今も車の上で眠つた位だ」

「それはさうだらう。だが眠るのは、博多か門司か廣島か大阪か京都かにしよう。いや一層のこと東京へ行つてゆつくり眠らう——成るべく長崎から遠いだけいい。實は長崎は私にとつて本當に厭やな記憶があるのだから。どうぞ勘辨してくれ」R・Nはそんな事を言ふ。それから、彼はポケットを捜しながら、「さうだ、忘れるところだつた——僕も大分疲れて居る——これを出さなけや」見ると、彼は豫め用意して居たらしい、二通の外國行きの手紙を持つて居た。

「この手紙こそ僕の運定めだからな」

私には今更のことだが、何のことだか解らない事ばかりだ。この暴君のやうな、氣違ひのやうな、又非常に多忙な探偵のやうでもあるこの友達のおかげで、私はたうとう長崎も見ず、眠る間もなく——食事は朝も晝も停車場の食堂で食つたが——三時十五分の汽車に乘らねばならなかつた。汽車へ乘ると頭は一層混亂する。來る時汽車のなかで覺えた例の奇妙な文句が、汽車に搖られて居ると何時の間にか、車輪の音と調子を合せて思ひ出され、それが口について私を苦しめ出した——Provided that there are two finger patterns quite similar……Provided that……Provided that……that……there are……（以下何百遍でも）……R・Nの畜生め！　私をも氣違ひにするつもりか！

*　*　*

珍らしくも突然私の部屋へ入つて來た彼を見ると、手に二つ折りにしてひろげた雜誌か何か持つて居る。それは或る日の灯ともし頃だつた。彼はその手にしたものを、私の目の前へつきつけながら、何時にない活氣を帶びて言つた。

「これを見給へ！　これを！」

實をいふと、その頃には既に彼に對しては心配や不安を通り過して寧ろ彼の一擧一動に好奇心を動かし初めて居た私は、彼の言ふままにそれを手にとつて見た。何だ。又、あの活動寫眞雜誌か。そこには十五六行ばかり、赤インキでアンダアラインした場所がある。インキの色は新らしく極く鮮かで、その英文は譯して見ると大體次のやうな意味だ——

ウヰリアム・ウヰルスン氏、その人はグリイン・フラグ會社の專屬俳優にして『ＸＹＺ』を初舞臺として、『女賊ロザリオ』『汽車泥棒』其他の映畫に現れて、端役ではあつたとは言へ、江湖の活動寫眞愛好家に依りてその深刻なる藝風を認められ、それに依つて多大の將來を囑目され居たるウヰリアム・ウヰルスン氏は、十月二十七日突然行方不明となつた。その原因は全く知るべくもないけれども、彼は元來英國風の姓名を名乘るにも不係、獨逸人らしき風貌を具備して居る點より判斷して、時節柄多分獨探なりし者が、それの發覺の心配のために、この怪しむべき擧動に出でたるものなるべしと評判されて居る。何は兎もあれ、我我は活動寫眞愛好者の立場よりして、この有望なる少壯俳優を、突然我我の眼界から見失つたことを最も惜しむものである。その間私の眼の動くところをぢつと凝視して居たＲ・Ｎは、私が讀み終つたのを見るや否や、言つた。

「おい、そのウヰリアム・ウヰルスン氏といふのは、そら、『女賊ロザリオ』の中で運轉手ジョンソンになつた男だぜ……まあ、私の部屋へ來たまへ。君は私を狂人だと思つて居るやうだが、或は本當にさうかも知れないが、私は今日こそ君に對して、私が君の家にかくまつて貰つて居た本當の理由を告白するつもりなんだから」

彼の部屋へ誘はれた私は、彼の机の前で彼と相對して腰をかけた。彼は暫く、ほんの二三分、默つて考へ込んで居たが、それは今から私に告げようとする事柄の順序を考へて居たのだらう。彼は不意に立上つて、先づその混亂した部屋の片隅のトランクの上にあつた彼の手袋を拾ひ上げた。さうして、その双の手袋をばたばたと打合して塵を拂ふと、何のつもりだかそれを兩方の手にはめた。（今のさつきも、彼は私が彼を狂人だと思つて居ることを狂人らしい敏感で看破して、不平を言つたが、實際彼のすることは、この通りに一つ一つ狂人らしいのである）手袋をはめる

と、彼は再び机の方へ歸つて來た。さて鍵を下して居る机の抽斗を手袋のはまつた幾分不器用な手つきで開けると、中から大事さうに一つの金色の時計をとり出した。手袋のはまつた手でそれの龍頭を押すと、兩蓋の時計の文字板のある方の蓋がぴんと開いた。さて初めて氣がついたらしく、私にその机の上にある燭臺へ灯をともすようにと頼んだ。私は言はれたとほりにした。R・Nの部屋のなかは電燈の光と燭臺からの光とで、手のまはりのすべての物の影が二つづつになつた。R・Nは手に持つて居た時計をその蠟燭の光のすぐ前に翳した。

「どうだ、君。この蓋の裏に見える指紋が見えるかい」成程、R・Nからさう言はれて見ると、そこには我我が硝子や陶器や或は金屬の光滑な表面から、偶然にも屢屢見出すであらうやうな指紋が、一つ、極めて鮮やかに、纖細に、くつきり浮いて印せられて居るのであつた。それは勿論人間自身の手の脂で偶然描き出されたものである。私は一見してそれだけのことを認めると、私の手を差し出してそれを自分の手にとつて見ようとした。併し、「その時計へはそのどんな部分へも決して外の指紋を殘すやうなことがあつてはならないから、若しこれを見たいなら私のやうに手袋をはめるがいい」とR・Nは言ふ。私は面倒だから手を引つ込めると、彼はまた不機嫌に「手にとつて見よ」と言ふ。私は彼から手袋を片手づつ借り受けて、そんなことをしてまでその時計の指紋を見つめなければならなかつた。私がしばらくそれを見入つて居ると、彼は言つた。

「よく見給へ。それがウキリアム・ウキルスンの指紋だよ。少くとも女賊ロザリオの手下の運轉手ジョンソンがマホガニイの机の角へ殘して行つた指紋だよ。何故つて、それはあのフキルムに現はれる指紋と全く同一なものなのだ」

「それやさうかも知れないね。が、併し」と私は狂氣の友人の妄想を憫みながら、寧ろ勉るやうに言つた。「が、併し、私はあの時の大映しの指紋を見覺えては置かなかつた。指紋などといふものはいかに大映しになつたつて覺え込まれるわけのものではない。最も複雜な世界地圖を一度幻に見て、その通りを記憶しては置けないやうなものでね」

彼は大きく頷いた。「君の言ふことは一一尤もだ」と私の少少皮肉な積りの言ひ分を彼は眞正面から正直に同感しながら、ひとり言のやうに、「ふむ、これはやはりここから說明し出してはいけない」彼は立上つた。さうして部屋のなかをくるくる歩きまはつた。さうしてやうやう緒を見出したらしく改めて話し初めた。やはりくるくる歩きながら、自分自身の考へをつけ覗つて居るやうな目付をして。

彼は語り出した。「君、君は長崎に阿片窟があること——あつたことは知つて居たね。否、知つ

て居たどころではない。ついこの間君と一緒にその家のあとへ行つて見たのだつけ。私は少し頭がわるくなつて居る。が、決して氣が違つて居るのではない。(自分で氣違ひではないと宣言する氣違ひほど困つたものはない、と私は思つた)私は外國から歸つてすぐその阿片窟へ行つた。私はどうしても阿片なしでは生きて居られなかつたから。私は君にかくれてそこで半年住んだ。私は外國人らしく振舞つた。阿片窟の支那人へ高い金を出して其處へ住込んで、阿片を喫つた。その時の氣持ではもう一生を棒にふつていいから、阿片に惑溺する覺悟だつた。併し私は半年で歸つて來た。それには深い理由があるのである。君、僕を恕してくれるだらうね。私は未だ君にさへ祕密にして居ることがあつたのだ。私は長崎でひよつとすると人殺しをしたかも知れんと思つて東京へ逃げて來た。さうして君にかくまつて貰つて居た。が安心し給へ。私は決して殺人者ではなかつたのだよ。殺人者は彼奴だ！　てつきり彼奴だ——ウヰリアム・ウヰルスンだ。」俳優のジョンソン——ではない、ウヰリアム・ウヰルスンだ。彼は小休みなく苛々するやうに歩きまはつて居る。言ふことがひとり言のやうになる。時々、私を思ひ出すと見えて、君とか佐藤君とか呼びかけるが、話し方は全く一人言の調子なのだつた。さうして大體次のやうなことを話しつゞけた。「或る晩のことである。私は何時ものとほり阿片に耽つて居た。さうしてういういしつらと魔睡の夢を見つめて居た。その夜私の夢に現れたのは、一面の湖水を前景にして——その湖水は實に度々私の夢に現れたものだが、それは非常に靜かで、最も碧く、海よりももつと曠漠として居た。だが私はそれが湖水だといふことをよく知つて居る。といふのは、その海のやうに曠漠とした平靜な水面の對岸に、やはりそれと同じやうに巨大な建築物が見えるからだ。それは自然の風景を十二倍した位の巨大さだ。その晩の風景は今も言ふとほり、湖水を前景にして自然を十二倍した巨大さで或る古城が現れた。その古城の未だ後には回回教の殿堂だと見えるドオムが、やはり少くとも自然を十二倍した位に、古城の凹凸のぎざぎざや銃眼のある城壁や圓錐形をした塔の屋根に半分隱されて重り合つて居る。城壁の後に回回教の殿堂といふ對照は理智的に考へるといかにも飛び離れた組合せではあるが、夢のなかではそれが最も合理的なリズムで調和されて居た。さう。それに明るい月光が照して居た。——私は水さへ見ればきつと月を、月さへ見ればきつと水を見た。(別項、附錄『月かげ』參照)海のやうに曠漠な水面の夢なのだ。さうして銀のやうな光が降つて居る。その水面から時々ライラックの芽が出て、ずんずん成長して見て居るうちに大木になつて花が咲いた。白い花だつた。白い花だつたところを見るとライラックではないのかも知れない。梨の花かも知れない。それがその一本の木と同じやうに生育し花を

くところの無數の木によつて、一夜の夢のうちに深い大きい森林になつた。花ざかりの森林である。然もその森林はやはり水面にあるものと見える。水面がどうかした機みでごく靜かに大きく搖れる時には、同じやうにこの水の上に浮んで居る花ざかりの大森林も、底氣味惡く、船暈に似たやうな不快を私に感じさせて、ゆらゆらと動搖した。そんな都雅な、又、より以上に莫迦げた、けれども莊嚴な風景だの、或は天に沖するやうな巨大な機械——それには金屬性のさまざまな形が、「整頓の混雜」といひたいやうな、譬へば Albrecht Dürer の構圖の或るもののやうな趣に、ぎつしりつめこまれて居る巨大な機械——金屬の多樣多形の破片から成り立つて居て、ごく靜かに齒車を渡つて、やがてだんだん波及して、大仕掛にのろのろと運行する奇妙な建築物、そんなものが阿片に醉つて居る私のよく見る夢で、それ等のものが或る期間をおいて間歇的に交交現れては、私を脅しながら樂しませ、苦しめながら醉はせるのであつた。が、私は今阿片の夢のさまざまに就て君に說明する筈ではなかつたのだつた。若し、君にしてそれを知りたいならば De Quincey を讀む方が早道だから……。それでその夜のは自然を少くとも十二倍大に擴大したほどのロマンチックな風景だつた。古城とドオムと銀を流した曠茫たる水面とが現れたのだ。そのドオムの面を月の光が圓く滑り落ちて居た。よく見ると前景である一面の湖水の上には長い橋が

あつて、その橋の上を無數の騎兵が進軍して居るのが遠くに見えるのだつた。この騎兵は後で考へて見ると英國の龍騎兵の盛裝したものに似て居たやうに思ふ——英國で戴冠式の時、私はそれを見たのだが。一帶の光景の心持が、この騎兵が現れ出してから急に變つて來た。非常に騷々しい賑やかな感じがし出したのだ。譬へば全世界中をあらゆるもの音だけが一杯に占領したと假定して、然も私は全くの聾なので、その物音を耳では聽くことが出來ない。その代り五官の外のもの或は聽覺ではなく觸覺か何かで空氣の混亂を通して感知するやうな具合なのだ。その時である。私の夢のなかへ不意に武裝をした騎士（私はよく古代や中世紀のものを夢に見た）が現れて、それが城壁を、どういふ風にだかはつきりとは解らないが、とにかく、城壁の內部をずんずん透して湖水に面して現れて出た。それと同時に、氣がついて見ると、あの碧い、古畫に描かれた聖母の衣服の色のやうに碧い湖水には、生きて眠つて居るのだかそれとも死んで倒れて居るのだか、何れにせよ、全く身動きもせずに橫はつて居る一人の人間が、滯んだ水面に、水の表面に、恰も陸に揚げてある船のやうにぽつくりと浮んで居るのである。片一方の壁を透して出て來た騎士は手に長い槍を持つて居た。槍の穗尖が月光できらきら煌めいた。騎士も、陸上の船のやうに全部浮上つて居る男も、他の風景と同じく、非常に大きい。その水にぽつくりと浮んだ男と、

兜をつけた騎士との、少くとも長さ一間以上もある横顔は、鮮やかな月の光を浴びて、私の眼の中へはつきりと浮び出して居る。突然、騎士の槍が非常に長く突き出された。何か爆發する音がすると一緒に、水の面に浮上つて居た男の脇腹から、血が滾々と溢れ出て、聖母の衣服のやうに碧かつた水の面一面へ滲み渡る、と、湖水は一面に眞赤になつた……人の呻り叫ぶ聲が山彦しながら、私の耳へ遠くひゞいて來た。かたかたと足早に階段を上るか或は下りるかする足音がする。私は大きな聲で呻りながら、私の外にも呻る人があるのに氣がついて、それと一緒に聲を合せて呻りながら、……ひよいと眼が覺めた。併し！　見れば眼を睜つた私の前には、夢のなかで見たと殆んでそつくりで、たゞ形だけは全く縮小されて、一人の人間が呻きながら倒れて居る——夢のなかで見たと殆んでそつくりに——ただ形だけは全く自然大にまで縮小されて、水面の代りに床板の上で。彼の頭のずつと上にぼやけて光つて居る燭臺の、その燭臺の皿が地上へ投射する黒い圓形の大きな投影の下で、一人の男が呻き倒れて居た。彼の枕もとには、豆ランプ——それで阿片へ火をつけるのだ——が、この燭臺そのものの投影のなかで僅に方一尺ばかりをほんのり赤くして、彼の男の額と鼻面とを眞ともに光らせて居た。片肘で自分自身の重い體を釣上げるやうに支へ起した私は、私のぼんやりした信用しがたい眼の六尺ほど前の方でこんな狀態

に居る一人の人間を、別に大した感激はなしに見下して居た。たゞ現實と夢幻との切離し難いこの混同を怪しんだ。それも極く微かな私の判斷力でである。私は板で出來てその上へ藁布團を置いた寢臺の上に居たし、呻いたり血を出したりして居る男の方はぢかに床の上に居るのだ。私は未だ半信半疑であつた。私は中有にぼやけて光つて居る燭臺をもつと下へおろして、今のやうな燭臺それ自身のもの影ではなく、それの光のなかですべてをよく見ようと、その中有にある燭臺へ手を伸ばさうとして、ひよいと瞳を上げると、今までは中有に浮いて居ると思つた燭臺は中有に浮いて居るのではなく、誰か人の手で持たれて居たのだつた。私は手を見て初めて其處に居る人の顏を見上げた。その男は多分、今、物音に驚いてここへ驅け下りて來たであらうこの阿片窟のおやぢなのだつた。更に氣がついて見ると、私の片肘は、私が自分の體を支へて居るのでない方の片肘は、この支那人の力強い手で釣上げられて居る。彼は直ぐ私の顏の前へ肉迫して突立つて居た。私はそれをやつと始めて見出した。部屋がそれ程に暗かつたのではない。私が、私のすべての感覺がぼんやりして、物を知覺する普通の自然的な順序といふものを間違つたらしい。私が彼の顏を見上げた時、彼は冷やかに私を見下した。それから中有に浮いて居るものと私には思へた彼の手にある燭臺を動して、血を床板に滲ませてぐつたりなつて居る男を、燭臺の光

線のなかで私に示した。支那人は、その呻き盡してもう何も叫ばない男を、突きながら——足の尖で突きながら、私の顏をにらまへた。いや、ひよつとすると私をにらまへて置いてから、その男を蹴つたのだ。いや、一度倒れて居る男の肩を足の爪先きで突いて見て、それから改めて蹴つたのだ。倒れて居る男は、其の男は汚い身なりの外國人だつたと思ふ。それとも立派なモオニングを着て居たか知ら——私はそれを忘れた。夢の方がよく覺えて居る。夢のなかでは水色の得體の知れない着物だつた。その後の夢でもさうであつた。一體だと、この阿片窟は何時も十人や六七人は居る筈であつた。その前夜か或は前前夜の如きは、その窖のなかは魔睡して居る男で一杯だつた。それだのに、その夜だけが私とその男と二人きりだつた。何でも船の都合か何かで、船の乘りはその晩、皆、殆んどこの港に居なかつたに相違ない。そんなことは滅多にない事なので、私にはそれが今でも奇異でならない。阿片窟のおやぢの支那人は——其奴は四十八九歳位のあばたのある大きな顏を持つた男だつたが——私を殺人者だと言つた。私は、さう言はれて私の夢のことを思ひ出すと、若しや、自分は夢のなかで夢遊病者がするやうに、實際、夢中で彼を刺殺したかとも考へざるを得なかつた。少くとも私には私自身ではないと證據立てる何物をも持たなかつた。私は支那人に對つて言つた——自分は死んで居る男とは全く無關係な男であること。それ

故その男を殺すべき理由のないこと。けれども夢中で或は殺さないとも限らないこと、君とても後暗い商賣をして居る以上、この不可解な私の、或は何人かの殺人を公然の事件にするわけには行かないであらうこと、それ故自分はこんな機會でこの場所にかかり合ひになつた關係上、君——その支那人に金を千圓やること。それ等のことを私は彼と相談した。彼は寧ろ喜んで居る樣子であつた。私は外國のこんな場所へ出入する宿無しどもがするやうに、靴下と足の裏の土附かずの間に隱して保存して居た現金を、その場で手渡した。さうして死骸をとり片着けることを承諾させた。さうして置いて、私はこの厭はしいものから、私の顏をそむけて、體を寢返りさせた。顏を壁の方へむけた。私の寢臺は壁に直ぐくつついて居た。壁はほの白く、私の豆ランプの火はそのほの白い壁に對しては赤黑かつた。私はもう一度眠らうと思つて、眠つて今の不愉快な現實の現象を、せめては何かもつと超自然なものにしよう——と、あせつたけれども、流石に私もあまりとび離れた自然そのものを見たことであるから——どんな不愉快なものでも超自然になれば美だから——と、あせつたけれども、流石に私もあまりとび離れた自然そのものを見たことて阿片も何の力もなく、いかに燻らして見てももう再びは夢に入ることが出來なかつた。若し私が本當に狂人だとすれば、私は言ふが、多分その時に氣が違つたのだらう。私の神經はちやうど黑水晶の結晶の林立のやうな形をして居た。と、不意に私は私の耳にチクタク、チクタク、チ

クタクといふ音を聞き出した。はて、と思つてそれに聞き入ると、それは正しく私が偶然耳を當てて居た壁を傳うて聽かれる音である。私はその見當を見定めようと、本能的にその方へ目を向けると、目のとどいたところに一個の時計が見えるのである。それは壁のなかである。私は實際その時壁を透して物を見たのである。ありありと、白晝に眼前二尺のところにある現實よりももつとありありとそれを見た。三十分ばかり見つづけた。さうしてそれは遂に見えなくなつた。チクタク、チクタク、チクタクは何時までも聽かれた。突然遠くの方から汽笛の音が空間を突裂いてひゞいた。それは多分、もう朝なので、夜明けなので、造船所の笛の音だらう。私は起き上つた。最も元氣よく起き上つた。あの支那人を起して、この壁を破らせてその時計を拾はうと、決心したからである。私は立つて歩み出さうとした。危くその死骸につまづく所であつた。支那人の奴は承諾をして置きながら、直ぐに始末すると承諾しながら、それを未だそのままにして居たのであつた。私はその血に塗れた死骸と一間置きで夜を明したのだつた。今思ふと怖ろしい。けれどもその時はただ支那人の違約だけがひどく腹立しかつた。私はあの支那人が眠つて居る扉を蹴たいた。蹴つた。さうして「おい又五百圓やるぞ」と呶鳴つた。支那人は直ぐ彼の妻の部屋の方からのつそり起きて出て來た。私は言つた——お前が若し私にあの部屋の壁を破らせるなら、今直ぐ破らせるならば五百圓やらうと。彼奴は眼をこすりながら私に蹤いて來た。私は窖へ下りると、その私の寢臺のある壁を指して言つた——「ここだ。それからもしこのなかから時計が一個出たらば、きつと出るに相違ないが、それは俺が貰ふぞ」支那人はそんな事はどうでもいいやうに小さく頷いて承知した。我我は、私の眠つて居た寢臺をとり外した。見ると私の寢臺でかくれて居た壁の下の方に、これ位の（彼は拇指と人差指とで輪をつくつて見せて）穴が二十も三十も、蜂の巢のやうに穿たれて居た。私は驚いた。支那人は一向驚かなかつた。私は其處を破つた。薄つぺらな板で出來て居たから。すると、私は更に驚いた、驚いて叫んだ。併し支那人は決して驚かない。彼は、支那人は私に說明をした——それらの穴は、土のなかの大きなものも壁の上の小さなものも、この部屋に空氣を入れるために、設けられたものである、と。成程、私をそれほど驚かした直徑三尺もあるその穴からは、私の手にもつて居る豆ランプへも私の顏へも、風が感じられた。もう一足踏み込まうと、ふと足もとを見ると、あつた！　私が先刻ありくと見た通りの時計が！　それがこの時計だ。指紋のある時計だ。今この机の上に我我の目の前にある時計だ。

私は支那人の命ずるとほりに、死骸の足をもつた。さうだ確かに足だつた、支那人は自分で頭

の方を持つたのだから。君、人間の體といふものは死んだ方が倍も重くなるものだよ。我我はその死骸を運び込んだ。あの壁を破つた奥へ、時計の出たところへ、風通しの穴のなかへ。支那人はその死骸を足をもつて一間ほど、曳き擦つて來た。その足を穴の入口で待つて居る私に渡した。我我は自分の背中を穴の上部の土に壓へつけられながら、二疋の蟻のやうにそれを運び込んだ。兩手で死骸の兩足を持ち上げて、私は後すざりして這つた。支那人は先づ自分の手を放した。死骸の體がどしんと地に落ちて地響きした。支那人は反響する重苦しい低い聲で「よし」と言つた。私は私の手を放した。死骸が土の上へ置かれた時、徑三尺ほどの穴は、大きな死骸で殆んど閉塞されて居るのを私は見出した。私はその死骸の上をのさばり這ふと、死骸と體を重り合せ、死骸の顏と自分自身の顏とを殆んど擦り合さんばかりにして——私は死人と接吻せんばかりにして、やうやうその穴を出て來た。支那人は片手に赤皮の靴をさげて、窖から上つて行くところだつた。その靴は多分あの死骸の靴なのだ。私は死骸の多の大理石のやうに冷たい素足を握つたことを忘れ得ないから。部屋の床の上には、巨人（私の夢に現はれたほどの）の指で撫でとつたインキの滴のあとのやうに、羽箒で掃いたやうな血のあとが、死骸のあつた場所から穴の方へかすれて居るのを私の目は見た。私はもう一度、あの穴の入口に立つてなかを覗き窺

うて見た。どういふ理由でそんなことをしたのだか私にも解らない。見ると、穴の彼方から仄白い夜明の光が、かすかに一すぢ死骸の胸の上から顏を這ひ傳ひながら、この地下の窖へ、忍び寄つて居た。尙も見つめると、その穴の奥底からは曙の空の銀を溶して、堀割の水がほのかに見られた。その夜のさまざまな光景が、實際殆んど全く同じ具合にその後の私の阿片の夢にさつと現はれた。その一夜の記憶は、阿片に依つて作用の鈍つて居る私の頭からも、決して消えない。それはただ一つの奇妙な昂奮であつたものが、後になつて初めて異常な怖ろしさに變つて來た。時が經過すればするだけその怖ろしさは加はつた。然もその後の日の阿片の夢のなかでは、正しく私自身がその殺人者になつて現れて來た。私は穴のなかで、自分の殺した死骸の上をのさばり這うて死骸と私自身の體とを重り合せ、死骸の鼻と自分自身の鼻とを擦り合せ、私の唇は死骸の氷のやうな唇にさはり——どういふわけか、夢のなかでは、私はからしてこの死骸を自分の花嫁ででもあるかのやうにしつかりと抱擁して、わなわなと慄へながら、動物的の恐怖と、人間的の悔恨とで私は何時までも何時までも泣いた。泣き叫んだ。またすすり泣いた。私の叫ぶのを聞いて、支那人が驅け下りて來る。私は捕へられたものの悲しさで一層に泣き叫んだ。と、目を見開くと、それは支那人ではない。私の最も親切な友達だつた。おお、佐藤君だ。

君自身だつた。私はあまりに異常な私自身の夢と、この溫かな現世の友情との、あまりのかけ離れ方に、さうしてそんな二つがほんの一瞬間の變り目から來るために、私はその變り目に氣がつくと思はずも涙が流れ出たのだ。佐藤君、私は幾度か君にとり縋つて泣いたらう。私は又ただ私の阿片の夢ばかりではなく、長崎の阿片窟でも私自身は無意識ではあつたとは言へ、實際にあの死骸である男を殺した者は私自身ではなかつたかと思ふやうになり出した。私は夢中で殺した。それ故私は夢中で懺悔するのではなからうか、私はさうも思つた。さうして懺悔の涙をもつて君にとり縋るやうにもなつた。さう思ひ初めると、私が私の潛在意識と第六感とで發見したと信じて居るあの犯罪者と、證據物件である時計とは、犯罪者は私自身であり、時計は私自身のものではないか、と疑はれた。事實に於て、私もやはり金の時計を持つて居た。それはどうかした機會で無くなつた（それはどうしてであるか忘れた。）私はそんな些細な面白くないことは昔から直ぐ忘れる。阿片を用ゐるやうになつてからは殊にひどい。それは人にやつたのか、落したのか、賣つたのか、盜まれたのだかのどれかだ。）私はひところ時計の蓋の裏の指紋と自分自身の指紋とを、一つ一つ較べ合して見るために、私の氣分のいい日を全く殆んど費した。時計の蓋のうらにある指紋はたしかに私のものとは違つて居た。さうして私の眼は時計に印せられた指紋を、それの一つ一つの渦の卷き方を、擴大鏡で眺め暮して居るうちに、全く悉く記憶してしまつたほどである。私の眼底へ——視神經そのものへその指紋が印刷されたやうなものである。その時計の指紋と私自身の十の指紋との外に、佐藤君、私は、君達夫婦の指紋も覺えて居た筈だ——それは重に拇指と人差指とだが——君達はよく私のキネマゴジンの口繪である光澤紙の表と裏とへ君達の指紋を殘して居たから。私はよく物を忘れるが、覺えて置かうとしたこと、或は一たん覺込んだことなら決して忘れるといふことはない。忘れて居るやうでも、必要に應じてありありと最も明確に記憶のなかで咄嗟に再現することが出來る、——重に視力に就ていふのだが。それが私の最も奇異な能力だといふことを、私はあの時に發見した。それは『女賊ロザリオ』といふ活動寫眞を見た時だ。然うさう！　その時は、非常な人ごみのなかに、私の隣席に、右隣りに君が居た。佐藤君、君は物覺えのいい人だ。だからあの時のことをよく思ひ出して見給へ、私があの時どんなに愕いたかを。大映しになつた男の——あの運轉手ジョンソンの顏が、女賊ロザリオの巨きな笑顏の横で、ひよいと我々の方へふり向いた瞬間であつた。私はその男、目の前の畫のなかの逆光線を浴びた男の顏が、あの私の夢のなかの月光を浴びた騎士の顏に寸分違はないことを直覺的に見た。そればかりか、それは上海の阿片窟で度々見た顏だつたことさへ、一時に思ひ出された。

併し、私はその時私のその直覚をすぐ莫迦莫迦しく思つた。私が單にちやうどあの時の夢ほどの大さの人間の顔を見た瞬間、私は私の夢を映畫のなかへ投げ込んだだけだと思ひなほして自分自身を打消した。それから、この様子だと自分は今に何を見ても阿片の夢のやうに怪異に見え出し、若しかすればあの自分自身が殺人者である夢が、何もない空間へでも、阿片を用ゐない時にでも、見え出しはしないかといふ心配さへ閃めいた。映畫は普通の大きさになつた。併し、それが一たんさう思はれ出してからは、夢のなかの槍を持つた騎士であるといふ氣持は多少減じたけれども、上海の阿片窟で二年半か三年か或は三年半か以前によく見た男に相違ないといふ氣持がしてならなくなつた。さうしてその男が上海のあの阿片窟の戸口へ歩いて來た時の様子が實に明瞭に私の眼に浮び初めたのである。その時であつた——再び大映しになつて指紋が現れたのは。私はそれを一瞥するや、それはフヰルムからスクリインの上へ映寫されたのではなく、私自身の眼底に日ごろから豫め刻みつけられて居たあの金時計の蓋の裏にある指紋の印象が、何かの作用でその幕の上に、これだけに擴大して映し出されたのではないかとさへ疑はれたほど、それほど同一なものであつた。ただそれらの相違といふのは、前者は自然物の小ささで且つ金時計の蓋のうらにあることと、後者は貴族のライブラリイのマホガニイの机の上にあつて且つ畫に現はれる世界全體の

形が、自然物の十倍或は十五倍大であることだけであの最も複雜な自然の Miniature（微細畫）の輪廓に至つては、それこそ千分の一分一厘も相違しては居なかつた。私はそれを確信した。それの確實な證據は、今、後で直ぐ君にも見せるが、今はまあ僕を信用し給へ。それで、

一タイ世ノ中ニ全然同一ナ——イヤ、相等シイ模様ノ指紋ヲ持ツタ指ガ二本以上アルデアラウカ？

かういふ問題が、それが私にとつての重大な問題になつて來た。そこに十六册だけ指紋に關する書物がある。それは私がその問題の解答を確實にするために私が讀んだものであるが、それらのどの頁に、「全然相等シイ模様ノ指紋ガアルデアラウ」と書かれた行があるか？　どの書物にも、そんな報告や研究やは一つもない！　けれども「自然の神祕は人間の研究や報告で盡きるものではない」といふならば、それほど神祕な自然が、魔睡して居る男の潜在意識を通して殺人の事實を見せ、殺人者を直覺させないといふ理由がどこにあらうか。全然相等しい指紋だつて二つも三つもあるかも知れない、と言ひ張るならば、私もあの活動寫眞に出て來た男が正にあの時の殺人者に相違ないのだ、と言ひ張り得る權利がある。が、問題の要點はそんな漠然たるものでは

ない。私はたしかにあの男――『女賊ロザリオ』の運轉手ジョンソン――卽ち俳優ウキリアム・ウキルスンが、その犯罪者に相違ないといふことを、私自身でごく冷靜に客觀的に認め得るやうになつて、若しかするとあの殺人者が自分ではないかといふ怖ろしい自分自身に對する嫌疑を自分自身に晴らして、その上にあの厭はしい惡夢から逃れたい、といふのが私の目的である。私はそれを認め得てもつと輕快な心持を抱くやうになりたい。私は學者的の熟心をもつて指紋に關する書物を耽讀し初めた理由はそれであつた。最も妙なことには、そのうち何時しか、私は長崎の阿片窟に於ける私の見た――といふよりも寧ろ關係した殺人事件といふものは、そもそもそれの全部が夢ではないかと思はれ出した。事實にあつた通りのことをあまり度度夢で見る。そのために事實そのものまでが夢に感じられ出した、といふ私の心理が君に同感出來るだらうか。いや、そんな事は君の同感するとしないとには拘はらない、私の經驗した事實だから。果は、長崎のM・B町に、私の生れ故郷であるところの長崎に阿片窟があつたといふことさへも、唯の夢ではないかと私には思はれて來た。併し、それと同時に一方では、確にそれ等の全部は疑ふべくもない事實だと信じても居た。さうしてそれらのすべてを夢だとする心持は、自分の關與した厭はしい事どもから逃避しようとする淺ましい卑屈な心の所爲だとして、自分のもう一方の心ではそれ

を責めるのであつた。その事實を事實だと認めようとする方の私が、君を長崎へ連れて行つた。私自身がそれを認めると同時に第三者である君にも、長崎に阿片窟があつたことだけでも、せめてはそれの跡でも君に見て貰ひたかつたからだ、私は或は代は變つて居ても、やはり何か其處にはそんな場所が今でもあるかとも考へたから。其處は今は幽靈屋敷になつて居た――天井から血が滴るのだ。天井から血が滴るのだ。それは實際あることかも知れない。その血が滴つて、聖母の衣服よりも碧い水面を眞赤にするのだ。私はそれをよく知つて居る……床板へなすりつけられてあつた血だ。それから私たちは、その男を土中の穴へ、窖の風穴へ運び込んだのだ。私は、あの時――君と長崎へ行つた時、最も狹い路次から小さい橋へ出る間で私が突立つたところの、×印を畫いたところ、あの下あたりに、その男が――ウキリアム・ウキルスンに殺された男が、埋められて居るのだよ。

「君は先づ以下の事を承認しなければならない。それでなければ私は話しつづけるわけには行かない――

(1)世ノ中ニハ全ク相等シイ形ヲ具ヘタ二ツ以上ノ指紋ハ絶對ニナイ事。

(2)上海ノ阿片窟ニ出入シタコトノアル男ガ、長崎ノ阿片窟ヲ知ツテ居テ、ソレニモ出入スル

コトノアリ得ベキコト。例ヘバ私自身ノゴトキガソレダ。

(3)殺人者ハ映畫ノナカヘ決シテ現ハレ得ナイト云フ原則ハ何モナイ。從ツテ、長崎デ殺人ヲシタ人間ガ、亞米利加デ活動寫眞ノ俳優ニナルコトノアリ得ベキコト。但シ。ソノ殺人ハ世間ニ知レナイモノデアル。

(3)は少しロマンチック過ぎて君には承認し兼ねるかも知れない。しかしそんなことは絶對にあり得べからざることだとは、果して何人が宣言出來やうぞ。況んや、それは事實なのであるから。兎に角、私は最初にいろいろと研究もし、考へもした上で以上の三つの事を自分自身で承認した。さうして私は私の直覺や潜在意識といふやうなものをも假りに信用した上で、私は長崎から二通の手紙を出した。一通は佐藤君、君の名前と所とを借りた。それはローサンゼルスのグリーン・フラグ會社へ宛てたものだ（私は内心、この狂氣の友人が私の名前などを濫用して無暗なことをしてくれたのでなければよいが、とその時考へた）それからもう一通は、同會社の專屬俳優のウヰリアム・ウヰルスンに宛てたものだ。私はその男は同會社の專屬ではないかも知れないが、同會社のフヰルムに表はれる以上、何か關係があるだらうと思つたからだ。その文句は次のやうなものであつた。

日本長崎に於ける阿片窟は、嚴重なる同地警察署のために發見せらるると同時に、同所に於ての貴君の殺人事件は、貴君の同所土窟附近に遺失しありたる金時計の指紋と、貴君がフヰルム『女賊ロザリオ』に於て、世界に示されたる指紋との、全く偶然(?)なる符合により、機敏なる日本警察の注意を喚起したるもの〻如し。貴君にして、若し身に覺あることならば、即座に貴君自身を守るにあらざれば、貴君は非常なる危險を冒すこととなるべし。

昔日の上海阿片窟に於ける
貴君の親愛なる一友人より

「ここまで來て、私は先刻の私の手に今日とどいたキネママガジンの消息欄を見せる筈だつた。私はうれしさのあまりそれを君に早く見せすぎた。一體あの二通の手紙は長崎の停車場で投函したのだ。あ、君はそれを見て居たね。我我が長崎へ行つたのはあれは十月四日である。それは重要なことだ。普通ならばローサンゼルスまで郵便は二十日位でとどく筈だ。けれども戰爭以來郵便は甚だ不規則だ——活動寫眞の雜誌が時時非常に延着して私を待遠しがらせる程だ。で私はその私の手紙をウヰリアム・ウヰルスンが何時見たかは大抵解る。

さう言ひながら、何時の間にか私の傍の机の前に來て腰を下して居たR・Nは、机の最も大きな抽斗から、何か寫眞でも這入つてゐるらしい郵便物をとり出した。さうしてそれを私に渡した。

「さあ、それはグリイン・フラグ會社からの郵便物だ。やつと十日ほど前に君の妻君から受けとつた。若しあるならば、映畫の目錄といふやうなものを送つてくれるようにと、私は君の名でその會社へ申し込んだのだ。私はそんなものを欲しいよりも、その會社から來るものの日附けが見たかつたから。それは十一月十六日に出して居る。すると私が出した手紙は少くもそれより以前にその會社へ着いたのだ。それと同時に投函したウキリアム・ウキルスンへのものもきつと十一月二十四日六日頃着いたと思つて差支へない。彼の手には直ぐ入つたかどうかわからないが十一月二十四日——彼が行方不明になつた日までには、私の手紙はきつと彼の目に這入つたものと見做してよからう。彼は私の手紙を見てから行方不明になつたのだ。それからちよつとそれを貸し給へ。その映畫目錄は、たゞ何でもいい手紙の着した日を知る方便に送つて貰つたのだつたが、その目錄が計らずも又用立つた。ウキリアム・ウキルスンの初めて映畫に現はれるやうになつたのは『X・Y・Z』といふ活動寫眞だつたらう。雜誌の記事にさうあつたから。その『X・Y・Z』は一九一四年に出來た寫眞だ——その日錄に依れば。それならウキリアム・ウキルスンは一九一四年以前には

活動寫眞の俳優ではなかつたのだ。それはさうでなければならない。でも彼は一九一二年の夏に——たしかさうだね、長崎から僕の歸つたのは——一九一二年の夏、彼は長崎で殺人をしたのだから。活動寫眞の俳優が長崎や上海でうろうろしては居ないから。僕はまだウキリアム・ウキルスンが殺人者だとは決定しないと言ふだらう。（彼はしたりげに微笑を含んで）さうだとも、私だつて、これだけの事實に若し私自身の潛在意識と直覺能力との信用がなかつたなら、次の二つの疑問には必ず逢著する筈だ。それは私だつて考へては居る。

(1)若シ、ウキリアム・ウキルスンガ、私ノ手紙ヲ見タコトノ爲メニ行方ヲ晦マシタノデナイトシタ場合。

(2)『女賊ロザリオ』ノナカニ現ハレタル、マホガニイ机ノ一角ノ上ノ指紋ガ、運轉手ジョンソン——即チウキリアム・ウキルスン自身ノモノデハナク、他ノ何人カノモノデアルカモ知レナイ場合。

以上の二つである。私を信用しない人は、この二つの場合を想像するであらう。或はより以上私を信用しない人に至つては、私があの指紋のある金時計を壁のなかで拾つたと云ふ事實をさへ、さうして、私の見たものはことごとく私の魔睡の夢で、私の理窟は氣違ひの獨斷だといふかも知

れない。實際私だつて時々はさう自分自身でも思ふ位なのだ。だがここが肝要なところだ。「世ノ中ニ全ク形ノ相等シイ指紋ヲ持ツタ指ガ二本以上アリ得ルカ？」ここにある十六册の指紋の書物の――「指紋といふものは必ず一つ一つ相異るものであるが故に、種種の證據として重大なる理由を持つ」といふ根抵から書かれたこれらのすべての書物の、何の頁何の行にそんなことが書かれてあるか。「世ノ中ニ全ク相等シイ指紋ガドウシテモ二ツ以上ハナイ」限り、どんな懷疑者でも自分自身の眼を疑つて、それを刳り抜かうとでも思はない限り、最後に唯一つ次のことだけはどうしても信じなければならないのだ――

(1)コノ時計ノ蓋ノ内部ノ指紋ト『女賊ロザリオ』ノフキルムニ現ハレル指紋トハ形ガ全ク相等シイ事。

或は、私を少しは信用しようといふ人には――

(2)私ガ殺サレテ居ル人間ノ傍カラ拾ツタコノ時計ノ蓋ノ内部ノ指紋ト、『女賊ロザリオ』ノフキルムニ現ハレタ指紋トハ全ク形ガ相等シイ事。

即ち――

世ノ中ニ全ク形ノ相等シイ指紋ヲ持ツ指ガ二本以上アリ得ナイ限リハ、前述ノ最後ノ(1)ノ場合モ(2)ノ場合モ、ソレラ二ツノ指紋ハ同一ノ一本ノ指ニ依ツテ印セラレタモノナラザル可カラザル事。

さて、今の(2)以上に、だんだん私を信ずる度が多くなれば多くなるだけ、最も多くなれば――その頂上では私自身が私自身を信用する最大限度の特と同じやうに、遂にはウキリアム・ウキルスンガ長崎ノ阿片窟ノ殺人者ニ相違ナイといふところまで私に一致するであらう。」

荒唐無稽な話から迷宮を行つたり來りするやうな論理めいたことまで長長と語つて私を惱ませた私の友人は、やがて彼の机の抽斗を三たび開けながら、太い巻尺のやうなものをとり出した。それは活動寫眞のフキルムであつた。「これを私は買つて來た」と言ひながら、彼は徐ろにそれを展げつつ、昂奮して不氣味なほど光つて居る瞳で私を電燈の下へ呼び電燈の光にそれを翳して見せた。それは正しく『女賊ロザリオ』のフキルムの十尺ばかりに相違なかつた。ロココ風に飾られた或る貴族の一室へ、探偵が三人這入つて來てその部屋の机の上にふと何ものかを見出す。一人の探偵がそれを指す――畫面が大映しになる。見るとマホガニイの木目のある机の一角に一つの指紋が現れて居る。彼はその指紋のところを、殊に大切らしく古いネクタイのきれかなにかの襦子で擦れないやうに巻いて居た。彼は再びその布をその部分へ巻きフキルム全體をも巻き納め

た。さうしてそれを私に手渡ししながら、自信に満ちた調子で言つた。

「さあ、證據はこれと、それにあの私の手袋の上に君が置いて居るあの時計の蓋の裏とだ。君はそれらの二つのものにある指紋の全く同一である事を今直ちに認めなくもよい。成可く丁寧につくり、その代り確實に間違ひなく認めてもらひ度い。私のところには擴大鏡もある。私の家根裏にはフヰルムを映す目的で私が工夫した幻燈もある。——この目的で賣出した機械はどこにでもあるが、私の工夫したのが、最も手輕で、最も明瞭だ。これらのものは皆、君に渡す。ただそのフヰルムを失はないやうに、又その時計の蓋のうらから指紋を消さないやうに——殊にこれはくれぐれも注意してくれ給へ。もう二つとは無いものだ」

＊　＊

私はあの晩のR・Nの熟心と、それに少々くどかつたけれども終りの方になつての話振りに、何となく威嚴のやうなものを感じた。試みに時計の蓋の內部にある指紋と、『女賊ロザリオ』の畫面がある指紋とを一眼見較べて見た。おお！　實際！　それは互に分厘も違はない！

それ以來、私は擴大鏡でも見た。幻燈に寫して較べても見た。私は決してそれを疑ふわけには行かない。それが全然同一なものであることを、私は——私の眼はどうしても疑へない。

既に三年間以上さうである。

＊　＊

大正六年九月十幾日である。私は鄉里へ歸省するために、和歌の浦から、夜、汽船に乘つた。私は汽船のなかのつれづれに、ふと船室にあつた一枚の新聞をとり上げた。それは當日の新聞でなく、三四日前の古新聞であつた。三面をあけて見ると、一葉の圖が挿入されて居るので、それがふと目についた。私は何氣なくその圖を見て居るうちに、氣がついた。氣がついて少し愕いた——それは曾て、私が見た場所だからである。それこそあの長崎のM・B町のもと阿片窟があつたといふ附近の平面圖で、併も、曾てR・Nが×の印をしたところには、その圖にも矢張り×印がついて居る。私は思はず、この暗合に慄然とした。さうしてその記事に目を走らせた。「長崎の幽靈屋敷」といふ題には、「地下室——白骨——純金メタル——愈々出でて愈々怪」と小見出しして居た。若し私が何も知らなかつたならば、さぞ新聞記者の月並な文句を侮蔑して、そんな記事には多分目をくれなかつたであらう。けれども私はその時は見た。見なければならなかつた。

私は目を走らせた——

長崎M・B町といへば支那人を初め生活程度の極めて低き外人等の雜居地なるが同町十九番地に一個の空家あり、煉瓦の洋風建物なるが、その家は數年前一人の支那人夫婦が居住して以來、住む人なく、偶ま借家するものあるも大抵五日或は十日、永くとも半月とは居つくものなく、居住者の話なりとて噂によれば、その家には、宵の八九時より夜半の一二時に至る數時間は、天井とも何處ともつかず滴々として血潮の滴るが如き音陰氣にひびき、或る者は天井より滴り落ちて床一面にひろがる血を見たりなどと物凄き噂專らにて、血氣の若者達は試みにその空家に宿泊する者もあり。ここに不思議なるはその家はかかる試膽者達の宿泊に際しては決して何の變事もなく、變事なきを見とどけて同借家を借り受けたる者と雖もいよいよ居住する場合には必ず、噂の如く滴りの音を聞く由にて、三四年來は一切その家に住む人もなき故、家主にても持て餘したる末その家を取毀さんものと、兩三日前人を雇ひて取毀しを初めしに、不思議なることにはその家の床の下に廣さ十疊敷ばかりの地下室あり、何者が何の爲めに設備せしものなるやは知るを得ず、人人氣味惡るきことに思ひつつも、下り行きて見たるに、居住者達が血の滴ると思ひしは、多分臺所の流しもとよりこぼれし水が同地下室に滴りてひびくものらしく、それは流しもとの板の裏

なる水漏の跡によつて推察されたり。幽靈屋敷の正體とはこんなものなり、それにしても何のための地下室ならんなど語り合ひ居るうち、人夫の一人が同地下室の一隅より涼しき風の吹き込むことに氣づき、その方に歩みよりたるに、其處には一道の穴ありて、その穴は何處に通ずるかとその一人は、もぐり行きたるに僅か二三歩行くうち叫び聲を上げて這出でたり。人人その理由を尋ぬれども、件の男は口も利けずにただ穴のなかを指ざすのみ。漸く口を開きて彼處に一個の白骨の髑髏あり、四肢頭蓋等の諸骨を完全に具備したるものにして、骨格の常人より偉大なる點より見て、多分支那人或は歐米人なるべしと推測せらる。尚も殘る隈なく同地下室を搜索するうち、流し元の下より一個金色燦爛たる新鑄一錢銅貨大のメタルを發見したり。同メタルは目方七匁五分ほどある純金にして、其表面にはラテン語を以て「藝術は長し、生命は短し、」の一句を刻めり。海外某大學文科の記念賞牌にして、珍らしきものなること判明したるが、市中にかかる人知れぬ地下窟のあるさへ審しきことなるに、黃金の賞牌といひ、更に白骨といひ、然もその白骨は道路の眞下十數尺のところに發見されたるに至つては、この幽靈屋敷こそ愈々出でて愈々怪といふの外なく、土地柄とは言ひ、何さま十八世紀風の物語に見るが如き出來事といふべし。何れこ

れには何か深き仔細ぞあるならんと、同市警察に於ては一切秘密のうちに着々探偵の歩を進めつつありと言へば、何れは遠からず一切は暴露せらるるなるべし。大正の今日尚この怪事あり、事實は小説よりも奇とはかかる事のことなり。昔……

田舎の新聞らしく（それに福岡の新聞であつた）長々と報道して居るのであつた。

私は一層愕いた。恐らくこの記事を見た何人のうちでも、私こそその最も愕いた人であらう。曾ては狂人の妄想の一部分と聞いて居たことが、それがとにかく或る部分まで事實だつたのだ。彼が「私自身でそこへ運んだ」と語つたところからは、外國人だつたと言つたが、それは事實外國人の白骨が發見されたのだ。私の目の前には揺れて居る船室の白い天井一杯に、あの『女賊ロザリオ』のフキルムのなかの指紋と金時計の蓋のうらの指紋とが、二つ全く同じ形に列んで目に浮んで來た。R・Nの言つた事を、私はどこまで信じればよいのであらう。船室の圓形の窓からは船の揺れるまにまに月夜の海がちらちらと見えて、それがR・Nの語つた幻想的ないろいろの光景を、私に暗示した。……だんだんそれを信ずる度が多くなれば、最も多くなつた頂上では、彼自身が彼自身を信用する最大限度の時と同じやうに、遂には「ウキリアム、ウキルスンガ長崎ノ阿片窟ノ殺人者ニ相違ナイ」といふところまで彼に一致するであらう？……

私はその新聞を、福岡の新聞を持つて歸つた。さうしてR・N——前年たうとう死んだR・Nの奇異な遺品、あの不可解な蒐集物——赤いアンダアラインをしたあの活動寫眞雜誌、グリインフラグ會社のカタログ、彼が透視して探し出したといふ金の時計、それを手にとつて見る爲めの黒い手袋、『女賊ロザリオ』のフキルムの一部、それを擴大して映す幻燈——それ等の物を納めた箱のなかへ、その新聞をも納めて置いた。

私は未だ今日でも、これを書きつつある今日でも、あのフキルムのなかの指紋と、時計の蓋の裏の指紋と、その二つがどこがどう違つて居るかを、どうしても發見出來ない……私は自分の目を疑ふことは尚更出來ない。私にはそれは神を信じないより以上の冒瀆だから。

指紋をぢつと見つめて居ると、そこに別に一個の世界がある。その奇珍な微細な世界がいつしか私の目にも親しいものになつた……私の妻は、私があまり指紋のことばかり言ひすぎるので、心配して私自身も狂人になりかかつたものと思つて居るらしい。「氣違ひは傳染するものでせうか」と精神病の研究をしてゐる私の友人Kにそんなことをたづねたさうだ。しかし私は決して狂人ではない。これは私の妻にも讀者にも言ふ。——實を言へば、R・Nだつて狂人ではなかつたのだ。と、私は近頃では、然う思ふやうになつて來た。

月かげ

（「指紋」の附錄として
R・Nの遺稿からの斷片）

「指紋」を讀んでくれた諸君は、私のごたごたした記錄をさぞ讀みづらく思はれたであらう。さうして私の文章に迷惑されたことであらう。併し、或はあの主人公である私の友人R・Nに對して、多少の好奇心を起されたかも知れない。この一篇「月かげ」は、然ういふ人人のお目にかけたい。又私がR・Nからうけた文學上の影響をも序に示して置きたい。

R・Nが病死してしまつてから、彼のかたみを整理するつもりで、私は彼のデスクの抽斗をひ

つくりかへして見たことがある。その時偶然に、いろいろな彼の遺稿を發見した。それは殆んど全部が英文で書かれて居て、さうして何れも頭も尻尾もない斷片ばかりであつた。ところどころには、C,Shaughnessyなどからの抜き書きもある。私はそれをところどころ拾ひ讀みして居るうちに次のやうな書き出しの一文をよみ出した。私はR・Nが何時か長崎の阿片窟で見た夢を語つた時に、「私は月を見ればきつと水を見た。水を見ればきつと月を見た」といふやうなことを語つたのを思ひ出した。それからまた、R・Nが外國に居たころに繪も描いて居たものらしいといふことを、この文章の一部から推測した。此は私の彼に就て知り得た新らしい事實である。それらのいろいろの斷片を讀んで見ると、それは皆阿片の夢の日記のやうなものであるらしい。R・Nは多分これらのものを集めて、例のDe Guinceyの，Confessi on sof An English Opium-Eater.の向うを張るつもりであつたのではなからうか。

さてR・Nの追想に耽つてゐればきりがないから、先をいそぐとして、——私はそれをここへ譯出する。それは別に、R・Nの書いた斷片のなかで最も傑出してゐるといふ理由からではない「指紋」のなかで、ちやうどあの夢のあたりがよほど不充分だから、このR・N自身の文章が、（別の事の描寫であるが）幾分私のあの不充分な個所の效果を補うてくれはしないかと思ふから

である。私の譯は、その原文が親友の手になつたといふことの理由で、必ずしも逐字的なものではない。しかし多分原の意味を間違へては居なからう。もとは題も何もなかつたが、私は便宜上、勝手な題をつけて置いた。

前がきが案外長くなつたが、R・Nの書いた斷片の意味は、次の通りである。

眠れない晩が幾夜もつづいた。やつと寢つけたと思つても、直ぐに何時の間にか目がさめて居る。夜が更けるにつれて益々目が冴える。丁度お爺さんか何かのやうである。私はまだ若者であるのに。いろいろな眠藥をためして見るけれども一向にききめがない。そのうちでも多少利きさうに思へるのを極量の二倍半までにしてやつて見たけれど、駄目である。それ以上な事をして見るのは、さすがに不氣味でちよつとやれないのである。眠れないのも以前のやうに苦しくはないからだ。但、夜分に眠れないおかげで、午前の日影を見たことはない。それから、午後になつても、心もからだもぼんやりして、うつろで、むやみともの哀れである。うとうとと雲などを見て居て、得も言はれぬ美妙な色などが現はれると、妙に感激して、思はず涙ぐむことなどさへある。それに、この日脚の短い季節に、しかも他の人の半日にしか當らない晝間の、その長いことは、實にほとほと退屈する。世の中に退屈といふ事ほど惡いものはないといふのは本當である。晝も描けもしなければ描きたいとも思はぬ。その代りには、夜が來ると、考へが活き活きしてくる。ただ活き活きと言うたぐらゐより、靈活といふ字がよく當る。とにかくうまい考へがあとからあとから浮ぶのだ。考へが追つかけつこをして居るのである。眠れなくとも少しも苦しくはない。退屈ではない。それにこの頃ではよい月夜が毎夜つづく。月夜といふものを、私はひどく俗なもののやうに思つた事もあつた。けれども今では全く反對に思ふ。一體月といふものは飽くことの出來ないものである。見て居れば見て居るほど却つてよくなる。一度、月をしみじみ味はうた事のある人ならば、誰しも月の戀人になるのは當りまへの事である。月は成長したり、老衰したり、再生したりする。それが彼の女の戀人達の心を樂しませ悲しませて、彼等に一層深い愛を要求するのである。私のやうに、一目でも月を見なければ眠れないやうになると、この事は一層よく解る。金環のやうに細く曲つた、さうしてほんの僅かの間しか輝きを見せない三日月や、夜すがら銀の洪水を瀉す明鏡のやう

な滿月に就て、人人は古來酌めるだけの感情を酌み盡した筈だ。けれども未だに盡きない。晝間の月にいたつては、嘗し彼の女の戀人にして彼の女のこの美しい死顏を見る時、たとひ喧擾を極めた大都會の市場の中ででも、暫くこれを仰いで、よし一瞬間にしろ、永遠を思うて心は冷たく靜かになるものである。私は月を愛する事を忘れた一般の人間を憫れまずには居られない……。

それ故、この頃では、月のよくさし込む部屋を、私は寢室に擇ぶやうにして居る。この頃の月はその下で時計の針でも見られるほど明るいのである。どうかすると、その光で詩ぐらゐのものは書けるであらう。窓かけを引かずにおくと、窓一ぱいの巾廣な光が水のやうに流れ込む、その優しい光は、床の上に落ちてそこへ凍りついて居る。

そんな夜の或る夜である。私はまた夜なかに目がさめた。時時、岩から水が流れ落ちる時のやうな音を感じた。それが私の眠をさまたげたものと見える。耳をすますと、その淙淙たる水音？の絶え間にも、やはり水音であらうか、それにしては極く微かな、蟲の羽音だとか、絲をくる時の音だとか、ものの餘韻ともいふべきほどの音が、びびびびびびと……と、夜の靜けさを縫ふやうにして、ひびいて來る。私はふとそれが噴水の音ではあるまいかと考へた。けれども、この邊りに噴水などのあるべき筈はないのである。私はぢっと耳を傾け

た。騷がしい音の方はいつの間にか消えてしまつたが、微かなひびきはいつまでもつづく。どうも訝しい事である。寢床に這入る時に、夜中に目が醒めて月の光を見るために窓かけは引かずに置いたが、そこからいつもの通り月の光が、私のすぐ枕もとまで差込んで居る。併し、今夜はいつもほど明るくはない。

私は寢床から少し體を乘り出した。月が見たいからである。見ると月は大きな暈をきて居る。世界を一面に霧がこめて居るのではなからうか。私は霧の降つて居る月夜ほど好きなものはない。

私は寢間着の上へ、もう一枚上着を羽織りながら、寢床から起き出た。窓から霧のなかの月夜を見ようと思うてである。果して夜霧である。深い夜霧である。それが今だんだんと晴れて行かうとして居る。……見ると、その霧の中を何か非常に大きなものが、かすかに動くのが見える。つづいて二つ。右手の方から左の方へ押進んで居るやうである。靜かに、靜かにである。それが何であるかちよつと見當がつかぬ。垂れた雲のやうである。兎に角よほど大きい。そればかりを凝視して居るとだんだん大きくなつて、そこら一面にひろがるやうにも思へる。灰色である。さう思つて見て居るうちに、霧はだんだん晴れて行く。えたいの知れぬ大きなものは、何かの一群

であるらしい。……霧の晴れるに従うて、その奇妙なものの正體が、だんだんと解つて來る。帆巻船である。大きな夢のやうに大きな帆巻船が、すうつと進んで行くのである。成程！　よほど大きい。それにその帆は、何といふ型であるか、この邊ではあまり見かけない帆の張りやうである。前後にやや大きい帆が一つづつあつて、その各の上や横に三角の小さな帆が無數にくつついて居る。それらの帆は、それぞれ思ひ思ひに一ぱい風をふくんで、丸くなつて居る。（そのくせ進み方は非常にのろい）風を孕んだ大小いろいろの帆の上には、月の光が一つ一つの曲線の丸みを撫でるやうに滑つて居る。そのためにそれぞれの張りつめた帆は、それ自身が光輝を持つたもののやうに見え、銀ねずみ色にどんよりとひかつて、何とも言へず美しい。それに各のふくらんだ帆の重なり合つた具合が、一種リズミカルで、見た目に非常に快よい。私はこんなに優美な線や落着いた柔らかな色調を持つた綺麗なものをあまり見た事はない。……私はぢつと見とれて居たが、不思議にも、ふとそのうちに一種の性的な欲望が起るやうな氣持になつた。ばかばかしいやうだけれども眞實である。私は手の甲をそろへ掌をすこしくぼめて、丁度立派な彫刻や、その他——もつと直接に言へば、女體にふれる時のやうに、體中のパッションを掌に集めて、ガラス越しのそれらの帆の形を倣ねながら、愛撫の心をもつて遠くから撫でる手つきをせずには居られなくなつた。女體といへば、實際これら舞踏して居る二人の裸體像に似て居る……。霧はよほど薄れて行つて、帆の形がもう大分はつきり見られる。けれど霧は全く晴れきらぬ、帆巻船は依然として霧の中を行く。船の進んで居るのは何處であるやらよくわからない。高いところは全く晴れて月かげが冴えて居るけれども、地面に近いところは未だ濃く深くたなびいて居るからである。船の行くのは水の上にはきまつては居ようが、どうも砂の上だとも思へる。空間ではなからうかとも疑はれる。兎に角、私のすぐ鼻の先なので、手をぐつとのばすと、とどきさうだと言つてもよい位である。……けれども、それは間もなく瞭然として來た。風を孕み月の光の中を行く大きな帆の手前には、家が見え出す。重なり合ひ、連り合つた家の屋根が、片側だけ白く光つて、まるで日のあたらぬところだけ雪が消え殘つたとおなじ樣子である。手前にばかりではなく、帆の後の方にもやはり同じやうに片側だけ光つた屋根が重つて居る。ちよつと見ると、家家の屋根の中を、街の通りを突き拔けて、帆巻船が過ぎて行くやうなのである……

　それにしても何といふこの景色の變り方であらう。月光がすべてのものを美しく見せ、人の心を超越的にする事は、私もかねがね見て知つて居る。——それならばこそ月夜を愛しもする。そ

れにしても月光といふものがこれほどの魔術をかくして居たのであらうか。私は、しかし驚きはしない。非常にうれしいだけである。祈願が聽かれた人のやうに。私はわれ知らず笑顔になつた。本當に愛するものにのみそれの神祕は開かれる。月は私に酬いたのである。

この窓から眺めを一とほり見ると、私はここことは反對の側にある今一つの窓の方を歩いて行つた。殆んど無意識にさうしたのである。さうして、私はその靑黑い、手ざはりのゴリゴリする窓かけを引きしぼらうと手をかけた。子供らしく胸が躍る。ここの、家の屋根と壁とのの外には何の風景もないこのつまらぬ窓が、どう變化して居るであらうと思ふと、私の心持は言ふべからざる緊張をおぼえる。さうして私はその心持をもう少しの間つづけて居たいといふつもりで、その片隅をつまんだままわざと窓かけを引かずに居る。科學者が稀有の實驗の結果を見ようとする瞬間の熱心な心持である。私は思ひ切つて窓かけをあけた。……見ると、目の下は一面の川である。玻璃板のやうに動かぬ水に、月がそつくり圓い形のままでその上に浮んで居る。やや遠い對岸の家家が、これも同じやうにはつきりと完全な形のままで影を落して居る。鏡のやうなといふよりもこの水一面が鏡そのものでないのが不思議なほどである。昔から飽き飽きするほど誰でも見たことのある風景である。私は少し腹立たしくなつた。あんまり曲のない難りかたである。

若しこの靜かな水の面へ、ひよつくりと美しい王女が現はれ出で、それにつれて澤山の腰元が後から後から無數に湧き出し、しとやかに蒐列の人のやうに水の表面を行列でもして、この風景全體をお伽話にでもしてしまはない以上は、あまり平凡で我慢しきれたものではない。私はさう思ひながら、それでもさすがに見入つて居るのである。活動寫眞の靑フキルムのやうに靑い月夜である。私は見た事はないけれども、アムステルダムとか、ヴエニスだとかいふ町はこんなところかも知れぬと思ふ。私の今見て居るのが、その町自身であるやも知れぬ。……さう言へば、寫眞版か、畫か、エッチングか、阿片の夢か、兎に角なにかで一度見たことのある景色である。突然、靜かな水の面が、氷のやうに閃めきだす。これは美しい王女達の行列ではない。唯忍びやかな風の手のひらのあとなのである。この風のちよつとした效果によつて、今までは水とは思へなかつた水が、やつと水らしい心持を起させた。すると、その關聯から、私はふと、さつき寢ざめに聞いた水音のやうなひびきの事を思ひ出した。私はあの帆卷船に見とれてから、つひ今までは忘れて居たのであつたが、さう思ひ出すと、あの餘韻のやうな微細な音が再び耳につき初めた。それが氣になる。けれども何であるやら、川の上を見渡しても一向わからない。水音は反つてさつきの街に面した方から響いてくるやうな氣がする。

私は再びもとの窓のところへ引きかへした。その水の聲をたづねるためである。月に照された古風な家家のうしろを、例の大きな簇つた帆は今、そびえ立つゴチック風の黒い塔の裏側をすぎて居る。靜かに。靜かに。……水音はどうもこの窓の下である。私は窓を押し開いた。そこから首を、上半身をのり出す——と、すぐ目の前に、あ！　訝しい音の原因は判つた。やはり噴水なのである。私の窓の筋向う、古風な街の四つ辻になつたところの廣場に、大さうな噴水が見える。古くなつて色の汚れた白天鵞絨にからんだ鮮かな銀糸のやうに、噴水のか細い水は月夜を通して光りながら、地上のものが空を憧れる心で、縷々として吹き上げられ、吹き上げられては落らて居る。幻聽のやうに私の枕邊までひびいたのは、疑ひもなくこれであつた。

この時、この噴水の前の大きな石造の家の小さな眞黒な出口から、ほの白く現はれたものがあつた。

家のかげから月光の眞下に出て來たのを見ると、それは一人の人が——よく見ると女のやうである——片手いつぱいに水甕を擁へて出て來たのである。さうして、噴水のところまで來たと思ふと、今までの絶え入りさうな水のひびきは、忽ちに劇しい水音になつて、噴水の大水盤の横腹からは、ぎらぎら光り閃めきながら、水が白絹糸の太い束のやうに迸り出て居る。さうしてそれと同時に大水盤の中に漲へられた水は、濛ひつつ鷹揚に動搖し出したのである。寢床の中で岩にせかれて轉び落ちる水かと耳を傾けたのは、正にこの音であつた。して見ると、さつきからも、誰か幾度も幾度も——それとも幾人もの人人が代る代る、水を汲んで居たのに違ひない。

今度は、四辻の向うの方から、ひよつくりと人影が見えてくる。少しづつ大きくなつて近づいて見える。やはりまつすぐに噴水の方へ來るのだ。女はその方をふりかへる。さうして見入つて居る、その近づく影をばかり見つめて居る、水が甕から溢れてこぼれ出るのも知らずに。人影は近づく。女は合圖でもあるらしく少し片手を上げる。人影は一層足早に近づいて、大きな影が小さな影を抱きすくめる。第二の人影は男であらう。若者でなければならぬ。女は水甕の中から溺きかへるやうに溢れ出す水に、今やつと氣がついたと見えて、大水盤の横腹から迸り出す水をどうかしてせき止めた。大水盤の中では、水が今更に大きな波紋を描いて、光る。水甕のぐるりは水に濡れ、月光に濡れて、寶玉を鏤めた甕のやうに輝き、その甕を上においた地面は水を吸ひこんで黒ずんで見える。女が甕を兩手で持上げようとして、身を屈めると、男は女を押しのけるやうにして、片手で輕々とそれを持ち上げる。傾いた甕の口から、水が珊珊と地面へこぼれ落ちる。男はそんな事にはかまはずに、それを女がさつき出て來た家の黒い出口の傍まで運んで

やる。女はそれを受取ると、重たげによろめいて、黒い入口の中へ消える。男の影は壁にぴつたりと身を寄せる。甕の口から今こぼれた水の痕が、道を横切つて、地に一條の黒い線を殘す。

間もなく女の影は再び黒い出口から現はれる。今度は、女は何か黒いものを頭からすつぽりと被つて居る。男の影は黒い女の影をだきながら連れて行く。默劇の影畫のやうな一組は、この窓から私が見て居る事などには一向氣づかぬらしく、私の窓の前の方へ歩み寄つてくる。私は窓から身をかくした。彼等に私が見られたくないからではない。彼等が私に見られたくなからうと思つたからだ。窓の前を行きすぎる時、ちらと偸み視すると、男は大きな若者である。女は小柄で腰の細い、あまり強く抱きすぎるとぽつきりと折れてしまひさうな少女であらう。黒い大きな衣にくるまつて居るけれども、さうに違ひないと思ふ。女は彼方を指す。私までが誘はれてその方を見ると、それは例の帆卷船である。男はうなづいて居る。その時私はこの大きな男は、「海から來た男」ではなからうかと考へて見た。

やがてこの幻のやうな一組が見えなくなると、その時、ふと私も街へ出て見たい、こんな珍らしい淸麗な月夜の中を歩いて見たい、といふ心が湧いた。これは自分の窓の前を人影がすぎるまでは、私には思つても見なかつた考へ方であつた。

氣がつくと私の窓のすぐ脇の扉から家の壁に添うて七八段の花階を下りるとすぐ廣場である。廣場の中央に大理石で出來た全體が半透明に蒼い。冷たい。私は仰視したままで、この大水盤のぐるりを五六歩、ゆるい步調であるく。

水を噴いて居るのは少年の裸像である。それはちよつとかはつた形である。兩脚をきちんと揃へて、爪さきで立つて居るやうだ。全體は少し反り身で、背伸びしたやうな形に、右の片手は出來るだけ高く差し伸べて居る。從つてこの姿勢の自然として、もう一つの片手は胸が拗ぢけて腰のうしろの方へ突き出されて居る。頭は出來るだけ後ざまに反らして、咽の線と顎の線とが直角になるまでに、空を仰いで居るその顏の——口からであらう、水が細く三四尺の高さに噴出されて居る。こんな窮屈な姿勢をして居ながら、見て居てそれほど苦しげでないのは、きつと、この中に充分な自然研究から得た均齊の美が、この靑銅の體ぢうに行きわたつて居るからにちがひな

い。水盤や像の臺は白い石でありながら、少年の像ばかりが黒いもので出來て居るために、この少年が黒人であるかのやうに感ぜられる。そればかりか、この少年は、體が痩せこけて頭ばかり大きすぎるやうである。決して所謂古典的な美だとは言ひ難い。どこか怪奇な趣があつて、寧ろ近代風な美を持つて居るのである。高く差し伸べた手は、目には見えぬ高い枝の上に乳房のやうに垂れた葡萄の房をもぎ取らうとしてあせつて居るらしくも見える。蝶のやうにとんで行く自分の夢を追うて居るやうにも見える。今晩のやうな月夜には、中天にかかつた圓かな月に觸らうとしてあせつて居るのであらうか。空を仰視した顔の口からは、白く、微かに、光る絲のやうにか細い水が縷縷として吐き出されて居る。その水の絲は、あるかないかの風にさへしぶきとなつて吹きとばされ、ただ白くなつて何處かへ散つてしまひさうなほど微かなのである。時には高く、時には低く噴き上げられて、それは噴水の呼吸であり、またこの黒い少年の息であるやうに見える。どうかした拍子で、眞晝のやうな月光がこのしぶきの中をくぐる刹那に、そこには小さな虹が、ふと浮ぶと見る瞬間に、もう消えて居る。さうしては何時か又、ちやうど前と全く同じ空間へ同じやうに美しく浮んでは、又すぐ消える。現れては消え、現れては消え、それは丁度、或る畫家の筆が極くデリケエトな暢美な線を、畫面の上へ捉へようとして、しきりに描いては消し、描いては消し、空しいしかしながらいために、或は熟練の不足のために、幾度も描いては消し、しければならない努力を重ねて居る樣に似て居る。

あの簇つた大きな帆は、おもむろに進んで、やがて、この噴水のあるところの眞うしろまで來た。それは見上げるばかりに大きい。亘大である……（以下略す）

「オカアサン」

その男はまるで仙人のやうに「神聖なうす汚なさ」を持つてゐました。指の爪がみんな七八分も延びてゐるのです。それがしきりとわたしに白孔雀の雛を買へとすすめるのですから、わたしはお伽噺みたやうなその夜の空氣がへんに氣に入つてしまつたのです。さうしてわたしはつひ一言、そんな高價なものを買つてもいいやうなことを言つてしまつたのです。が、いいあんばいに先方の値とわたしの値とは倍以上も違つたものだからまるでお話にも何もならずにしまつたのです。それでこの話はおぢやんになつたのですが、しかし小鳥屋の才取をするこの仙人は、わたしに鳥を賣りつけようといふ考は思ひきらなかつたものと見えます、一週間ばかりして今度はわたしに鸚鵡を買へとすすめに來たのです。

仙人は初めこの鳥を持つて來て、これを紹介しました——十やそこらは完全に口を利く。それの發音は明確で微妙である。その上に何だかわからないが長いこと喋りもする。歌は「ハトポッポ、ハトポッポ」とそれだけしか歌へないけれども、その調子の自然なところが、この鳥の有望なところだ。まだ三歳ぐらいな若鳥だと思ふから仕込みさへすれば、藝當の一つぐらゐは完全に

歌ふだらう。この鳥の名は「ロオラ」といふのだ……と、そこで「仙人」はわたしのうちの女中にビスケットを買つて來させて、それを鳥に見せながら言ふのです。

「ロオラや」

すると鸚鵡は體をくねらせてあのまるい大きな嘴を胸の方へ押しつけながら（しなをつくつたやうな形で）

「ロオラや！」

それはわたしに三十四五ぐらゐな夫人の氣取つたつくり聲を思はせました。

鸚鵡は仙人の話によると雄だそうですが、わたしにはその聲と身振とのためにどうしても、女としか思へませんでした。大きなその鳥籠のぐるりを、金太郎（わたしのうちの狆の名です）はぐる〳〵とまはりながら吠えました。ロオラは相手のその狂暴には一向驚きもしないで、彼女自身も犬の吠える眞似をもつて應戰しました。金太郎が躍氣になつて籠に顏を押しつけるとロオラはいきなり最もグロテスクや嘴でそれに立向つたので、金太郎はびつくりして後退りをしました。ロオラは金太郎の狼狽を見ると急に、

「ホ、ホ、ホ、ホ、ホ」

と、笑ひ出しました。雄鶏がときをつくる時のやうに、上を見上げて意氣揚々としてダンスを踏みました。それから、くるりと下向きになりながら體のむきを變へ、また尾を扇のやうにひらいてダンスを踏み、また回轉しつづけるのです。

「ね、面白いでせう」

仙人が僕の目つきを見て、すかさずさういふ。

かういふわけで多少無理におしつけられた形でした。それになか〳〵高かつたのです。わたしは多少後悔しました。妻はわたしの感じを見抜いてしまつてゐて、わたしを例によつて調子にのつて煽てられたのだと甚だ不きげんなのです。しかし、わたしはそれの世話をした仙人を、見かけこそうす汚いが靈まで垢のついてゐる人物とは思はなかつたし、それにこの黄帽子インコといふ種類は、一般に質のいい鳥だといふ事も知つてゐたものですから、わたしは一日や半日ではまだ落膽しませんでした。かへつてわたしの今までの外の鳥の經驗で、いい鳥とはつまり賢い鳥のこと、また彼等の賢いといふのは結局神經質といふことに外ならないのだから、さういふ鳥こそは得て慣れるまでは、周圍の變化などのために一時啼かなくなつたりする例がよくある——いづれそのうちには面白くなつて來るだらう、と目分で慰めてゐたのです。何しろロオラはわたしに

は馴染まない樣子で、わたしが何に呼はせようとしても少しも返答はしないのです。たゞ時々、金太郎やジョオヂが吠える時、彼女も亦犬の聲を眞似るぐらゐなものでした。

次の日の朝、妻の話によると、ロオラはわたしが朝寢をしてゐるうちに、鷄の「ク、ク、ク、ク、ククク」といふやうな聲と、それから人が鷄を呼ぶやうな「ト、ト、ト、ト、ト、ト、ト、ト」といふ叫びとを眞似たといふことでした。

「それから、まだ何かわからないことを申しました」

と、おしげ（女中の名）が言ひます。

「わからぬ言葉つて、何か日本の言葉ではないのか」

「いいえ。日本の言葉でございますの。「わたし……だわよ」といふのですけれど、その間が分りませんの」

「それに、オカアサン、オカアサンて呼んだぢやないの」

「え、そんなに申しました。小さな女の子のやうな聲でしたね」

「はつきり言ふかい」

「さうね。あんまりよくわからないわ」

妻とおしげとは朝の食事をしてゐるわたしに、交々そんな説明をするのでした。

食事を終つてわたしは林檎のきれを持つて二階へ上つて、食べものを示しながら骨を折つてやつと、

「ロオラや」

を言はせて、その日は一日わたしは外出してゐました。夕方歸つて來ると長谷川（書生の名）が

「お歸りなさいまし。——鸚鵡は、オタケサン、オタケサンとばかり言つてゐました」

とわたしの顏を見るなり報告してゐました。

かういふ風にして家内中で、いろいろとロオラの動作や言葉などを注意してゐるうちに、ロオラが子供の泣き眞似をすることが、この上なくうまいことを皆は發見したのです。その外にロオラは割合たくさんな言葉を知つてゐることもわかりました。わたしは心覺えに、ロオラのいふ言葉を、一つ一つ書きとつて見たのです。

●ロオラや。

●オカアサン——これは幾とほりにも言ひます。それぞれにあくせんとが違ひます。さうして甘つたれるやうな口調や、呼び立てるやうな口調や、また命令するやうな口調のもあります。オカアサンと呼んでから泣くこともあります。また三べんほど、さまざまに違つた調子でオカアサンと呼んでから、そのあとで笑ふことがあります。

●ハトポツポ。ハトポツポ——これだけは上手に言ひます。ハトポツポ、ハトポと切つてしまふこともあります。ごく下手な口笛でこの童謠の調子を眞似ることもあります。

●ロロや——これはどうも「ロオラや」の訛りであります。

●オタケサン——

●ボオヤ——

●ア、ココニモアツタワヨ——

●ア、アソコニモオチテヰルワヨ——

●オバサン——

●ソオネ——

●ワタシオコルワヨ——

●ワタジオトナシクマツテ（ナツテ？）ルワヨ——

これらの言葉はみんな五つから八つぐらゐまでの女の子を思はせる口調であります。ア、といふ感嘆しを、その外の時にも時々叫びます。これ等の言葉は相當はつきりしてゐます。

●トヤ。ト、ト、ト、ト、ト、ト——鶏を呼ぶ聲です。或は子供におしつこをさせる時にお母さんが言ふ聲です。

●クツ、クツク、ク、ク、ク、ク、ク——鶏が雛を或は雌を呼ぶ聲です。

●ワン、ワン、ワン、ワン、ワン——犬、（小犬でせう）それの吠える聲です。

●笑ひ聲。

●それから、赤ん坊（といふよりも三つか四つぐらゐの子供）の泣き眞似。

●又、出鱈目で調子はづれな歌。——これは相當長いこと歌ひ叫ぶのですけれども、意味はもとより音も調子も即興的で、到底促へることは出來ないのです。

●（その他にもあるかも知れませんが、大たいは以上で盡きてゐます。）さうしてそれらのうちで何物にも優つて上手なのは子供の泣き眞似です。これは眞に迫つてゐます。事實、わたしは隣りの赤ん坊の泣き聲と、ロオラのそれとを區別することが出來ないことが、今でもあります。

ロオラはおしげが好きなやうです。おしげが二階に上りさへすれば、きつと物を叫ぶか、或は例の泣き聲を眞似ます。ロオラはわたしたち家族のなかではおしげを一ばん好いてゐる樣子です。そのくせ別におしげが餌をやるわけではなく、餌はわたし自身や長谷川がやるのです。それだのにロオラは一向、男には馴染まないのです。わたしの妻やおしげなどに對しては籠のそばへ頸をさし出して頭をさすらせることをし、それを喜ぶのに、男がさうしようとすると大てい逃げてしまひます。てんで籠のそばへ頸をさし出すことをさへしないのです。ロオラはこの通り少しも男に馴染んでゐないのは、きつと以前の飼ひ主は女だつたからでせう。

「ロオラや」

あの氣取つた聲の奥さんは、前の飼ひ主に相違ない。少し肥つたあごなどのくびれた人が努めてやさしげに言ふ聲に似てゐる。ロオラは女のうちでおしげをわたしの妻よりも好いてゐるが、わたしの妻は痩せてゐて、おしげは太つてゐます。

それからロオラはまた近所の子供に談しかけられるのを何よりも喜んでゐます。彼等がわたし

の二階の窓の下へ來て何か一言叫ぶと、ロオラはいろんなことを喋り出すのです——さうです。ロオラに、あとから〳〵さまざまなことを言はせたものは近所の子供たちでした。ロオラはきつと子供を相手に育つたに相違ないのです。これはロオラの話す片言交りの言葉によつても知れます。さう言へば男ぎらひのロオラは、男の聲を少しも言ふことはないのです。——どうも男のゐない家庭にゐたらしいと思へるのです。

犬の吠える聲や、そればかりか金太郎がロオラに挑戰する時にそれをあしらふ樣子などを見ると、ロオラは小犬とはもう十分に親しみがあるのです。多分は、ロオラの以前に飼はれた家にも小犬がゐたのです。

ロオラはまた鷄を呼ぶことを知つてゐるのです。また鷄の、ク、ク、ク、ク、ク、クといふ聲も覺えてゐるのです。

鷄がゐて、小犬がゐて、三十四五ぐらゐの少し肥えた奥さんが子供をいくたりか育てゝゐるらしい家庭——子供は？　いくたりだらう。どこか東京近郊の靜かな場所で、さうしてその家庭には男はゐない。けれども賑やかな家庭である。ロオラは笑ふことを知つてゐる。よく笑ふ。調子はづれな聲で出鱈目を歌つては、はいやく。

「オカアサン」——Okâsan.

「オカアサン」——Okâsan.

「オカアサン」——Okâsan.

「ホ、ホ、ホ、ホ」

かういふのを聞くとわたしは、三人の女の子がお母さんと一緒にロオラの眞鍮の籠を取圍んで、口々にいろ〳〵な呼び方の「オカアサン」をロオラに言はせてみんなして笑ひ興ずる緣側のありさまを、空想することが出來るのです。

——しかし、この家にはお母さんばかりゐてお父さんはゐない。お父さんはゐないけれども赤ん坊がゐるのです。——三つか精々四つぐらゐの「ボーヤ」で、それが時折、泣き出すのです……

……

わたしがこのやうにロオラの以前に養はれてゐた家庭を空想して、それによつてロオラを愛してゐる間に、わたしの妻はまたロオラの片言交りの言葉を、よく聞きわけたり、解釋したりする

ことを努力してゐるのでした。ロオラが同じ、「オカアサン」を言ふ時にも、甘つたれるやうなのや、少し不きげんなのや、またあごでこき使ふ調子を帶びたのや、さまざまな發音があると彼女はいふのです。子供の泣き眞似や、また出任せの歌などがひどく彼女を喜ばせました。さうして初めはそんな鳥などを買つた事に不平をこぼしたくせに、もうそんな事はすつかり忘れてしまつたらしいのです（——彼女、わたしの妻には子供がなかつたのです。時々それをさびしがるやうなことを言ふことがあります。）

要するにロオラのきれ〳〵な言葉はわたしには一つの家庭を思はせたし、わたしの妻には子供たちの生活を思はせたのです。

きげんのいいロオラが、大きな籠の中をグロテスクな足と嘴とで這ひまはり、籠の天井にぶらさがつたまま、

「ワタシ、オトナシクマツテルワヨ」

さうやさしい女の子の聲で言ひ出した時には、不釣合な樣子と言葉とがわたしを笑はせました。

わたしはロオラを愛して、いつも、懷くやうにと思つて、自分でものをくれてやるのです。ビスケットだの、牡蠣だの、バナナだの、甘納豆だのをロオラは好みます。さういふものをくれてやつてゐるうちに、わたしはロオラの癖を一つ新らしく發見したのです。ロオラはわたしが手にまだものを持つてゐるうちは、たとひ彼女に與へてもそれを食べようとはせずに投げてしまつて、わたしの持つてゐる分を新らしく要求するのです。さうしてわたしが最後に與へたのをたべてしまふと、今度は自分がさつき捨てたのを籠の底へ下りて拾つて來てやつとそれを食べ初めるのです。——わたしは考へるのですが、ロオラは貰つたものをくれようとする飼主を持つてゐたのです。これは明かに子供のすることで、また多分ひとりの子供ではなく二三人の子供が同時に鳥籠をとりまいて、われ勝ちにロオラにくれてやつたのでせう。

「ア、マダアルワヨ」

「ソコニモオチテヰルワヨ」

この言葉をロオラが覺えたのは、きつと、かういふ風に小さな飼主たちから食べ物を貰つた時のことでありませう。

一たいロオラの言葉は、たつた一つ「ロオラや」といふ時の外には、無理に教へられたやうな

言葉は殆んどないので、それだけに自由でいきいきとした調子を帶びてゐるのです。だからわたしたちに餘計に空想をも與へるし、またそれを覺えたらうと思へる機會を想像させやすいのです。

「ロロや」

といふのは、これはやつとそれだけの言葉が言へるだけらしい幼い子供の調子です。これがきつと「ボーヤ」の聲なのでせう。「ボーヤ」は「オカアサン」に抱かれてロオラのそばへ來て「ロロや」をくり返したにちがひないのです。

ロオラは朝のうち早くと、午後の三時ごろとが一ばんきげんよく喋るのです。それは學校か幼稚園かへ行つてゐる子供たちが出かける前と歸つて來た時とにあたります。(——尤も、どの鳥でも朝と午後のこのころとはよく囀るものではありますが。)その他にロオラは夜の九時か十時ごろ、誰か階段でも上つて行くとその足音をききつけて、

「オカーサン、ワーワーワーワー」、

から、急に泣き出すことが折々あります。小さい子が目をさまして母を呼ぶ聲にそつくりで思はず、

「坊や、泣かないでもいいよ」

と言つてやらずにはゐられないほどです。

お母さんがゐて、子供たちがゐる。それも二三人、しかもやつと口をきけるほどの幼子までゐる。このお母さんはどうしたつて未亡人ではない。未亡人だとするとまだ新らしい未亡人だけれども、その人のものらしい賑やかな笑ひ聲や、また子供たちのはしやぎ方のなかには新らしく主人を失つた家らしい影は少しもないのです。それにもし主人を新らしく失つたといふだけなら、ロオラは、その主人の——男の聲をも少しは言つてもいいだらうし、その聲を話さないまでも、もう少し男に馴れてゐていいわけです。「ロオラや」といふ氣取つた聲をする夫人はきつと未亡人などではありますまい。但、その人の夫はきつとふだんは家にはゐない人なのです。

船員！　外國航路の高級船員の留守宅！　ふと思ひ浮んだ自分の直覺にわたしは非常に滿足したのです。——その人はもう四十前後でなければならない。船長ではあるかも知れないが、事務長ではあるかも知れない。ともかくも留守宅は有福に暮してゐるのです。子供たちはいつもおやつにはお菓子とくだものとを充分にいただいてゐる。ロオラはいつもおすそ分けに預かつてゐ

る。小犬と鶏と鸚鵡とにつれづれを慰められる子供と奥さんとは、いつも主人の歸りを待つてゐるのです。さうだ——

「ワタシ、オトナシクマッテルワヨ」——

子供たちはお父さんにさういふのです。お父さんによく言ふ言葉を子供たちはお友達の鸚鵡に教へたのです。

時たま歸る主人は子供たちを愛し奥さんを愛するのに忙がしいので、鸚鵡などは相手にしないのです。むしろ、主人が歸るとロオラはみんなから閙却されるのでせう。さうしてロオラは主人に馴れるひまもなく、また好まないのです。

またその主人が外國航路の船員だといふことになると、この鸚鵡が「オタケサン」といふ通り名の外に、ロオラといふ外國流の名前を持つてゐるわけもはつきりするのです。外國でさういふ名を持つてゐた鳥を主人自身が自分の船に乘せて、家庭への土産に持つて來たのです。

「ね、この鳥の名はロオラといふのだよ」

「おや、さうですか。可愛いわね、ロオラや」

その時、その夫と妻とはさういふ會話をしたことをわたしは考へることが出來るのです。それ

にしても「ロオラ」はまだ雛のうちに日本へつれられて來たのでせう。名前だけは外國風だけれども、ロオラは少しも外國の言葉は知らぬらしいのです。さうして「ロオラや」といふ調子さへすつかり日本風の發音なのです。

それにしてもロオラが、「ママ」と言はずに「オカアサン」と呼ぶところがわたしには此上なくうれしいのです。一體わたしは、近ごろのわが國のすこし程度の高い家庭で、父母のことを呼ばせて「パパ」「ママ」をもつてすることには非常に反對なのです。今までわれわれ文學者のなかにもわたしと同意見を發表した人がありましたが、わたしはそれらのうちの何人よりも以上に、もつと猛烈に反對なのです。キザだの厭味だのといふ生溫い問題ではないのです。——われわれ自身が幼いころに言ひなれたあのなつかしい「お父さん」「お母さん」といふ言葉をすてて、何を好んで、どんな理由があつて、その子供たちに「パパ」「ママ」などと言はせなければならないのでせう。わたしには一向合點がいかない。言葉を捨てるといふことは心を捨てることなのです。わたしは幼いころにわたしが父母に持つたと同じこころを、わたしの子供たちにも持つてもらひたいのです——わたしにはひとりも子供はありませんが、若しあつたならば、さうしてもし子供がパパ、ママの單純な口調を喜ぶとならば、わたしは一そトト、カカと呼ばせる方がいいとさへ思

ふのです。わたしはセンチメンタリストかも知れません。しかし人間がいいセンチメントをも持つてゐることが何で不都合なのです。子供たちがその生涯の最初の機會に最も感動して叫び、さうしてそれ故一生涯最も深い印象を持つ筈の第一の言葉を、外國の言葉で叫ぶなどといふことは全く許し難い事だとさへわたしは言ひたいのです。臺灣では臺灣籍民の子供たちに小學校内で土語を使ふことを嚴禁し、時にはこれを犯したものに鞭を與へた事實さへあつたといふのに、それほど國民と國語との權威を知つてゐる爲政者なら、何故、今日中流以上の日本人の子供たちがパパ、ママと呼ぶことを嚴禁し處罰しないのでせう——と、さへわたしは思ふのです。

わたしはロオラがいい子供たちのいい言葉を覺えて、「オカアサン」といふ言葉を、しかも幾ほりにも感情をこめて呼ぶのがうれしいのです。さうして夫は外國船の船員であつて自然と外國風の空氣も多かりさうに思へるのに、その奥さんが子供たちに自分のことを「お母さん」と呼ばせてゐる事を思ひ浮べて、この奥さんとその家庭とをゆかしいと感ずるのです。

毎日聞いてゐると、ロオラは赤ん坊の眞似をすることが一番好きなやうでもあり、上手でもあります。泣き眞似でも、片言の出まかせの歌でも。ロオラはきつと、外の子供たちよりも赤ん坊

と一緒にゐる時間が多かつたからでせう。外の子供はもう大きくなつてゐるから、前にも言つたとほり學校などへ行つてゐて、家庭には一日の半分しかゐない……

かうして二週間ばかり經つてゐるうちに、例の小鳥屋の才取りをする仙人がまたわたしのところへ訪ねて來ました。今度は青い白鳥の雛を買はないかといふのでした。その美しい名の鳥はどんなのだとたづねると、仙人もよく知らないらしいのです。何しろ雛だからよくわからないが青い白鳥はありさうにもない。ブリューといふのはどうも灰色のことでブリュースワンといふのはひよつとするとただの鵠らしいのです。たとひまあどんな珍らしい鳥であつても、わたしもさうさう鳥ばかり買つてはゐられないのですから、その話にはあまりとり合はなかつたのです。

「前の鳥は、どうだつたかね」

仙人はわたしが前の鳥——つまりロオラに滿足してゐないと思つたのかも知れません。

「ロオラか。あれは面白い鳥だよ」

「よく喋る？」

「うん。いろんなことを言ふ」

「それはいい」

「だが、とりとめのあることは言はない。また片言ばかりだ——言葉はどうもよくわからないが、それは鳥の罪ではなくて、先生の罪らしいのだ。——赤ん坊の言葉をおぼえたのだね。だから意味はわからないが情緒はなか〳〵あるよ」

そこでわたしはロオラに對するわたしの觀察と空想と愛情とを、仙人に話して聞かせて、ロオラがわたしには目には見えないが心にはつきりわかる好き一家族を隣人にしてくれ、またわたしの妻にはいくたりかの子供たちを思はせて彼女の母性を滿足させてゐることを說明したのです。

「敎へ込まれたのではなく、自然にひとりでいろんな事を覺える鳥だとすると、いい鳥だよ。賢い鳥だよ。それにその家庭で相當長く、少くとも三四年はゐただらうな。それで何かね、泣いたり笑つたりする時には多少、そんな感情を鳥も持つてゐてそれを現はすか知ら」

「さ。さういふ點まではわからないが」わたしは仙人の問に對して答へたのです「しかし、聞く方は、ともかくもさういふ感情をさそはれて聞くね——ところで、君、あれは、ロオラは今まで時々鳥屋の古こさうされた鳥ではあるまいね」

「それはそんなことはないさ。さう、そ。あなたに言はうと思つて忘れてゐたのだけれど、あれの爪や嘴があんまり延びすぎてゐる。あれは何かてもわかるが、大切にも育てられたがあんまり手入れはとどかなかつたね、あの鳥は。つまりあなたが言ふやうに、女と子供との家庭に育つたからだ。それに鳥屋の店にはさらさなかつた證據だね。鳥屋で半月もゐたことがあるとすれば、鳥屋は注意をしてあの嘴を蠟燭ででも燒いてやるよ、あんまり延びすぎてゐるものね」

「君の爪も」とわたしは笑ひながら言つた「一つ蠟燭ででも燒いてはどうだ」

「これは延びてゐちやいかんかね」仙人は仙人らしいとぼけた顏をして、煙草をつまんだ彼の手の指を見つめてゐました。

とわたしは自分の常談を打きつて、わたしの日ごろの空想のつづきを、仙人に話しつづけたのです——

最後にのこつてゐる疑ひは、つまりあのやうな可愛いいまたよく慣れ親しんだロオラを、何故、お母さんが鳥屋へ賣つてしまつたらうかといふ點なのです。仙人に聞くと、賣つたのではな

く外の鳥と取代へたのださうです。それならば尚の事、別にすべての鳥に飽きたといふのでもなく、また金に代へる必要があつたわけでもない事になります。さうしてわたしの想像は一そう確實性を持てることになるのです。

わたしは考へるのです。わたしの空想の夫人はきつと、可愛いい子供を失つたのです。それは「ボーヤ」にちがひないのです。ロオラが夜など突然、寝ぼけたやうな聲を張り上げて——

「オカアサン。ワーワーワー」

と、泣く時、夫人は失はれたいとし子の思ひ出に堪へられなかつたに相違ありません。これより外に、その夫人が良人のいい土産でありその上彼女の可愛い小さな娘たちのいい友達を人手に渡さうなどと思ひ立つ理由を、わたしは思ひ究めることが出來ないのです。さうして、ロオラのあの本當の赤ん坊そつくりな泣き聲を聞けば、これはきつと誰しもわたしのとほりに考へるでせう。

わたしは自分の想像を信じるのです。さうしてせめてはさびしい夫人が良人の留守の間に子供を死なせたのでなければいいがと案じてゐるのです。

ロオラはわたしの家に來てからもう二月になります。さうして彼女は（わたしにはロオラほどうしても女の子とより外に感ぜられませんが）わたしが金太郎やジョオヂを呼ぶ時の口笛を上手に眞似るやうになりました。わたしはロオラを愛してゐます。さうしてロオラも追々とわたしになついて來ます。ただわたしが時々心配することは、ロオラが完全にわたしたちの家庭になつた頃には、わたしの家には子供がゐないのだから、ロオラは子供の眞似を忘れてしまひ、しかもその頃になつてわたしの想像する寂しい夫人は、年月とともに愛兒を失つた眞實の悲しみが少しづつうすらぐとともに、せめてはその兒のなつかしい追憶のために、その子の聲に生きうつしのロオラに逢ひたいと思ひはしないだらうかといふことです。しかもそのロオラは、わたしのところで今は別のロオラになりつつあるのです。

時計のいたづら

I

机の上から枕もとへ持つて來た時計を臥ながら弄んで、その持主は、そのしやれた時計が今さらひどく氣に入つてゐる。趣味のいい代物だと信じてゐる。薄手の、さりとて、華車に失しない銀時計で、わざと少々古風に細工してある。そのさえ〴〵とした光澤のいい文字板には、ダイヤモンドといふ型の——いや、それよりはもつと小さいかと思へる活字で

ULYSSE NARDIN
LOCLE & GENEVE

と書いてある。くつきりと美しく並んでゐる。*Ulysse Nardin Locle and Geneve* と彼は口のなかで二三べん呟いてみて、ひよいとそれがウヰリアム・ブレエクの詩句か何かのやうな響がある。——「對句のやうに美しい肩」か。どうしてだか我々の主人公はふとそんなことを思つた。——この男は永年の神經衰弱で一種の輕微な意想奔逸に落入つてゐるからであらうと思ふ。彼は小ブルジョアで兼ねてへぼ詩人である。何をして食つてゐるのだかそこまでは私も知らん。卽ち、私が今、ピンセットで摘み上げたこの男はサロン文學の駄作の主人公には持つて來いに出來てゐる。さうしてここでもう一つ序に注意すべき事は、私が偶然にこのやうな人物を拾つたからこのやうな話を書くのであつて、敢てこのやうな話が書きたくてこんな主人公を探し出したのではないといふ事實である。これ等のことを御承知の上で、親愛なる讀者諸君よ、この波瀾曲折に富んだ物語は讀まれなければならないさうして諸君の何よりの急務は讀んで感心することにある。

——これは一見つまらない時計のやうだが、そこらにざらにある金時計などよりは倍も好いんだからな。——我々の主人公はどうやらそんなことをちよつと問題にし出した。——みんなは、どうもこいつを安物のやうに見ていけない。心外だが、さればと言つて吹聽してしまつたのでは折角のこの時計の奥床しさに對して申しわけがないだ。現にこの鎖を——と、そこで彼は今度はその白色のどツしりとした鎖の端を高くつまみ上げて、そいつを疊の上へザク〳〵と音をさせながら置いたり、また持ち上げたりして遊びながら——この鎖を買つた時だつても、こいつが果して時計に似合ふかどうかを試さうと思つて

ポツケツトからとり出すや否や、店の主はそいつを素早く見て取つて、

「失禮ながらちよつと拜見させて下さいまし」

と、恭しく手を差し出しながら、

「へへえ」と感に打たれたやうな聲を出して「何と！　高尚なものですな。こら！　みんなも拜見させていただきな。これや珍らしいお品だよ。——すつきりとしたものですねえ」

いかにもつくづくとさう言ひながら中僧や小僧たちにも見せたものだ。それから店の主人は、彼が買はうかどうしようと迷つてゐた一つの鎖を、匣のなかから外すと、それを時計にぶらさげた形で持ち副へながら、

「さよう。細くも御座いませんやうですな」

と言つたものである。實をいふとその鎖は大して彼の氣に入つてはゐなかつたのに、その場の呼吸でつひうつかり買ふ氣になつたのであつた。時計をほめておだてて置いて、主人はうまく鎖を賣りつけた……そんなことは俺だつてちやんと知つてゐるよ——と彼は考へた。だからこそ、思ひ出すと、そいつが少し業腹で、從つてこの鎖は——と彼はその鎖を指から放してしまつた。鎖はザク〳〵と落ちて、グシヤリと丸まつて、ギラ〳〵と電燈の光に光つてゐる。彼はそれを見つめながら、不意とその鎖がだん〳〵視線を五分ほどつづけてゐるうちに、彼の心はその鎖に就てほゞ三段に分つことの出來る進行を加速度的につづけた。

第一にはその品質に對する憎惡である。それはプラチナでもなく、ニツケルでもない。又ホワイトゴールドでもない。ごく新しい一種の人工金屬で、しかしそれはそれ自身で獨立的に權威があるといふよりも他の最も貴重な物にそつくりだといふので、つまり物欲しさと淺ましさとの傑作であるといはなければならない。かつて或るカフエのウエイトレスが全く若い貴婦人のやうなスタイルで店へ通ふてゐるのを見たことがあるが、さうして其志や憐むべしと思ひ、同時にその姿や愛すべしとも思つてつく〳〵その後姿を見送つた事があつたが、この鎖も多少此ウエイトレスに似てゐる。簡單に云ふと、この代物は目方に於てもプラチナにそつくりなのでその點に於てはホワイトゴールドなどのやうな間拔けなものではないとは言へ、やはり、一種のイミテーションに相違ないのである。高いなら高いで安いならば安い。さうしてもつと純粹な、且つ素狀の何人にもわかるやうなのを持つことは趣味の士としての心がけでなければならない。

第二には、その細工がごくありふれた奴で、彼は最初にはその平凡な處が飽きが來ないだらう

と思つたのであつたが、かうしてその品質に對して不滿を抱き初めると、その細工までが、飽きないどころかいよ〳〵曲がなくつまらなくなる。せめてこの細工が時計に打つてつけの趣味でもあつたならば、そこにまた理由も發見出來やうといふものであるが。……なに、氣に入らないとなりや直ぐにも取り返へればいゝさ、何も女房をとり代へるのとは違ふ、煩悶する事はない。

第三に、これは第二の末節に接續して甚だ有效であつたが、あの時、あの店の主人の話ではこの鎖の金屬はつぶしにして一匁十六圓でならいつでも引取るのだし、これは四匁三分あるのだからなしに、この鎖は取換へる事が出來る。……

彼は、そこでもう一ぺん、その時計と鎖とに目をやつた。今まで氣がつかなかつたが、まあ何といふ不調和だらう。——不調和、不調和。まるであの女があの男の女房になつてゐるやうなものだ。彼は手をのばして電燈をパチンと消すと、「對句のやうに美しい唇」……ふともう忘れてもいい彼の女の顏を思ひ出し、それが……、我々は此の氣まぐれな男のわけても今夜のやうな氣まぐれな晩の聯想について行くことは出來ない。ロオレンス・スターンではないから。要するに彼はそんなことを思ひながら寢たのだ。

II

あの晩、あんな風に——といふのは第一章に書いたとほりであるが、あんなにゆつくりと時計を見た事も、どうやらこんなことになる約束があつたからかも知れない。一たい、あの鎖のことをあんなくそみそに思つたのがそも〳〵よくなかつた。自分でケチをつけてしまつた。時計はもう多分現はれないだらう。昨夜も捜したのだし今日も捜したのだし。それにしては一たい誰が盜んで行つたのだらう。

せつかくの秋晴が、さうしてその散歩が、どうも面白くない。忘れてゐる時でもその失はれた時計が潛在意識にあり、しかもいつも潛在してゐてくれればまだしも、それがひよくりと表面へ浮出して來る。

——尤も、捜したと言つても、二度ともそそくさと見ただけだ。留守にT子がゆつくりと捜して置いてくれれば出て來るだらう。いや、やつぱり出ないかも知れない。さうさ、あの晩の事が何しろどうもよくない。

「おい、A」と彼はふりかへつて同じ散歩者のAを呼んだ「どうだね。時計はあると思ふか。無

いと思ふか。賭をしよう。俺はもう無いと思ふ。あつたら祝ひにおごるよ——あの時計は俺の氣に入つてゐるんだからな。鎖もさ」慌ててさうつけ加へた。賞めると出て來るやうな氣がしたからだ。彼はAに「あると思ふ」と言つて貰ひたかつた。そこで自分では無いと思ふ方を言つたのだ。しかしAは言つた——

「さあ。どうもやつぱり無いやうな氣がするな。」

「え。」彼は心細さうに「それぢや、ふたりとも無いと思ふ？」

「そんな豫感がするんだよ」とAは答へた「でもね、僕は昨日の三時ごろに、あの机のわきの臺の上で見たんだよ。それからあそこの窓はあのとほりだし、窓の向ふでは二軒の家の物干し臺があるだらう。手を延せば直ぐだ。僕はその時、これやちよつと不用心だなと何氣なく思つたところだつた。……」

「ふむ、そんなことを考へたかい。それぢややつぱり物干し臺で物欲しいと思はれたかな」

そんな常談を言ひながら彼は心では、ああやつぱり駄目かなと思つた。弟のAがそんなことも豫覺したのは全くよくない。この間金を落した時だつてもさうだ。自分でこれやこんなことをしてゐると金を落してしまふわいと思ひながら、今度氣がついた時にはもうなかつた。一たい我の一族は不思議と第六感が發達してゐるので、この間金を落した時だつても……彼は、もう一ぺん又同じことを考へ直して、——この間は金を落し、今日は時計を無くし、十日とは經たないうちにつゞけさまにこの始末ぢや、今に何が起るかわからないやうな氣がして彼はすつかり悄氣てしまつた。

「おい！　おい〳〵！」

突然、Aが呼びかけるから首を上げると、

「H さんだよ」

見ると、彼の鼻のすぐ前にHが立つてゐる。

「や、おかへりですか。今お宅へうかがつたところでした」

「はあ」

彼は氣のない返事してゐる。

「もう歸るところですよ。一緒にお出でなさい」

彼があんまりぼんやりしてゐるので、Aが歩き出しながらHにさう言つた。彼もやつと氣がつ

いて、

「さう。さ、一緒に行きませうや。——實は僕、今日、時計を無くしちやつてね」

Hも彼等と同じ方へ歩きながら「へえ？　道でですか？」

「いいや。うちで。出がけに無いことがわかつたんだ。いや、昨夜からなかつたのだ。ゆうべ客があつて時間を聞くから、見ようと思つたらいつも置くところに無い。その時も捜したのだがそのままになつてゐて、今日また出がけに氣がついて捜した。無いんです」

「ははあん？　妙ですな」

「妙ですよ」

Ⅲ

家へかへるといきなり彼は、

「時計はあつたかい？」

と言ひながらつか〳〵と茶の間へ這入つて行くと、そこに客がゐたので面喰つた。客が婆さんであつたので彼はちよつと躊躇した。

「やあ」

と一口言つて立つたまま、彼はT子に

「時計は？」

「ありませんわ」

「え、無い、嘘だらう」

「いいえ。見えませんよ。」

彼はHをつれてそそくさと二階へ上つた。彼は茶の間にゐる婆さんを好かなかつた。理由は、挨拶が丁寧すぎてその上にもう一つ、いつか立替へた金の拂へないでゐる申しわけが同樣に甚だ長すぎる點にあつた。それで彼はT子の言葉を信じなかつたけれども重ねて尋ねなかつた。T子は口ではさう言つたけれども、その顔つきには見失はれたものが出ないといふ人の絶望が少しも熱情的に現はれてゐなかつた。T子の言葉は寧ろ彼に安心を與へた。わざととぼけてゐるやうにとれたからである。しかし弟のAがつづいて二階へ上つて來た。こんなことを呟きながら——

「さてな。どうしたのだらうな。氣がかりでいけないな」

「なあに。あつたんだらう。あるのを出さないのだらう」

「さうではないさうだよ。本當のことを聞かせろといつて今よく聞いたんだよ。本當に見つけないさうだ」

「本當か。ふむ、困つたな……」

「一たいどこへお置きになつたのです」この心配を共有しなければ友情に反するといふので日も、そばからさう言つた。

「ここの上――」彼はふりかへつて手を差し延べて自分のうしろにある机の、そのわきの臺を指した。斑竹で出來た支那風の小さなものである。「ここの上へいつも置いておくのです。きのふもね、三時ごろには弟がここで見かけたのです」

「確にあつたのだよ。僕が出かけやうと思つて、ちよつと時間を見たら、ちやうど三時二十分ごろでした」

「それから客が來たのは夕御飯の時だつたから、その時、時計がなかつたのだから、三時半から六時半までの間の事だね。ふむ――」彼の頭の中には今まで影であつたものが、むつくりと現はれて鮮やかに活動し初めた……

ちやうど夕御飯のころですね。――茶の間に下りてゐらしつたのですか」

「え！――ちやうどその頃、夕方。ちやうど干し物をとり込む時刻ですね。きのふもいい秋晴れだつた……」その日見た一つの光景を彼は思ひ出した。

「うむ。――一たい、どうも不用心なところにあつたと僕は思つたのです。不思議とその時計を見て出かけた後でね」

「窓はあけてありましたか」

「いや、閉めてありましたがね」

「だが閉めたつて何にもなりやしない」弟と客との問答へ彼がかう言葉を挟んで、つと立ち上つて窓のところへ行つて

「ね、これです」――開けてあつた窓をぴつしやりと閉めた。その障子の眞中は一尺五寸に二尺ほど、ガバと穴があいてゐた。ガラスの嵌つてゐたところである――「この間の大風に、戸をしめずにゐたら、ガラスは飛んで破れちやつたんです」

「ははあ、かうなつて閉まつてゐるくらゐなら、あいてゐる方がまだましですね。」

「さうです」彼はそこの穴へ手をかけて、ピシヤリと障子を開けながら「さうしてここはこのと

ほりです」さう言ひながら外を眺めた。彼のするとほりに客も立つて來て覗いた。

「なあんだ。これやすぐ屋根つづきですね。いや、何だつてあんまり近すぎる。おや、あそこの屋根は何です」

「あれは鹽せんべいやの屋根でしてね。あの板の上へ一面に、毎日なまのせんべいを干すんですよ。——赤いせんべいを干すとこの障子へ赤く映る程にねえ。毎日幾人も人が昇りますよ。屋上工場だ。しかし今までにものをなくした事はありませんよ。もつと近いところをごらんなさい。そら、目の前に細い柱がありますね、向ふにも。ここが、この下の家の物干し場です。——ね」

彼はさう言ひながら、ひらりとその窓を飛び越した。それから次の瞬間には自分の家の狹い板庇の上に下りてゐた。そこと隣家の屋根とは五寸とはへだたつてゐなかつた。彼は足を踏出す眞似をして、他の二人にそこを越すことが平地を歩くと同樣なことを默つて示した。それから手を差出して臺の上をさわつた。

「しかし、あなたは背が高いから」とそれを見ながら客は言つた「ですが、私のやうに背の低い人間だつたらそこから、この臺の上のものは見えますかな」

彼は早速に五寸ほども身をこごめてみた「見えますよ、よく見えますよ」

「おい、もうやめた方がいいよ」と弟が彼に言つた「近所で見てへんな眞似をしてゐると思ふよ」

「知らない人はへんな眞似をしてゐると思ふ。知つてゐる人があつたらひやりとする」

「今度やらうとする人間には手本を見せてやるか。ハ、ハ、ハ」

彼は再びぴよこんと窓を乘り越えて、今度は自分の部屋に居た。

いつの間にかT子がお茶を持つて二階へ來てゐて、

「おや、何をしてゐらつしやるの」

「何、運動をさ」

「時計は？」

「無い！」

「さうを？」

T子は直ぐにおりて行つた。

彼等三人は茶をのみ初めた。と、彼は危く含んでゐた茶を噴き出すところだつた。

「何です。何がそんなにをかしいのです」

「いや、なあに。西洋の一口話をふいと思ひ出したのでさ。裁判官が盗人を取調べてね『その方はまた何と心得て窃盗などを働いたか』すると賊が云ふのさ『何だと心得てだなんて……。戸は開いてゐる。人どほりはない。奥には金目のものが見えてゐる。これや、まあ考へてもごらんなさいましよ、旦那だつても這入らずにやゐられますまいが』……」

「ハ、ハ、ハ」

IV

「で、客に來た人は、きのふ、誰もありませんでしたか——尤も、ここへ來てそんなことをするほどの太い人物もゐますまいがねえ」

しばらくの沈黙を破つて客がさう言つた。

「さう」と彼は答へた「大ていは一度きりの人ぢやないから。しかし、ともかくも客は三人あつたのです。ひとりは夜來てかへりがけに時間をたずねたといふその人で——これは女ですが、遠慮をしてそこの隅つこの方にゐて時計の近所などへはてんで來はしない。それにそのころには時計は既にもう見當らなかつたのです。もう二人は——さう、そのうちのひとりは來てすぐに歸つてやつぱりそこの入口のところにゐたきりでした。その間に僕は下へもどこへも行きはしない。のこりの一人だが、これがちよつと——一應は取調べられるかも知れないな。時計の方へ行つて窓から外を眺めたりもしてゐたし、三時間ばかり遊んで行つたからその間に僕も下へおりたりした。それから五十圓ばかり金が欲しいやうな話もしたよ——それがさうだ。恰も三時から夕飯近くまでゐたよ。誰だと思ひます。I君さ。我々はあの信頼すべき人物はよく知つてゐるが、警察ではわかるまい——ともかくも取調べるだらうな。I君さぞ面喰ふだらう。をかしいな。嫌疑者が思ひがけなくひとり出て來たぞ」

彼の言つたのは無論常談だし、又I君を知つてゐるHにもAにもそれが常談だといふことが直ぐに通じた。

「すると」と客が言つた「I君が、あなたと夕御飯前までここにゐたのだから、さうしてI君がそんな人でないことは言ふまでもないのだから、つまり時計はあなた方が夕御飯をあがつてゐる三十分ほどの間に無くなつたのですね。」

「あ、なるほど。三時二十分から六時半の三時間が、I君の信用によつて三十分に短縮したわけだな——夕飯の時刻の三十分。——あたりはうす暗くなつてゐる……」

「いよ〳〵無いとなれば、もう決つてるんだよ」Aが思ひ切つたやうにさう言つた。

「……」無言で彼もうなづいた。

「あの窓のわざに相違ないですね。——一たいどんな時計なのです？——無論いいのには相違ないが」

「ええ。だが見かけはごく悪いので。銀の時計です。たゞ機械はすばらしいのです。たとへば針を逆にまはすでせう。——セコンドの針がちよつと戸迷ひして、しかも十秒ばかり健氣にも逆行した上でそれからやつと止るのです。それほど精密に出來てゐるのです。それに趣味から氣に入つてゐたのでねえ」

「しかし類の尠ない奴だから直ぐ脚はつくね」

「うん。しかし見かけはあのとほりの奴だから粗末なものだと思つて取扱ふだらうよ。鎖だつてもニッケルそつくりだからね」

「はア、失禮ですが一體どれぐらゐするものです」

「まあ、失禮ながら君の月給の倍ですね」

「やあ！　そいつは大變だ」客は半分意識的にしかしあとの半分は無意識にそんな聲を出した。

「——社會主義者たる君には少し遠慮があるけれどもね」

「それほどのものと知つたら反つて盜りはしなかつたでせうね。ほんのちよつとしたものぐらゐに見たので……」

見失はれたこの時計に就て一座は熱心に評定をつゞけた。

「……何しろ困つたな。とゞけ出て置いた方がいいものだか、どうしようかな」

「それや屆け出て置いた方がいいです」社會主義者Hが一も二もなく所有權の保護を力說するらしい口吻なのは、少々奇觀であつた。

「さう。やつぱり屆けるかな。もう一應よく捜した上で。……もし無ければもう見當はわかつてゐるんです——それが却つて困るんだが。……僕は實はきのふそこで、窓のところで人を見かけたのです——」

「へえ？」

「いつも見かけない人が、きのふその物干臺へ登つてゐたのです。なに、張り物をしてゐたのですがね」

「へえ？」

「あれかい？」Aが顎で窓の方の或る方角を指した。

彼はうなづいて見せてから暫く默つてゐたが小聲で言ひ出した「ね、H君。あの窓の直ぐ下の屋根のなかに間借をしてゐる夫婦者がゐるんだ。細君はつひ二週間ほど前に來たのだよ。それがね、偶然のことでその結婚式——ともかくも結婚式だ——それがすつかりうちから見えてね。といふのはうちの便所の前と向ひ合つてゐるところへ、向ふで窓を一つぶち開けてね。ぴつたり向ひ合つてそれが文字どほりに手のとどくところさ。その向ふの窓のなかが、こちらの便所から何もかもすつかり、自分のうちと同じに見えるのさ——屋根を見てもわかるとほり、あのとほりくつついて居るんでせう。話まで手にとるやうに聞えるのでね、その細君といふのが、周旋屋か、結婚媒介所がつれて來たのだがね」

「はあ？　その話は私、雜誌で讀みましたよ」

「へえ！　いつです」

「つい四五日前ですよ。今お話のとほりを詳しく書いてありましたよ。自分でゞも見た人のやうに。……たしか「改造」で見ましたか知ら」

「畜生。あいつがもう書いたんだな。佐藤でせう」

「何でもそんな人でした」

「彼奴。——書くことがないものだから。ふむ然うですか。——僕も讀んでみよう。……それぢや君は御存知だらうが、その細君がね。昨日しきりにあそこの物干臺へ出て來て働いてゐたので。……たしか「改造」で見ましたか知ら」

す。二十ぐらゐでせうかね。全くの田舍娘だ……」或る手癖の悪い田舍娘が、村では評判になつてゐて結婚も出來ないから、婚期を失ふまいと思つて都會の結婚媒介所へ出て來る……といふやうな想像を彼はさつきから腦裡に描いてゐた。さすがにそれは口に出しては言はなかつたがその代りに、彼は一口だけ言つた「何だか知ら、僕にはその女が氣になるのだよ」

「何ですか、さうして、その女はきのふ始めてその物干臺へ上つたのですか」

「さ。どうもそこまでは知らなかつたが。いや、確かにきのふ始めてですね。——でもあれからいつもじめ〳〵した日で、物を干したり張りものをしたりする日は無かつたでせう。きのふが始めての秋晴だつた……」

「すると、始めてそこへ登つてみて、いつも蓄音器などを鳴らして遊んでゐるうちだが一たいどんなうちだらうと、ひよいと家のなかを覗き込んだりして、すぐ手のとどくところにあつたものを見つけたかも知れないですね。——一たい田舍の人といふものは、我々も田舍でよく育つて知

つてゐますけれど、自分のものや他人のものなどの見さかひが、あまりはつきりとしないのではないでせうか。ちよつとそこらの花を摘んだり道ばたにあつた果物を摘いだりするやうな氣持で。無智——やつぱり一種の田舍の純朴の變形で……」

「ふむ」彼は外のことを考へてゐた。さうしてひとり言のやうに言ひ出した「……戸はあいてゐる。人どほりは無い。奥を見ると金目のものがある——か。——いや、無論のことさうと決めてしまふわけにもいかんな。ひよつとするとそこらに在るのかも知れない、——二階ではなく下にありさうな氣がする。下の柱時計がひどく狂ふものだから、それを見るために僕はI君が歸る時か何か、それを下まで送つて序にあの時計を持つておりる。それから柱時計と見くらべてゐるうちに便所へ行きたくなる。時計を握つたまま便所へ持ち込んで、氣がついてそれを窓の上へちよつと乘せて置く。それつきり忘れて來てしまふ……どうも何だか、そんなこともあり得るやうな、いやあつたやうな氣がして來たぞ……」

「いや、そんな事が——ありもしなかつた事があつたやうに思へたりする事が、時々あるものですよ、殊にかういろ〳〵と考へ込んでゐると」

「然し、假に今もし便所の窓に時計がポツネンと置かれてあつたとしたら、ここでまたもう一度

考へ込まなけやならないことが出來て來る。そこへ、一たい、僕自身が置きわすれたのだか、それとも時計を持つて行つた人が、ここでかうして時計々々と騒ぐのを見て、殊に僕が庇屋根に下りてみたりしたのに氣味が悪くなつて、そつとあちらの窓からこちらの便所の窓へ時計をかへしておくやうなこともないとは限らない……。ええ、うるさいな。高が時計一つの事ぢやないか！」

「まあ何にしろ」とAは少しやけになりかかつてゐる兄を慰めるやうに「もう一度、篤と捜して見ようぢやないか。捜すと言つても狭いところだ。家中捜したつてもわけはない」

「それにしても成べく早い方がいいですね。あんまり遅れては屆け出るにも悪いし……」

客もさう言つて注意した。さうして皆の心のなかには駄目なことを確實にする爲めにといふ意嚮ばかりがあつた。就中、彼はここには斷じて無いことを思ふと、人々のすすめさへ氣に入らなかつた。彼は妻のT子が實に丹念な性格で彼女がものを捜す細心な樣子をよく知つてゐたからである。

「さあ？　T子も無いといふのだし、ここにある筈もないのだが。どうれ」

彼は不精不性に机の方へふりかへつた。

とたんに、ドタン、バサリ！　とごく低い音がした。本の一冊でも落ちたやうに。

「あ」

Aが短い音を發した。

三十秒ほどして、

「そこにあるのは……」

「あるではないか」

客とAとの言葉はぶつかつた。

彼も目の前に落ちてゐる一つの不思議な時計を見た。それは信じ難かつた——幻影か何かのやうに。

「その時計とは別ですか」

客がやつと完全に言葉を言つた時、彼は手を延して見ても大丈夫、時計は消えさうにもないとわかつた。

「何の事だ！」

彼は手にとつて、怒つたやうな聲だつた。それからきまり悪さとをかしさとがこんがらがつて彼れはクス〳〵と笑ひ出した「こん畜生、うまく隱れん坊をしてゐたな。ちよつといたづらのつもりで隱れたら、皆があんまり大騷ぎをし出したので、をかしさを噛み殺してゐたんです。——忍び切れなくなつて吹き出しちやつたから、その拍子に出て來たのだ」

皆も彼に聲を合せた。

「ひとりでにころがり出したのですか」

「いや、まさか！　ただね、僕が何氣なく本を一册抽き出したら、そいつと一緒に出て來たのさ。待つてゐましたとばかり」

「奥さんが、ひよつとして、そんなところへ隱してお置きになつたのぢやありませんか」

「さあ、何しろ……」

彼等はもう一度笑ひ出した。なかでも一番笑つたものは時計だつた。鎖はざまを見ろとばかり苦笑してゐる——彼にはそんな氣がする。——時計は持主の心配が氣の毒で出たくつて仕方がないのを、鎖が引きとめてなかなか出やうとはしなかつた……

「まあ、皆さん、何がそんなに面白いのでせう。御飯を食べていたゞかうと思つて、何べんお呼びしても聞いて下さらないのね」いつの間にかT子が來て立つてゐた「まあ、あかりもつけないで」

T子が電燈のスヰッチをひねると、明るい光のなかで彼は時計を珍らしさうにもう一度見て、わざと道化た聲で

「全くこの品に相違ございません。鎖も、なかなかいい鎖だ」

「H君。今日自慢の時計を吹聽する好機會を得たやうなものでしたよ」

「一つ大騒ぎの主人公を拜見させて下さい」

Hに渡す時計を見ながら、T子は、

「時計々々てあつたぢやありませんか。私も隨分心配しましたよ。おかげで」

V

「でも見つかつてよかつたわねえ。隨分とたづねたでせう。さつきから」

みんなが食卓に就いた時、T子がさう言ひ出した。

「何を言つてるんだい。俺が捜せばすぐにあつたぢやないか」

Aと客とはまた笑つた。

「でも、無い、無い、とおつしやつたぢやありませんか」

「それや無かつたさ。捜さないうちは」

「——さつきから捜さなかつたの」

「自分こそどこを捜したのだい」

「いいえ、わたし、捜しやしませんよ。だつておつしやるから、わたし、ずゐぶん氣を揉んでゐたの。きつと無くなつたと思つて。さう言へば、きのふの夕方、あすこの向ふでは（言ひながら便所の方を指しながら小聲になつて）牛肉の匂ひがして來たのでせう。まあボール箱をはつてあんな御馳走をしてと思つてゐたやさきだつたから、あれやきつと時計を儲けたからだつたかしら、と思つてさ、今もさう考へてゐたところでしたわ」

「ばかな！」

「留守ならと言つて座り込んだのでせう。捜す間なんかありやしませんよ。でも、捜したやうに言はなけや、あなたがお怒りになるでせう。さうすれや婆やさんに氣の毒でせう」

「フフン。ばかにしてら。みんなお前が一生懸命さがしたものとばかり思つて……」

「だから、わたし、Aさんによく見て下さいて言つてあるぢやありませんか。——無い、無いとおつしやるから、わたし、ずゐぶん氣を揉んでゐたの。きつと無くなつたと思つて。さう言へば、きのふの夕方、あすこの向ふでは（言ひながら便所の方を指しながら小聲になつて）牛肉の匂ひがして來たのでせう。まあボール箱をはつてあんな御馳走をしてと思つてゐたやさきだつたから、あれやきつと時計を儲けたからだつたかしら、と思つてさ、今もさう考へてゐたところでしたわ」

「ばかな！」

彼等は別に何もかせぎもしなかつたけれども牛鍋の用意をしてゐる。T子は隣のゆうべの御馳走から今日のうちの御馳走を聯想したのだらうが、彼等には偶然のやうにをかしかつた。

「ばかな！　誰がそんな泥坊があるものか！」

「さうを？」

「あたりまへさ」

「だつて、あなたも盗れたらしいておつしやつたぢやないの」

「それや、とられたかとは思つたさ。——おい、もつと炭をつぎなさい。これぢや火が駄目だ。待ちどほしい」

彼は火を吹いてゐた顔を上げて「フ、フ、フ、みんなしてつまらない事を言つて、やれ時計を盗んで、牛肉を食つたらうの、田舎の人は自分のものと人のものとの見さかひがないからだの、晝間見ておいて夕方十し物を取込んだ序にだのと、——まことにはや、言ひたい放題なことを、申しわけが御座いません」彼は箸をおいて、隣の方角へ向き直りながら丁寧にお辭儀をした。半分ふざけてゐて半分實意があつた。

「御自分で言ひ出したくせにねえ、Aさん」

「ウフフ」

「全く申しわけがないよ。——しかし、俺は時計を盗んで夫婦して牛肉を食つただらうなんて、そんな面目ない事を思ひやしないぜ。ただね。あの細君が時計をみてふとそれをとつてしまつて、これや死んだ兄さんの片身だけんど……とか何とか言つて、可愛いい亭主にやりやしなかつたかと思つたのだよ——だとすると、これや何でもなく屆けられないつて」彼はそこまで低い聲で言つて來たのが急に大聲で「いや何しろ、いい時計だ。いい時計だ。鎖も實に上等。だがこれからもうあんないたづらをしちやいけないよ」

皆が笑つてゐるうちに、彼は、これやまたうつかり佐藤などに言はない事にしなけや、あいつまたメめたとばかり直ぐにも、何かに書くだらうと思つた。それから、創造力のない小説家などを友達に持つことは何かにつけて、全く、金のない親類を持つたと同様によくないと思ひながら、牛肉の一片を箸でつまみ上げてゐる。

痛ましい發見

A君が私をカフエーに行かないかと誘つたのだ。

A君とはもうながい間、同じ社で、毎日椅子を隣り合つてゐるのだが、かういふことは滅多にない。そこで——私はその時ふとおもひ出した。——つい昨日のことだ。もう夕刊の締切が迫つてゐるのに、A君は夕刻からやりかけてゐる仕事を一向かたづけない。見ると、しかしAはちやんとその仕事には向つてゐるのだ。たゞそれがはかどらないといふだけのこと。それで私が

「君、もう時間だよ」と注意すると「あ、さうか！」とA君は初めて氣がついたやうに言つて、その仕事はまあすぐ片づけてしまつた。が——かういふ風に、A君はもう一週間ばかりも前からどうも少しぼんやりしてゐるやうだ。默つて鬱ぎ込んでゐる時が多い。私は、これは何かよほど考へにあまる事でもあるのだな、と思つた。が、しかし私には用もなささうなことなので、ついその儘まだ訊いてみないでゐた……。

A君は、尾張町へ出るまでは殆んど默り込んで大股に先に歩いた。時々、ステツキをヤケに敷石に突いてみたりした。それで私も默つて從いて行つた。

尾張町からA君は今度は京橋の方へ歩くのだ。さうして、夕方の、交叉點のひどい人混みをやつと拔け、交通が少し薄らいだところで——そこでA君は急にゆつくり歩き出した。それから私の顏を見て、

「君。僕は、女房の不義を——ね、女房の不貞を發見したんだ。」

と、突然——全くだし拔けにそんなことを言つたのだ。それはひどく惱つてゐるやうに見えるのだが、だから自分ではよほど思ひ詰めてゐたことをいま始めて、やつとそれを口に出したものに違ひない。——A君はさうして、また考へ込んで十歩ばかりも歩いた。それから、

「さう。」とA君は今度はなかば自身にも言ひきかすやうに、「それに違ひはない！」

と言つた。私にはA君の言ふことは、無論その文字どほりには聞きとれたのであるが、これだけでは何が何だか一向わからない。そこで私も訊ねてみた。

「どうしてまた君、そんな……？」

「いや、それが——恥を話さねば判らぬが、僕は一週間ほど前に、さう、ちやうど前の土曜日——僕が夜勤だつた次の朝、初めてそれをはつきりと發見したのだ。證據を握つたのだ。」

A君は一語々々力を入れて、ひとりうなづくやうに言つた。まことに悄氣返つた、沈鬱さうな

様子でしかも内にはよほど亢奮したものがあつた。さて歩きながらA君は私にその事を詳しく話したのだ、それは次のやうである。

前の夜——と言つても實はもう明る朝なのだが、A君は夜勤を終へて朝の一番の電車で歸つて來た。無論その時細君は寢てゐた。さうしてA君は今度は九時少し前に眼を醒ましたのだ。

——今日は休みだし……と、A君は今朝はいつまで寢てゐてもいいわけだつた。しかし細君は起き上つてもう見えなかつた。——かういふ日には、自分でも寬いでどうかするとA君よりも却つてゆつくりしてゐるくらゐの細君であつたけれども……。

——今日も天氣はよささうだし、も少しぐらゐ寢てもいいが、しかしそろ〳〵起きろかな、——A君はやつぱり床の中でこんな事を思ひながら、横になり脇の下に枕を支へると煙草を一本喫へた。——これは朝起き上る時のA君の癖なのだ。A君はさうしてそれから其處に殘されてゐる細君の枕を弄んでゐた。横に立ててみたりまたくる〳〵と廻して見たり——つまり、意味もなくそんな事をしてゐたのだ。そのうちにふと、A君は細君の——枕の脇に五厘ぐらゐの長さの眞黒い髮の毛が白い敷布の上に落ちてゐることを發見したのだ。これは？　とA君が不思議に思つて急いで眼を近づけて見ると——博物學者が顯微鏡をのぞくやうにしたのだ。——よく見るとそれは三本あつた。しかも皆大抵同じやうな長さで迚も一分とはない。ぢつとそれを見てゐるうちに、さうだ、これは——とA君は思つた——これはよくあるやつで一旦理髮した後でもう一度仕上げをしてさうしてそのまゝ殘つたあの髮毛に相違ない。向うでは一本でも不揃なものを殘すまいと丁寧にやるのだらうが、それがいつ迄も着物の襟に喰付いてゐたり褲袢の裏にジカ〳〵と挾まつてゐたりなどして、こちらでは却つて迷惑をする、あの極く短かい斬り毛だ。さうだ。あの毛に違ひない。それにしても、そんなものが、一たい、またどうして、こんなところに落ちてゐるのか？……。A君の疑念は先づかうして湧き起つたのだ。

——これ見給へ。僕の頭はこのとほりだ。——このあひだから行かう〳〵思つて、ついまだ斬らないでゐたところなのだ……。

なるほど、さう言ふA君の頭は憂欝千萬にも實際もうそろ〳〵耳の上に乘つかかりさうになつてゐる。だからこの斬り毛がA君のでないことは言ふまでもない。さうして又、

——僕の女房も、近年床屋へは行かないのだ。顏や襟足ぐらゐは時々僕が剃つてゐるのだから……。

とA君は、これはしかし少うしばかりきまり悪る氣に說明をする。

「かうして、だからそれが內の誰のでもないとすれば、外から入つて來たものだ。つまり、女房が——斬り毛のまだ新らしらしいところを見ると、僕のその夜勤の晩らしいのだが——僕の留守に、他の男のものを……」そこでA君は一瞬間眼をつむつて默つた。——「さうだ。さうしてつい附けて來てゐたものに相違ないのだ。ウム、全くさうなのだ。」

とA君ははつきりと言つた。呻つた。その時、しかし私たちはもう目的のカフエーの前まで來てゐた。

「僕はどうも、少し敏感過ぎていけない。」

A君はさう呟きながら、ドアを押して先に入つた。

夕飯時なのでカフエーはかなり混み合つてゐた。しかし私たちが入つた時にちやうど壁際の一組が立つたので、幸ひに私たちはすぐその後を占領することが出來た。

「ホットウイスキー二つ。」

A君はそれだけ言ふと、今度は懷から財布を出してさうしてその中から散藥を一包取り出した——神經衰弱の服藥でもするのだなと、その時私は實際さう思つたのだ。ところが、それから

A君があたりをちよつと憚かるやうに又それを片手で隱すやうにして、恐々と展いて行くのを見てゐると、それはしかし藥包紙ではなくて白い半紙だつたのだ。A君はそれからそれを私の方へ持ち上げて、

「ねえ君、これなのだ。これがその——女房の枕の下に落ちてゐたといふその」

見ると、なるほどA君の言ふとほりこれは散髮の時に殘つた毛だ。

「ね。そしてこの斬れ口を見たまへ——このまだ眞新らしい……」

A君はさう言ひながら、尙もそれを私の眼のそばに持つて來てくれる。私は——しかしさういふ斬れ口の事などよくはわからなかつたけれども、默つてうなづいた。

A君はさうしてそれを、うつかり——一本も失くなさないやうに、又丁寧に紙を細かく折り疊んで財布に納めながら

「ね。さうだらう？　僕はこれだけは違はないと思ふのだ。」

ともう一度念を押すやうに言つた。

そこへ註文のものが來た。私たちはそれを飮みながら、A君はまた續けて言つた。

「僕はしかし、この——相手の男がどんな人間だかといふことは、それも大たい解つてゐるの

だ。といふのは、先づ……その男は僕などよりはどうしても若いのだ。二十七八か？　せゐ〳〵いや、ひよつとすると、僕の女房は二十五だがそれよりも一つ二つぐらゐ年下かもわからないんだ。それは、この斬り毛がこのとほりまだ艶々と黒いからといふ譯ばかりではないのだよ……そして又、君、それよりももつと確實なことは、僕の女房とその男との關係はきつとまだ日が淺いのだ。さうだ、極く淺いのだよ……」

私は、そこで、どうしてそんな事がわかるかと訊ねた。すると、

「まあ考へても見たまへ。A君は更に言ふのだ、何故なら君、これが第一吾々のやうに一とほり年をとつた者なら、それからまたその關係がもういゝ加減深い馴染の仲だとしたなら、女に遭ひに行くのにわざ〳〵その日に散髪などはして行かないよ、」

「それはさうだ、」と私は答へた。それから——けれども私はまた言つた。

「しかし君、たゞそれだけの事で——つまりその斬り毛が細君の枕のそばに落ちてゐたからと言つて、すぐ君のやうにさうとばかりは……」

「いや、それが——そのとほり、これは唯單にそのほんの物的の證據に過ぎないけれども、實は君、まだほかにも色んな事があるのだよ……」

とA君はしどろもどろにいかにも淋しさうに、さうして獨りうなづきながら、默つて、じつた。

それから又、しばらくして——A君は私をぢつと見てゐたが、

「ねえ君。」と、思ひ出したやうに言つたのだ、「君が若し、そんな頭でなかつたら、この際僕は君をまで疑つたかも知れないよ。」

さうしてA君は氣の毒さうに笑つた。私はつい——横を見ると、ちやうどそこの壁に懸つた鏡に明るい電燈の下に私の頭は滑かに光彩陸離であつた。禿げた頭も、また、とんだところで身を助けるもの哉……私はさう思つたばかりでなく、それを口に出して仕方なく一緒に苦笑したことである。

それにしても、A君はこのとほり——まして妻君はよほどの美人だといふことだし、自分も友達甲斐に、何とかしたいものだとは思つたのであるが、しかし私にはこの——三本の斬り毛といふだけでは、これをこの上どう探偵することも出來ないではないか。但し天下の禿頭ならざる者、皆A君によつて呪はれてあれ！　だ。

女誡扇綺譚

一　赤嵌城址（シヤカムシヤ）

クツタウカン――字でかけば禿頭港。すべて禿頭といふのは、面白い言葉だが物事の行きづまりを意味する俗語だから、禿頭港とはやがて安平港の最も奥の港といふことであるらしい。臺南市の西端れで安平の廢港に接するあたりではあるが、さうして名前だけの説明を聞けばなるほどと思ふかも知れないが、その場所を事實目前に見た人は、寧ろ却つてそんなところに港と名づけてゐるのを訝しく感ずるに違ひない。それはただ低い濕つぽい蘆荻の多い泥沼に沿うた貧民窟みたやうなところで、しかも海からは殆んど一里も距つてゐる。沼を埋め立てた塵塚の臭ひが暑さに蒸せ返つて鼻をつく厭な場末で、そんなところに土着の臺灣人のせせこましい家が、不行儀に、それもぎつしりと立竝んでゐる。土人街のなかでもここらは最も用もない邊なのだが、私はその日、友人の世外民に誘はれるがままに、安平港の廢市を見物に行つてのかへり路を、世外民が參考のために持つて來た臺灣府古圖の導くがままに、ひよつくりこんなところへ來てゐた。

＊　＊　＊

人はよく荒廢の美を說く。又その概念だけなら私にもある。しかし私はまだそれを痛切に實感した事はなかつた。安平へ行つてみて私はやつとそれが判りかかつたやうな氣がした。そこにはさまで古くないとは言へ、さまざまの歷史がある。この島の主要な歷史と言へば、蘭人の壯圖、鄭成功の雄志、新しくはまた劉永福の野望の末路も皆この一港市に關聯してゐると言つても差支ないのだが、私はここでそれを說かうとも思はないし、また好古家で且詩人たる世外民なら知らないこと、私には出來さうもない。私が安平で荒廢の美に打たれたといふのは、又必ずしもその史的知識の爲めではないのである。だから誰でもいい、何も知らずにでもいい。ただ一度そこへ足を踏み込んでみさへすれば、そこの衰頽した市街は直ぐに目に映る。さうして若し心ある人ならば、そのなかから悽然たる美を感じさうなものだと思ふのである。

臺南から四十分ほどの間を、土か石かになつたつもりでトロッコで運ばれなければならない。坦坦たる殆んど一直線の道の兩側は、安平魚の養魚場なのだが、見た目には、田圃ともつかず沼ともつかぬ。海であつたものが埋まつてしまつた――といふより埋まりつつあるのだが、古圖に

よるともと退淺であつたものと見えて、名所圖繪式のこの地圖に水牛を曳かせた車の輞が半分以上も水に漬つてゐるのは、このあたりの方角であらう。しかし今はたとひ田圃のやうではあつても陸地には違ひない。さうしてそこの、變化もとりとめもない道をトロッコが滑走して行く熱國のいつも青青として草いきれのする場所でありながら、荒野のやうな印象のせゐか、思ひ出すと、草が枯れてゐたやうな氣持さへする。これが安平の情調の序曲である。

トロッコの着いたところから、むかし和蘭人が築いたといふ TE CASTLE ZEELANDIA 所謂土人の赤嵌城を目あてに歩いて行く道では、目につく家といふ家は悉く荒れ果てたままの無住である。あまりふるくない以前に外國人が經營してゐた製糖會社の社宅であるが、その會社が解散すると同時に空屋になつてしまつた。何れも立派な煉瓦づくりの相當な構への洋館で、ちよつとした前栽さへ型ばかりは殘つてゐる。しかし砂ばかりの土には雜草もあまり蔓つてはゐないその竝び立つた空屋の窓といふ窓のガラスは、子供たちがいたづらに投げた石のためでもあらうか、破れて穴があいてないものはなく、その軒には巢でもつくつてゐるのか驚くほどたくさんな雀が、黒く集合して喋りつづけてゐる。

私たちは試みにその一軒のなかへ這入つてみた。内には一ことなごなに散ばつて光つてゐるガラスの破片と壞れた窓枠とが塵埃に埋まつてゐるよりほかに何もなかつた。しかし二階で人の話聲がするので上つて行つてみると、そこのベランダに乞食ではないかと思へるやうな裝ひをした老人が、これでも使へるのだらうかと疑はれるぼろぼろになつた漁網をつくろつてゐる傍に、この爺の孫ででもあるか、五つ六つの男の子がしきりにひとり言を喋りながら、手であたりの埃を掻き集めて遊んでゐたらしいのが、我我の足音に驚いて闖入者を見上げた。老漁夫も我我を怖れてゐるやうな目つきをした。彼等はどこか近所の者であらうが、暑さをこの廢屋の二階に避けてゐたのであらう。ともかくもこれほど立派な廢屋が軒を連ねて立つてゐる市街は、私にとつては空想も出來なかつた事實である。（この二三年後に臺灣の行政制度が變つて臺南の官衙でも急に增員する必要が生じた時、これらの安平の廢屋を一時、官舍にしたらよからうといふ說があつたが尤もなことである。）

赤嵌城址に登つてみた。たゞ名ばかりが殘つてゐるので、コンクリートで築かれた古い礎のあとがあるとはいふけれども、どれがどれだかさすがの世外民もそれを知らなかつた。今は稅關俱樂部の一部分になつてゐる小高い丘の上である。私の友、世外民はその丘の上で例の古圖を取ひろげながら、所謂安平港外の七鯤身のあとを指さし、又古書に見えてゐるといふ鬼工奇絕と評せ

られる赤嵌城の建築などに就て詳しく説明をしてくれたものであるが、私は生憎と皆忘れてしまつた。さうして私の驚いたことといふのは、むかし安平の内港と稱したところのものは、今は全く埋沒してしまつてゐるのだといふだけの事であつた——全くあまり單純すぎた話ではあるが事實、私は歷史なんてものにはてんで興味がないほど若かつた。さうしてもし世外民の影響がなかつたならば、安平などといふ愚にもつかないところへ來てみるやうな心掛さへなかつたらう。さういふ程度の私だから、同じやうな若い身空で世外民がしきりと過去を述べたてて咏嘆めいた口をきくのを、さすがに支那人の血をうけた詩人は違つたものだ位にしか思つてゐなかつたのである。そのやうな私ではあり、またいくら蘭人壯圖の址と言つたところで、その古を偲ぶよすがになるやうなものとても見當らないのだから一向仕方がなかつたけれども、それでもその丘の眺望そのものは人の情感を唆らずにはゐないものであつた。單に景色としてみても私はあれほど荒涼たる自然がさう澤山あらうとは思はない。私にもし、エドガア・アラン・ポオの筆力があつたとしたら、私は恐らく、この景を描き出して、彼の「アッシャ家の崩壞」の冒頭に對抗することが出來るだらうに。

私の目の前に展がつたのは一面の泥の海であつた。黃ばんだ褐色として、それがしかもせせこましい波の穗を無數にあとからあとからと醱して來る、十重二十重といふ言葉はあるが、あのやうに重ねがさねに打ち返す浪を描く言葉は我我の語彙にはないであらう。その浪は水平線までつづいて、それがみな一樣に我我の立つてゐる方向へ押寄せて來るのである。昔は赤嵌城の眞下まで海であつたといふが、今はこの丘からまだ二三町も海濱がある。その遠さの爲めに浪の音も聞えない程である。それほどに安平の外港も埋まつてしまつたけれども、しかしその無限に重なりつづく濁浪は生溫い風と極度の遠淺の砂とに煽られて、今にも丘の脚下まで押寄せて來るやうに感ぜられる。その濁り切つた浪の面には、熱帶の正午に近い太陽さへ、その光を反射させることが出來ないと見える。光のないこの奇怪な海——といふよりも水の枯野原の眞中に、無邊際に重りつづく浪と間斷なく鬪ひながら一葉の舢舨が、何を目的にか、ひたすらに沖へ沖へと急いでゐる。

白く灼けた眞晝の下。光を全く吸ひ込んでしまつてゐる海。水平線まで重なり重なる小さな浪頭。洪水を思はせるその色。翩翻と漂うてゐる小舟。激しい活動的な景色のなかに闃として何の物音もひびかない。時折にマラリヤ患者の息吹のやうに蒸れたのろい微風が動いて來る。それらすべてが一種內面的な風景を形成して、象徵めいて、惡夢のやうな不氣味さをさへ私に與へたの

である。いや、形容だけではない、この景色に接してから後、私は亂醉の後の日などに、ここによく似た殺風景な海濱を悪夢に見て怯かされたこと、二三度もあつた。——このやうな海を私がしばらく見入つてゐる間、世外民もまた私と同じやうな感銘を持つたかも知れない、——この よく喋る男もたうとう押默つてしまつてゐた。私は目を低く垂れて思はず溜息を洩した。尤も多少は感慨のせゐであつたかも知れないが、大部分は炎天の暑さに喘いだのである。今更だが、かういふ暑さは蝙蝠傘などのかげで防げるものではない。

「ウ、ウ、ウ、ウ——」

不意に微かに、たとへばこの景色全體が呻くやうな音が響き渡つた、見ると、水平線の上に一隻の蒸汽船が黒く小さく、その煙筒や檣などが僅に鮮かに見える程の遠さに浮んでゐた。沿岸航路の船らしい。さうしてさつきから浪に搖れてゐる舢舨はそれの艀で、間もなく本船の來ることを豫想して急いでゐたものらしい。

「あの蒸汽はどこへ着くのだい」

私が世外民に尋ねると、我我の案內について來たトロッコ運搬夫が代つて答へをした——

「もう着いてゐる。今の汽笛は着いた合圖です」

「あそこへか。——あんな遠くへか」

「さうです。あれより內へは來ません」

私はもう一ぺん沖の方を念の爲めに見てから呟いた——

「フム、これが港か！」

「さうだ！」世外民は私の聲に應じた。「港だ。昔は、臺灣第一の港だ！」

「昔は……」私も思はず無意味に繰返した。それが多少感動的でいやだつたと氣がついた時、私は輕く虛無的に言ひ直した。「昔は……か」

丘を下りて我我の出たところは、もと來た路ではなかつた。ここは比較的舊い町筋であると見えて、一たいが古びてゐた。あたりの支那風の家屋はみんな貧しい漁夫などのものと見えて、あのヱランダのある二階建の堂堂たる空屋にくらべるまでもなく、小さくて哀れであつた。さうしてもともと所謂鯤身たる出島の一つであつたと見えて、地質は自から變つてゐた。砂ではなくもつと輕い、歩く度に足もとからひどい塵が舞ひ立つ白茶けた土であつた。但、來たときと一向變らない事は、そのあたりで私は全く人間のかげを見かけなかつた事である。通筋の家家は必ずしも皆空屋でもないであらうのに、どこの門口にも出入する人はなく、又話聲さへ洩れなかつた。

私たちが町を一巡した間に逢つた人間といふのはただあの廢屋のヱランダにゐた漁夫と小兒とだけである。行人に出逢ふやうなことなどは一度もなかつた。深夜の街とてもこれほどに人氣が絶えてゐることはないと言ひたい。しかも眩しい太陽が照りつけてゐるのだから、さびしさは一種別樣の深さを帶びてゐた。我我は默默と歩いた。不意にあたりの家竝のどこかから、日ざかりのつれづれを慰めようとでもいふのか、絃と呼ばれてゐる胡弓をならし出した者があつた。

「月下の吹笛よりも更に悲しい」

詩人世外民は、早くも耳にとめて私にさう言ふのであつた。月下の吹笛を聯想するところに彼の例のマンネリズムとセンチメンタリズムとがあるが、でも彼の感じ方には贊成していい。

私たちは再び養魚場の土堤の路をトロッコで歸つたが、それの歸り着いたところ、臺南市の西郊が、私のこれから言ほうとする禿頭港なのである。安平見物を完うするためにこのあたりをも一巡しようと世外民が言ひ出した時、時刻が過ぎてしまつてひどく空腹を覺えてゐながらも私が別に、もう澤山だと言はなかつたところを見ても、私がこの半日のうちに安平に對して多少の興味を持つやうになつてゐたことは判るだらう。

しかしトロッコから下りて一町とは歩かないうちに、私は禿頭港などは蛇足だつたと、思ひ始めたのである。ただ水溜の多い、不潔な人組んだ場末といふより外には、一向何の奇もありさうには見えなかつた。

* * *

二　禿頭港の廢屋

道を左に折れると私たちはまた泥水のあるところへ出た。片側町で、路に沿うたところには石垣があつて、その垣の向うから大きな榕樹が枝を路まで突き出してゐた。私たちはその樹かげへぐつたりして立ちどまつた。上衣を脫いで煙草へ火をつけて、さて改めてあたりを見まはすと、今出て來たこの路は、今までのせせつこましい貧民區よりはよほど町らしかつた。現に私たちが背を倚せてゐる石垣も古くこそはなつてゐるけれども相當な家でなければ、このあたりでこれほどの石垣を外圍ひにしたのはあまり見かけない。さう思つてあたりを見渡すと、この一廓は非常にふんだんに石を用ゐてゐる。みな古色を帶びてそれ故目立たないけれども、このあたりが今まで歩いて來たすべての場所とその氣持が全く違つて、汚いながらにも妙に裕かに感ぜられるとい

ふのも、どうやら石が澤山に用ゐてあることがその理由であるらしい。

この町筋——と云つても一町足らずで盡きてしまふが、この片側町の私たちの立つてゐる方は、それぞれに石圍ひをした五六軒の住宅であるが、その別の側、即ち私たちが向つて立つた前方は例によつて、惡臭を發する泥水である。黒い土の上には少しばかりの水が漂うてゐて、淺いところには泥を捏り歩きながら豚が五六疋遊んでゐるし、稍深さうなところには油のやうなどろどろの水に波紋を畫きながら家鴨が群れて浮んでゐる。この水溜の普通のものと違ふところは、これは濠の底に涸れ殘つたものであることである。大きな切石がこの泥池のぐるりを御丁寧に取圍んでゐる。しかも幅は七八間もあり、長さはと言へばこの町全體に沿つてゐる。深さは少くも十尺はある。この濠の向うには汀からすぐに立つた高い石圍ひがある。長い石垣のちやうど中ほどがすつかり瓦解してしまつてゐる。いや、悉く崩れたのではないらしい。もともとその部分がわざと石垣をしてなかつたらしい。その角であつた一角がくづれたのに違ひない。落ち崩れた石が幾塊か亂れ重なつて、埋め殘された角角を泥の中から現してゐる。その大きな石と言ひ亙溝と言ひ、恰も小規模な古城の廢墟を見るやうな感じである。いや、事實、城なのかも知れないのだ——崩れた石垣の向うのはづれに遠く、一本の龍眼肉の大樹が黒いまでにまるく、青空へ枝を茂らせてゐて、そのかげに灰白色の高い建物があるのは、ごく小型でこそはあれ、どうしたつて銃樓でなければならない。圓い建物でその平な屋根のふちには規則正しい凹凸をした砦があり、その下にはまた眞四角な銃眼窓がある。

「君！」

私は、またしても古圖をひらいてゐる世外民の肩をゆすぶつて彼の注意を呼ぶと同時に、今發見したものを指さした——

「ね、何だらう、あれは？」

さう言つて私は歩き出した、その小さな櫓の砦の方へ。——屋敷のなかには、氣がつくとほかにも屋根が見える。それの長さで家は大きな構だといふことがわかる。その屋敷を私は見たいと思つた。石圍ひの崩れたところからきつと見えると思つた。何でもいい、少しは變つたものを見つけなければ、禿頭港はあまり忌忌しすぎる。

石垣のとぎれた前まで來ると、それを通して案の定、家がしかも的面に見えた。いや、偶然にさう見るやうな意向によつて造られてゐたのであるのはやはりただ崩れ果てたのではなく、もとからそこが特にあけてあつた跡がある。水門としてであらう。何故

かといふのに濠はずつとこの屋敷の庭の中まで喰入つてゐて、崩れた石圍ひの彼方も亦、正しい長方形の小さい濠である。十艘の舢舨を竝べて繋ぐだけの廣さは確にある。さうしてその汀に下りるために、そこには正面に石段が三級ある。——しかもその水は涸き切つてしまつて、露はな底から石段まではどう見ても七尺以上の高さがある。——もしこの石段にすれすれになるほど水があつたならば、今は豚と家鴨との遊び場所であるこの大きな空しい濠も一面に水になるであらう。それにしてもこれ程の濠を庭園の内と外に築いた家は、その正面からの外觀は、三つの棟によつて凹字形をしてゐる。凸字形の濠に對して、それに沿うて建てられてゐる。正面に長く展がつた軒は五間もあり、またその左右に翼となして切妻を見せてゐる出屋の屋根は各〻四間はあらう。それが總二階なのである。——一たいが小造りな平家を幾つも竝べて建てる習慣のある支那住宅の原則から見て、これは甚だ大きな住居と言へるであらう。私はくたびれた足を休める意味でしやがんだ序に、土の上へこの家の見取圖をかき、それから目分量で測つた間數によつて、この建物は延坪百五十坪は優にあると計算した。一たい私は必要な是非ともしなければならない事に對してはこの上なくづぼらなくせに、無用なことにかけては妙に熱中する性癖が、その頃最もひどかつた。

「何をしてゐるんだい？」

世外民の聲がして、彼は私のうしろに突立つてゐた。私は何故かいたづらを見つけられた小兒のやうにばつの惡いのを感じたので、立つて土の上の圖線を足で踏みにじりながら、

「何でもない……。——大きな家だね」

「さう。やつぱり廢屋だね」

彼から言はれるまでもなく私もそれは看て取つてゐるが、さうでないものは戸そのものがもうまりに荒れ果ててゐる。澤山の窓は殘らずしまつてゐた。理由は何もないが、誰の目に見てもあ朽ちて、なくなつてしまつたに相違ない。

「全く豪華な家だな。二階の亞字欄を見給へ。實に細かな細工だ。またあの壁をごらん。あの家は裸の煉瓦造りではないのだ。美しい色ですつかり化粧してゐる。一帶に淡い紅色の漆喰で塗つてある。そのぐるりはまたくつきりと空色のほそい輪廓だらう。色が褪せて白つちやけてしまつてゐるところが、却つて夢幻的ではないか。走馬樓の軒下の雨に打たれないあたりには、まだ色彩がほんのりと殘つてゐる」

私が延坪を考へてゐる間に、同じ家に就て世外民には彼の觀方があつたのだ。彼の注意によつ

て私はもう一ぺん仔細に眺め出した。なるほど、二階の走馬樓――ヱランダの奥の壁には、淡いながらに鮮かな色がしつとり、時代を帶びてゐた。事實この廢屋は見てゐるほど、その隅隅から素晴らしい豪華が滾々と湧き出して來るのを感じた。たとへばその礎である。普通土間のなかに住んでゐる支那人の家は、その礎は一般にごく低い。地面よりただ一足だけ高くつくられてゐる。それだのに今我我の目の前にあるこの廢屋の礎は、高さ三尺ぐらゐはあり、やはり見事に揃つた切石で積み疊んであつた。もつと注意すると、水門の突當りにあたる場所には、その汀に三級の石段があることはもう知つてゐるが、その奥の家の高い礎にもやはり二三級の石段がある。その間口二間ほどの石段の兩側に、二本の圓柱があつて、それが二階の走馬樓を支へてゐるのだが、この圓柱は、……どうも少し遠すぎてはつきりとはわからないけれども、普通の外の柱よりも壯麗である。上の方には何やらごちやごちやと彫刻でもしてあるらしい。その根元にあたるあたり、地上にはやはり石の細工で出來た大きな水盤らしいのが、左右相對をして据ゑつけてある。――これらの事物がこの正面を特別に堂堂たるものにしてゐるのが私の注意を惹いた。私には、そこがこの家の玄關口ではないかと思はれて來た。

そこで私は自分の疑問を世外民に話した――

「このうちは、君、ここが正面、――玄關だらうかね」

「さうだらうよ」

「濠の方に向いて？」

「濠？　――この港へ面してね」

世外民の「港」といふ一言が自分をハッと思はせた。さうして私は口のなかで禿頭港と呼んでみた。私は禿頭港を見に來てゐながら、ここが港であつたことは、いつの間にやらつい忘却してゐたのである。一つには私は、この目の前の數奇な廢屋に見とれてゐたのと、もう一つにはあたりの變遷にどこにも海のやうな、港のやうな名殘を捜し出すことが出來なかつたからである。この點に於ては世外民は、殊に私とは異つてゐる。彼はこの港と興亡を共にした種族でこの土地にとつては私のやうな無關心者ではなく、またそんな理窟よりも彼は今のさつき古圖を披いてしみじみと見入つてゐるうちに、このあたりの往時の有樣を腦裡に描いてゐたのであらう。「港」の一語は私に對して一種靈感的なものであつた。今まで死んでゐたこの廢屋がやつと靈を得たのを私は感じた。泥水の濠ではないのだ。この廢渠こそむかし、朝夕の滿潮があの石段をひたひたと浸した。走馬樓はきらきらかに波の光る港に面して展かれてあつた。さうして海を玄關にしてこの家

は在つたのか。——してみれば、何をする家だかは知らないけれども、この家こそ盛時の安平の絶好な片身ではなかつたか。私はこの家の大きさと古さと美しさとだけを見て、その意味を今まで全く氣づかずにゐたのだ。

今まで氣づかなかつただけに、私の興味と好奇とが相縺れて一時に昂つた。

「這入つてみようぢやないか。——誰も住んではゐないのだらう」私は息込んでさう言つたものの、濠を距てまた高い石圍ひを繞してゐるこの屋敷へはどこから這入れるのだか、ちよつと見當がつかなかつた——道ばたの廢屋なら、さつき安平でやつたやうについ、つかつかと這入り込んでみたいのだが。後に考へ合せた事だが、入口が直ぐにわからないといふこの同じ理由が、この廢屋を、その情趣の上でも事實の上でも、陰氣な別天地として保存するのに有力であつたのであらう。

その家のなかへ這入つてみたいといふ考へが、世外民に同感でない筈はない。世外民はきよろきよろとあたりを見廻してゐたが、我我が背をよせて立つてゐた石圍ひの奥に、家の日かげに臺灣人の老婆がひとり、棕櫚の葉の團扇に風を求めて小さな木の椅子に腰かけてゐるのを彼は見つけた。彼は直ぐにそこへ歩いて行つて、何か話をしてゐた。向側の廢屋を指さしたりしてゐる樣子で、そのふたりの對話の題目はおのづと知れる。

世外民はすぐに私の方へ歸つて來た。「わかつたよ、君。あの道を行つて」彼は言ひながら濠のわきにある道を指さして「向うに裏門があるさうだ。少し入組んでゐるやうだが、行けば解るさ。——やつぱり廢屋だ。もう永いこと誰も住んでゐないさうだ。もとは沈といふ臺灣南部では第一の富豪の邸だつたのださうだ。立派な筈さ」

話しながら私たちはその裏門を捜した。世外民が不確な聽き方をして來てゐたので、私たちはちつとまごついた。こせこせした家の間へ入り込んでしまつた。尋ねようにもあたりに人は見當らなかつた。このあたりは割に繁華なところらしいのだが、人氣のないのは、今が午後二時頃の日盛りで、彼等の風習でこの時刻には大抵の人間が午睡を貪つてゐるのである。私たちは仕方なしにいい加減に歩いたが、もともと近いところまで來てゐた事ではあり、また目ざす家は聳えてゐたから自とわかつた。但、その家はあの濠のあちらから見た時には、ただ一つの高樓であつたが、裏へ來て見ると、その樓の後には低い屋根が二三重もつながつてゐた。所謂五落の家といふのはこんなのであらうが、大家族の住居だといふことが一層はつきりすると同時に　あの正面の二階建が主要な部屋だといふことは確かだ。私たちは他の場所よりも、あの走馬樓のある二階や

圓柱のあつた玄關が第一に見たかつた。それ故、私たちは裏門を入るとすぐに、低い建物はその外側を廻つて、表へ出た。

圓柱はやはり石造りであつた。遠くから、上部にごちやごちやあると見たものは果して彫刻で、二本の柱ともそこに纏つてゐる龍を形取つたものであつたが、一つは上に昇つてゐたし、一つは下に降りようとしてゐた。雨に打たれない部分の凹みのあたりには、それを彩つた朱や金が黒みながらもくつきりと殘つてゐた。割合から言つて模樣の部分が多すぎて、全體として柱が低く感ぜられたし、また家の他の部分にくらべて多少古風で莊重すぎるやうに私は感じた。しかし私と世外民とは、この二つの柱をてんでに撫でて見ながら、この家が遠見よりも、ここに來て見れば近まさりして贅澤なのを知つた、細部が自と目についたからである。尤も、もし私に眞の美術的見識があつたならば、たかが殖民地の暴富者の似而非趣味を嘲笑つたかも知れないが、それにしても、風雨に曝されて物毎にさびれてゐる事が厭味と野卑とを救ひ、それにやつとその一部分だけが殘されてあるといふことは却つて人に空想の自由をも與へたし、また哀れむべきさまざまな不調和を見出すより前にただその異國情緒を先づ喜ぶといふこともあり得る。況んや、私は美的鑑識にかけては單なるイカモノ喰ひなことは自ら心得てゐる。

細長い石を網代に組み竝べた床の緣は幅四尺ぐらゐ、その上が二階の走馬樓である。私たちはそこへ上つてみたいのだ。觀音開きになつた玄關の木扉は、一枚はもう毀れて外れてしまつてゐた。殘つてゐる扉に手をかけて、私は部屋のなかを覗いた。——二階へ上る階段がどこにあるだらうかと思つて。支那家屋に住み慣れてゐる世外民には大たいの見當が判ると見えて、彼はすぐづかづかと二三歩廣間のなかへ歩み込んだ。

「××××、××××！」

不意にその時、二階から聲がした。低いが透きとほるやうな聲であつた。誰も居ないと思つてゐた折から、ことにそれが私のそこに這入らうとする瞬間であつただけに、その呼吸が私をひどく不意打した。ことに私には判らない言葉で、だから鳥の叫ぶやうな聲に思へたのは一層へんであつた。思ひがけなかつたのは、しかし、私ひとりではない。世外民も踏み込んだ足をぴたと留めて、疑ふやうに二階の方を見上げた。それから彼は答へるが如くまた、問ふが如く叫んだ——

「××!?」

「××!?」

——世外民の聲は、廣間のなかで反響して鳴つた。世外民と私とは互に顏を見合せながら再び

二階からの聲を待つたけれども、聲はそれつきり、もう何もなかつた。世外民は足音を竊んで私のところへ出て來た。

「二階から何か言つたらう」

「うん」

「人が住んでゐるんだね」

私たちは聲をしのばせてこれだけの事を言ふと、這入つてくる時とは大へん變つた歩調で——つまり遠慮がちに、默つて裏門から出た。しばらく沈默したが出てしまつてからやつと私は言つた。

「女の聲だつたね。一たい何を言つたのだい？　はつきり聞えたのに何だかわからなかつた」

「さうだらう。あれや泉州人の言葉だものね」

普通に、この島で全く廣く用ゐられるのは廈門の言葉で、それならば私も三年ここにゐる間に多少覺えてゐた——尤も今は大部分忘れたが、泉州の言葉は無論私に解らう筈はなかつたのである。

「で、何と言つたの——泉州言葉で」

「さ、僕にもはつきり解らないが。『どうしたの？　なぜもつと早くいらつしやらない。……』——と、何だか……」

「へえ？　そんな事かい。で、君は何と言つたの」

「いや、わからないから、もう一度聞き返しただけだ」

私たちはきよとんとしたまま、疲勞と不審と空腹とをごつちやに感じながら、自然の筋道として再び先刻の濠に沿うた道に出て來た。ふと先方を見渡すと、自分たちが先刻そこから初めてあの廢屋を注視したその同じ場所に、老婆がひとり立つて、ぢつと我我がしたと同じやうに濠を越してあの廢屋をもの珍らしけに見入つてゐるのであつた。それが、近づくに從つて、今のさつき世外民に裏門への道を教へた同じ老婆だといふことが分つた。

「お婆さん」その前まで來た時に世外民は無愛想に呼びかけた。「嘘を教へてくれましたね」

「道はわかりませんでしたか」

「いいや。……でも、人が住んでゐるぢやありませんか」

「人が？　へえ？　どんな人が？　見えましたか？」

この老婆は、我我も意外に思ふほど熟心な目つきで私たちの返事を待つらしい。

「見やしませんよ。這入つて行かうとしたら二階から聲をかけられたのさ」

「どんな聲？　女ですか？」

「女だよ」

「泉州言葉で？」

「さうだ！　どうして？」

「まあ！　何と言つたのです!?」

「よくわからないが、『なぜもつと早く來ないのだ？』と言つたと思ふのです」

「本當ですか？　本當ですか！　本當に、貴方がた、お聞きになつたのですか！　泉州言葉で、『なぜもつと早く來ないのだ』つて!?」

「おお！」

臺灣人の古い人には男にも女にも、歐洲人などと同じく演劇的な誇張の巧みな表情術がある。その老婆は今それを見せてゐるが、彼女のそれはただの身振りではなく眞情が溢れ出てゐる。恐怖に似た目つきになり、氣のせゐか顏色まで青くなつた。この突然な變化が寧ろ私たちの方を不氣味にした位である。彼女はその感動が少し鎭まるのを待ちでもするやうに沈默して、しかし私

たちに注いだ凝視をつづけながら、最後に言つた——

「早く緣起直しをしておいでさい。——貴方がたは、貴方がたは死靈の聲を聞いたのです！」

三　戰慄

老婆は改めてやつと語り出した、初めはひとり言めいた口調で……

「……さういふ噂は長いこと聞いてはゐました。けれどもその聲を本當に、自分が本當に聞いたといふ人を——貴方がたのやうな人を見るのは初めてです。若い男の人たちは、一たいそこへ近づいてはいけなかつたのです。貴方がたは最初、私にその裏口をおききになつた時に、私はほんたうはお留めしたいと思つたのですが、それには長い話がいるし、また昔ものが何をいふかとおもひになると思つたものですから……。それに今はもう月日も經つたことではあり、私もまさかそんなことがあらうと信じなかつたものだから……。でも、私は何か惡い事が起らねばいいと氣がかりになつて、實は貴方がたの樣子をこちらから見守つてゐたところです。——あれは昔から幽靈屋敷だといふので、この邊では誰も近づく人のなかつたところなのです。——ごらんなさい。あそこの大きな龍眼肉の樹には見事な實が鈴生りにみのるのですが、それだつて採りに行く

人もない程です……」

彼女は向うに見える大樹を指さし、自とその下の銃樓が目についたのであらう——

「昔はあの家は、海賊が覘つて來るといふので、あの櫓の上に毎晩鐵砲をもつて不寢番が立つた程の金持でした。北方の林に對抗して南方の沈と言へば、誰ひとり知らぬ人はなかつたのです。いいえ、まだつい六十年になるかならぬぐらゐの事です。大きな戒克船を五十艘も持つて、泉州や漳州や福州はもとより廣東の方まで取引をしたといふ大商人で船問屋を兼ねてゐました。『安平港の沈か、沈の安平港か』とみんな唄つたものです。——御存じの通りそのころの安平港はまだ立派な港で、そのなかでも禿頭港と言へば安平と臺南の市街とのつづくところで、港内でも第一の船着きでした。これほど賑やかなところは臺南にもなかつた程だといひます。——沈家が本當に安平港の主だつたと見える。——沈家が沒落すると一緒に、安平港は急に火が消えたやうになりました。沈のゐない安平港へは用がないと言つて來なくなつた船が澤山あるさうです。それに海はだんだん淺くなるばかりで、しかもいつの間にか氣がついた頃にはすつかり埋まつてゐたのですよ。この急な變り方までが、まるで沈家にそつくりだと、今もよくみんなして年寄たちは話し合ひますよ。……沈の家ですか？　それがまた不思議なほど急に、一度に、唯の一夏の、

しかも只の一晩のうちに急に沒落したのです。百萬長者が目を開けて見ると乞食になつてゐたのです。夢でもかうは急に變るまい。他人事ながら考へれば人間が味氣なくなる——と、家の父はこの話が出るとよくさう言ひました。何でも沈の家ではその時、盛りの絶頂だつたのです。今の普請もついその三四年前に出來上つたばかりで、その普請がまた大したもので、石でも木でもみんな漳州や泉州から運んだので、五十艘の持船がみんな、その爲めに二度づつ、そればかりに通うたといふ程ですよ。それといふのも沈家には、この子の爲めなら、双親とも目がないといふ可愛い、ひとり娘があつて、それの婿取りの用意にこんな大がかりな普請をしたものださうです。それに美しい娘だつたさうです——私が見た時には、もう四十ぐらゐになつてゐたし、落ぶれてゐんになつてはゐましたが、それでもさう聞けばなるほどと思ふやうなところはありました……」

「そんなにまた、急に、どうして沈の家が沒落したのです？」世外民は、性急に話の重大な點をとらへてたづねた。

「ごめんなさい、私は年寄で話が下手で」——聞いてゐるうちに解つて來たが、この老婆は上品な中流の老婦人であつた。「怖ろしい海の颶風だつたのです。陸でも崩れた家が澤山あつたさうで

す。それはさうでせう。——ごらんなさい、あの沈の家の水門の石垣でさへあの角が吹き崩されたのださうです。さうしてそれを直すことさへもう出來なかつたのですが、夜が明けてみてその石垣——そのころはまだ築いたばかりの新しい石垣の、あんな大きな石が崩れ落ちてゐるのを見て、沈の主人は心配さうにそれを見てゐたさうです。運の悪い事に、その晩、宵のうちは靜かな滿月の夜でもあつたさうだし、沈の五十艘の船はみんな海に出てゐたのださうです。沈の主人は——五十位の人だつたさうですが、崩れた石垣を見るにつけても、海に出てゐた持船が心配だつたのでせう。船の便りは容易に知れなかつたさうですが、五日經つても十日經つても歸る船はなかつたさうです。ただ人間だけが、それも船出した時の十分の一ぐらゐの人數がぼつぼつと病み呆けて歸つて來て、それぞれに難船の話を傳へただけでした。無事に歸つた船は只の一艘もなかつたさうです。尤も、人の噂では、港にゐて颱風に出會はなかつた船も三艘や五艘はあつたに相違ないが、友船が本當に難船したことから惡企みを思ひついて、自分達の船も難船して自分は死んだやうな顏をして、船も荷物も橫領したまま遠くへ行つてしまつて歸つて來なかつたものも、どうやらあるらしいと言ひます。現に何處とかの誰は廣東で、死んだ筈の何の某に逢つたの、名前と色どりとこそ變つてゐたが沈の船の『關關』とそつくりの

ものを厦門で見かけたなどと、言ふ人もあつたさうです。何にしても一杯に荷物を積み込んだ大船が五十艘歸つて來なかつたのです。その騷ぎはどんなだつたか判るではありませんか。なかには沈自身の荷物ではないものも半分以上あつて、荷主は、みんな沈の家へ申し合せて押かけて、その償ひを持つて歸つたさうです。普請や娘の支度などで金を費つたあとではあり、それに派手な人で商ひも大きかつただけに、手許には案外、金も銀も少かつたと言ひます。人の心といふものは怖ろしいもので、かうなつて仕舞ふと、取るものは殘らず取立てても、拂つて貰へる可きものは何も取れない。そればかりか殆んど日どりまで定つてゐた娘の養子は斷つて來たさうです。もともと金持の沈と緣組をする筈で貧乏人の沈と緣を結ぶつもりではなかつたからでせう。……

おお、あそこに、いい日蔭が出來ました。あそこへ行つてまあ腰でもお掛けなさい」

老婆は、ちやうど前栽に一本だけあつた榕樹が、少し西に傾いた日ざしによつてやや闊い影を造つたのを見つけて、さう言ひながら自分がさきに立つて小さな足でよちよちと歩いた。今まで別に氣がつかずにゐたが、この老婆の家といふのも大したことはないが一とほりの家で、昔の繁華の地に殘つてゐるだけの事はあつた。

樹かげで老婆は更に話しつづけた。彼女はよほど話好きと見えて、また上手でもある。ただ小

さい聲で早口で、それが私にとつては外國語だけに聽きとりにくい場合や、判らない言葉などもある。私は後に世外民にも改めて聞き返したりしたが、更に老婆の說きつづけたことは次のやうである——

前述のやうな具合で沈の家が沒落し出すと、それが緒で主人の沈は病氣になりそれが間もなく死ぬと同時に、緣談の破れたことを悲しんでゐた娘は重なる新しい歎きのために鬱鬱としてゐた擧句、たうとう狂氣してしまふ。その娘を不憫に思つてゐるうちにその母親も病氣で死んでしまふ。さて、作り話のやうに、不運は鎖になつてつづいた。

一たいこの沈といふ家に就て世間ではいろいろなことを言ふ。

* * *

その四代ほど前といふのは、何でも泉州から臺灣中部の胡蘆屯の附近へ來た人で、もともと多少の資產はあつたさうだが、一代のうちにそれほどの大富豪になつたに就ては、何かにつけて隨分と非常なやり口があつたらしい。虛構か事實かは知らないけれどもこんなことを言ふ——例へば、或時の如き隣接した四邊の田畑の境界標を、その收獲が近づいたところを見計つて、夜のうちに出來るだけ四方へ遠くまで動かして置く。その石標を抱いて手下の男が幾人も一晩のうちに建てなほして置くのだ。次の日になると平氣な顏をして、その他人の田畑を非常な多人數で一時に刈入れにかかつた。所有者達が驚いて抗議をすると、その石標を楯に逆に公事を起した。その前にはずつと以前から、その道の役人とは十分結託してゐたから、彼の公事は負ける筈はなかつた。彼は惡い役人に扶けられまた扶けて、臺灣の中部の廣い土地は數年のうちに彼のものになり、そこのどの役人達だつて彼の顏の動くままに動かなければならないやうになつた、惡い國

を一つこしらへた程の勢であつた。一つこの頃、沈は兄弟でそんなことをしてゐたのだが、兄の方は鹿港の役所で役人と口論の末に、役人を斬らうとして却つて殺されてしまつた。これだつても、どうやら弟の沈が仕組んで兄を殺させたのだといふ噂さへある程で、兄弟のうちでも弟の方に一層惡辣がある。實際、兄の方はいくらかはよかつたらしい。ある時、彼等のいつもの策で、隣の畑へ犂を入れようとしたのだ。その時にはその畑に持主が這入つてゐるのを眼の前に見ながら最も圖太くやりだしたのだ。といふのはその畑の持主といふのは七十程の寡婦だつた。だから何の怖れることもなかつたのだ。しかし第一の犂をその畑に入れようとすると、場にあつたこの年とつた女は急に走つて來て、その犂の前の地面へ小さな體を投げ出した。——

「助けて下さい。これは私の命なのです。私の夫と息子とがむかし汗を流した土地です。今は私がかうして少しばかりの自分の食ひ代を作り出す土地です。——この土地を取り上げる程なら、この老ぼれの命をとつて下さい！」

沈の手下に働くだけに悪い者どもばかりではあつたけれども、さすがに犂をとめたまま、土をさへ突かうとする者もなかつた。男どもは歸つてこの事を兄の沈に話すと、彼は苦笑をして「仕方がない」と答へたさうだ。弟の沈はその時は何も知らなかつた。しかし、その後二三日して畑を見廻りに來て、馬上から見渡すと彼等の畑のなかにひどく荒れてゐるところがあるので作男どもを叱つた。するとそれが例の寡婦の畑だと判つて、初めてその事情を聞いた。なるほど、今もひとり老ぼれの婆さんがそこにゐるのを見ると、彼は馬を進めた。さうして近くに働いてゐた自分の作男に、言つた——

「犂を持つて來い」

主人の氣質を知つてゐるから作男は拒むことが出來なかつた。主人は再び言つた——

「ここの荒れてゐる畑へ、犂を入れろ。こら！　いつもいふ通り、おれは自分の地所の近所に手のとどかない畑があるのは、氣に入らないのだ」

寡婦はこの前と同じ方法を取つて哀願した。作男が主人の命令とこの懇願との板挟みになつて躊躇してゐるのを見ると、沈は馬から下りた。畑のなかへ歩み入りながら、

「婆さん。さあ退いた。畑といふものは荒して置くものぢやない」

さう言ひながら、大きな犂を引いてゐる水牛の尻に鞭をかざした。婆さんは沈の顏を見上げたきり動かうとはしなかつた。

「本當に死にたいんだな。もう死んでもいい年だ」

言つたかと思ふと、ふり上げてゐた鞭を強かに水牛の尻に當てた。水牛が急に歩き出した。無論、婆さんは轢殺された。

「さあぐづぐづせずに、あとを早くやれ——。こんな老ぼれのために廣い地面を遊ばして置いてなるものか」

いつもと大して變らない聲でさう言ひながら、この男は馬に乘つて歸つてしまつた。これほどの男だからこそ、その兄があんな死に方をした時にも、世間では弟の穽に落ちたのだと言つて、でも自分の手に懸けないだけがまだしも兄弟の情だ、などと噂したさうである。何にしても、兄が死んでしまつてから弟がその管理を一切ひとりでやつた。その後、その家は一層榮え

るし、彼は七十近くまで生きてゐて——悪い事をしても報いはないものかと思ふやうな生涯を終る時に、彼は一つの遺言をしたのだ。その遺言は甚だ注意すべきものである。

「今から後、三十年經つたら我我の家族は、田地をすつかり賣り拂つて仕舞はなけやならない。それから南部の安平へ行つてそこで舟を持つて本國の對岸地方と商賣をするのだ」

その理由を尋ねようと思ふともう昏睡してしまつてゐた。しかし子供はその遺言を守つて、安平の禿頭港へ出て來たのだと言ふ。——この遺言の話はやつぱり沈の一族からずつと後に洩れたといふので皆知つてゐたが、あの一晩の颶風が基で、それこそ颶風のやうに沈家に吹き寄せた不幸の折から、世間の人人は沈家の祖先の遺言から、またその祖先のした悪行をさまざまに思ひ出して、因果は應報でさすがに天上聖母は沈の持舟を守らない。——あの遺言こそまるで子孫に今日の天罰を受けさせようと思つて、老寡婦の死靈が臨終の仇敵に乘り移つたのだとか、あの颶風はその老寡婦が犂で殺されてから何十年目の祥月命日であるとか、人人は沈家の悲運を同情しながらもそんなことを噂した。何にしても、大きな不運の後であとからあとから一時に皆、死に絶えてしまつて、遺つた人といふのは年若い娘ひとりで、それさへ氣が狂つて生きてゐた。祖先にたたひどんな噂があらうとも、かうして生きてゐる纖弱い女をほつて置くわけにはいか

ないといふので、近隣の人人は、いつも食事くらゐは運んでやつた。それが永い間絶えなかつたといふのも、いはば金持の餘德とも言へよう。といふのは食事を運んでやる人たちは、その都度何かしら、その家のそこらに飾つてある品物の手輕なものを、一つ二つづつこつそりと持つて來る者があるらしかつた。部屋にあつたものは自と少くなり、さうなると近隣でも相當な家の人達はもうそこへ行かなくなつた——他人のものを少しづつ掠めてくるやうな人たちの一人と思はれたくないと思つて、自と控へるやうになつたのである。その代りにはまた、厚かましい人があつて、當然のやうな顏をして品物を持つて來てそれを賣拂つたりするやうな人も出て來た。下さいと言つて賴むと氣の違つてゐる人は、極く大樣にくれるといふことであつた。——「さあ、お祝ひに何なりと持つておいで」高價なものをさういふ風に奪はれて、やつぱりあの家では昔の年貢を今收めてゐるのだよなどと、口さがない人人は言つた。

どういふ風に、娘は氣が違つてゐるのかといふのに、娘は刻刻に人の——恐らくは彼女の夫の、來るのを待つてゐるらしかつた。人の足音が來さへすれば叫ぶのだ——泉州言葉で、

「どうしたのです。なぜもつと早く來て下さらない？」

——つまり、我我が聞いたのと全く同じやうな言葉なのだ。彼女は姿こそ年とつたがその聲

は、いつまでも若く美しかつた！　——我我が聞いたその聲のやうに？

その聲を聞いて、人人は深い哀れに打たれながら、その部屋へ這入つて行くと、彼女は人人を先づ凝視して、それからさめざめと泣くのだ。待つてゐた人でなかつた事を怨むのだ。そこで人人は明日こそその當の人が來るだらうと言つて慰める。彼女はまた新しい希望を湧き起す。彼女はいつも美しい着物を着て人を待つ用意をしてゐた。たしかに海を越えて來るその夫を待つてゐるのだといふことは疑ひなかつた。さういふ風にして彼女は二十年以上も生きてゐたのだらう——

「私が十七の年に、初めてこの家へ來たころには、その人はまだ生きてゐたものです」と、この長話を我我に語つた禿頭港の老婦人は言つた。——この婦人ももう六十に近いであらうが四十年位前にこの家へ嫁に來たものと見える。「私は近づいてその人を見た事はありませんけれども、天氣の靜な日などには、よく皆が『またお嬢さんが出てゐるよ』といふものだから、見ると走馬樓の欄干によりかかつて、ずつと遠い海の方を長いこと——半日も立つて見てゐるらしいやうなことがよくありました。夫を乘せた舟の帆でも見えるやうに思つたものですかねえ。いづれやつぱりその海が見えるからでせう、お嬢さんのゐる部屋といふのは、あの二階ばかりで、外の部屋へは一足も出なかつたさうです。皆はお嬢さん、お嬢さんと呼び慣はしてはゐましたが、その頃は

もうやがて四十ぐらゐにはなつてゐるだらうといふ事でした。それが、何日からかお嬢さんの姿をまるで見かけなくなつたのです。病氣ででもあらうかと思つて人が行つてみると、お嬢さんはそこの寢牀のなかでもう腐りかからうとしてゐたさうです。金襴を飾つて花嫁姿をしてゐたと言ひますよ。——それが不思議な事に、それだのに、その人が二階へ上らうとすると、やつぱりお嬢さんが生きてゐた時と同じやうに、涼しい聲でいつもの言葉を呼びかけたさうです。ね！　貴方がたが聞いたのと少しも違はない言葉ですよ！　だから死んでゐようなどとは露思はなかつただけにその人は一層びつくりしたとの事です。それから後にも、その聲をそこで聞いたといふ人は時時あつたのです。——お嬢さんは病氣といふよりは、もしや飢ゑて死んだのではあるまいかと云ふ人もあります。といふのはその家のなかには、昔そこにあつた見事な樣々の品物が、もう何一つ殘つてゐなかつたさうですから。さうして死骸に附いてゐた金襴は葬の費用になつたと言ひます」

四　怪傑沈氏

この風變りな一日の終りに私と世外民とは醉仙閣にゐた。——私たちのよく出かける旗亭であ

る。

これが若し私が入社した當時のやうな熱心な新聞記者だつたら、趣味的ないい特種でも拾つた氣になつて、早速「廢港ローマンス」とか何とか割註をして、さぞセンセイショナルな文字を羅列することを胸中に企ててゐただらうが、その頃は私はもう自分の新聞を上等にしてやらうなどといふ考へは毛頭なかつた。每日の出社さへ滿足には勤めずにわが酒徒世外民とばかり飲み暮してゐた。諸君はさだめし私の文章のなかに、さまざまな蕪雜を發見することだらうと覺悟はしてゐるが、それこそ私がそのころ飲んだ酒と書き飛ばした文字との覿面の酬いであらう……。

——で、私たちは醉仙閣で飲んでゐた。

世外民は禿頭港の廢屋に對して心から怪異の思ひがしてゐるらしい。さう言へばあの話はいかにも支那風に出來てゐる。廢屋や廢址に美女の靈が遭つてゐるのは、支那文學の一つの定型である。それだけにこの民族にとつてはよく共感できるらしい。しかし、私はといふとどうもさうは行かない。私がそのうちで少しばかり氣に入つた點と言へば、その道具立が總て大きく、その色彩が惡くアクどい事にあつた。もしこれを本當に表現することさへ出來れば、浮世繪師芳年の狂想などはアマイものにして仕舞ふことが出來るかも知れない。そのなかにある人物は根强く大陸的で、話柄の美としてはそれが醜と同居してゐるところの野蠻のなかに近代的なところがある。幽靈話とすればそれが夜陰や月明ではなしに、明るさもこの上ない烈日のさなかなのが取柄だが、總じてこの話は怪異譚としては一番價値に乏しいでゐるらしい。いや、むしろ恐怖してさへゐるかも知れない。

私は世外民の荒唐無稽好きを笑つてゐる。——といふのはそれに對しては私はもうとつくに思ひ當つたことがあるからだ。なぜ私はあの時すぐ引返して、あの廢屋のところへ入込んでゐなかつたらうか。さうすれば世外民に今からは頭張らせはしないのだ。それをしなかつたといふのも世外民があまり厭がるのと、それよりも空腹であつたのと、また億劫な思ひをして行つてみるまでもなく解つてゐると信じたからだ。それもすぐに、さうと氣がついたのならよかつたのに、あんな判りきつた事が、なぜ一時間も經つてからやつと氣がついたといふのだらう。多分、あまりに思ひがけなく踏込まうとするその刹那であつた爲めと、二階から響いて來た言葉が外國語だつたのと、それにつづいてあの老婦人の大袈裟な戰慄の身振りやら、ちよつと異樣な話やらで、全くやしい事だが私も暫くの間は、多少驚かされたものと見える。本當に理智の働く餘裕

はなかつたらしい。——廢屋だと確めて置いた家の中から人聲がしたのであつてみれば、それはその家の住人でない誰かが、そこにゐたのにきまつてゐる。その人のために我我が這入つて行くことを遠慮する理由は少しもなかつた筈だ。現に安平の家のなかにだつて網を繕つてゐた人間の聲がしても我我は平氣で闖入して行つた程だ。何のために我我は躊躇したか。世外民が「人が住んでゐるんだね」と言つたからだ。世外民は何故そんなことを言つたか。それはその時の彼の心理を考へなければならない。多分、聲が我我の踏み込んだ瞬間に恰もそれを咎めるがごとく響いた事が一つ——しかも、その言葉の意味は、あとで聞けば全く反對のものであるが。またあの廢屋は安平のものよりも數十倍も堂堂としてゐて荒れながらにもなほ犯しがたい權威を具へてゐた事。最後に一番重なる理由としてはそれが單に、女の若さうな玲瓏たる聲であつたが爲めに、若い男である世外民も私も無意識のうちに妙にひるんでゐたのである。さうして、その聲に就ては何の考へることをもせずに、ただびつくりして歸つて來てしまつたのである。

「何にしても這入つて見さへすればよかつたのになあ。馬鹿馬鹿しい、誰が幽靈の聲などを聞くものか。生きて心臟のドキドキしてゐる若い女——多分、若くて美しいだらうよ、そんな氣がするな——それがそこにゐただけの事さ。——生きてゐればこそものも言ふのさ……」

「でも、むかしから傳はつてゐるのと同じ言葉を、しかも泉州言葉を、それもそのたつた一言を、その女が何故我我に向つて言ふのだ」

世外民は抗議した。

「泉州言葉は幽靈の專用語ではあるまいぜ。泉州人なら生きた人間の方がどうも普通に使ふらしいぜ。アハ、ハハ。それが偶然、幽靈が言ひ慣れた言葉と同じだつたのは不思議と言へば不思議さね。——でもたつたそれだけの事だ。君はあの言葉が我我に向つて言はれたと思ひ込むから、幽靈の正體がわからないのだよ。——外の人間に向つて言つた言葉が偶然我我に聞かれたのだ。いや。我我を外の人間と間違へて、その女が言ひかけたのさ。さうと氣がついたから、たつた一言だけしか言はなかつたのだ。君、何でもないよくある幽靈だぜ、あれや……」

「それぢや、昔からその同じ言葉を聞いたといふその人達はどうしたのだ」

「知らない」私は言つた。「それや僕が聞いたのぢやないのだからね。——ただ、多分は君のやうな、幽靈好きが聞いたのだらうよ。だから僕は自分の關係しない昔のことは一切知らないのだ。ただ今日の聲なら、あれは正しく生きてる若い女の聲だよ！　世外民君、君は一たいあまり詩人過ぎる。舊い傳統かしみ込んでゐるのは結構ではあるが、月の光では、ものごとはぼんやりしか

見えないぜ。美しいか汚いかは知らないが、ともかく太陽の光の方がはつきりと見えるからね」

「比喩などを言はずに、はつきり言つてくれ給へ」一本氣な世外民は少々憤つてゐるらしい。

「では言ふがね、亡びたものの荒廢のなかにむかしの靈が生き殘つてゐるといふ美觀は、——これや支那の傳統的なものだが、僕に言はせると、……君、憤つてはいかんよ——どうも亡國的趣味だね。亡びたものがどうしていつまでもあるものか。無ければこそ亡びたといふのぢやないか」

「君！」世外民は大きな聲を出した。「亡びたものと、荒廢とは違ふだらう。——亡びたものはなるほど無くなつたものかも知れない。しかし荒廢とは無くならうとしつつある者のなかに、まだ生きた精神が殘つてゐるといふことぢやないか」

「なるほど。これは君のいふとほりであつた。しかしともかくも荒廢は本當に生きてゐることとは違ふね。だらう？　荒廢の解釋はまあ僕が間違つたとしてもいいが、そこにはいつまでもその靈が横溢しはしないのだ。むしろ、一つのものが廢れようとしてゐるその蔭からは、もつと力のある潑剌とした生きたものがその廢朽を利用して生れるのだよ。ね、君！　くちた木にだつてさまざまな茸が簇るではないか。我我は荒廢の美に囚はれて歎くよりも、そこから新しく誕生する

ものを讃美しようぢやないか——なんて、柄にない底にちやんとしまつてある程なら、僕だつて臺灣三界でこんなだらしない酒飲みになれやしないだらうがね。だからさ、僕がさういふ生き方をしてゐるかどうかは先づ二の次にしてさ」

「成程。——ところがそれが禿頭港の幽靈——でないといふならば、その生きた女の聲と何の關係があるんだらう？」

「下らない理窟を言つたが僕のいふのは簡單なことなのだ。ね、我我の聞いたあの聲の言つたのは『どうしたの？　なぜもつと早くいらつしやらない。……』云云といふのだつたさうだね。それや無論誰が聞いても人を待つてゐる言葉さ。で、あの場所の傳說のことは後にして、虚心に考へると、若い女が——生きた女がだよ、人に氣づかれないやうな場所にたつたひとりでゐて、人の足音を聞きつけて、今の一言を言つたとすれば、これは男を待つてゐるのぢやないだらうかといふ疑ひは、誰にでも起る。あたりまへの順序だ。我我があの際、すぐさう感じなかつたのが反つて不思議だ。あの際、僕があれを日本語で聞いたのだつたら一瞬間にさう感附くよ。そこであの場所だが、氣味の悪い噂があつて人の絶對に立ち寄らない場所だ。しかも時刻はといふと近所の人人がみな午睡をする頃だ。戀人たちが人に隱れて逢ふには絶好の時と所ではないか。——そ